



記憶の底 ReBirth

@kyo

記憶の底 ReBirth

第零章 記憶

ああ……と、自らの口唇から洩れ出た喘ぎ声の甘やかな響きに、羞恥を感じる余裕などとうになかった。自室のベッドの上。夜の闇に抱かれながら乳首に指を滑らせていたマサキは、そろそろ極まりつつある快感に片手を男性器に沿えた。

乳首を嬲りながら男性器を扱く。じくりじくりと身体の芯を犯していた快感が、ゆるやかに全身へと広がっていった。

だのに心の片隅に或る満たされなさ。長い遠征を終えてようやくラングランに帰還したというのに、取り戻した筈の日常に寂しさを感じてしまっている。それもこれもあの男の所為だ。マサキは自身の男性器から手を離れた。そして手を滑らせると、緩く収縮を繰り返している後孔を弄り始めた。

マサキの身体に自身の温もりを覚え込ませた男は、今回、長くともに戦いを続けながらも、マサキに指一本さえ触れてくることがなかった。当たり前だ。マサキは指をゆるりと後孔に差し込んだ。ぞくりと背中中走る怖気にも似た感触が、快感なのか背徳感なのか区別が付かない。

あ、ああ。洩れ出た声を堪えることなく、マサキはその感触に溺れた。

そもそも、彼の不埒な振る舞いに腹を立てたのはマサキの方であつたのだ。

一度目は地上での大戦の最中。彼の指と舌に鳴かされた。二度目はそれから暫くして。最終決戦を間近に控えた夜のことだった。彼はマサキを抱いた。マサキの嗜好を見抜いた上で、マサキが逃れられないと予測した上で、マサキに自分を求めさせた。それだけでもマサキにとっては屈辱的な記憶であるのに、三度目の彼はあろうことか、ラングランとシュテドニアスの戦争終結後、シュテドニアス残軍との戦闘のダメージで記憶を失つマサキに手をかけてきた。

彼の男性器に深々と貫かれたマサキは、知ってしまった快感に泣き喘がずにいられた。なかった。

ただ男性器を扱くだけの自慰行為では、飽き足らなくなって久しかった。

自らの手を他人に見立てて全身を嬲る。あの男と性行為に及んでからは、後孔を責めるようにもなっていた。だから彼の男性器に貫かれたマサキは、その現実を認めざるを得なくなった。

——自分が求めていたものは、これだったのだ……

深い悦楽の中で、マサキは幾度もの絶頂オーガズムを迎えた。枯れ果てた陰囊が精液を吐き出せなくなっても、絶頂オーガズムに限りはなかった。肌という肌に紅斑を刻まれながら、より深く、より奥へと、マサキは彼を招き入れた。

確かにそれはマサキが自ら招いた事態であった。記憶がなかったからとはいえ、性行為を彼にねだってしまった。だが、正常な状態にないマサキを目の前にして、理性を保つことをしなかったのは彼の方であったのだ。その日々を、記憶を取り戻した今に至るまで連続した記憶として持っているマサキは、だからこそ、記憶のない自分がかしてしまったことと、記憶のない自分に手を出してきた男のしてしまったことに腹を立てていた。

けれども男は良心を捨てきつた訳でも、理性を失いきってしまった訳でもなかったようだ。

戦乱の最中であつては、ふたりきりになれる好機チャンスなどそうはない。ましてや彼には陰に日向に付き従う仲間がいる。特に彼に恋情を抱いているふたりの女性は、四六時中彼に付き纏つては世話を焼きたがつて仕様がなかった。

そうそう、都合のいい偶然が何度も訪れる筈などない。そのぐらゐは如何に呑気な性質のマサキでも理解していた。

——んっ、んん……はあ、あ……っ……

マサキはいよいよ切なくわななき始めた自らの口唇に、我慢の限界を悟つて指の動きを早めた。脳裏に思い浮かぶのはあの男の取り澄ました顔。マサキ、と、彼が自分を呼ぶ声が耳の奥に木霊する。

腹立たしいのに疼いて仕方がない。

柔らかい指の、或いは濡れた舌の感触が肌に蘇ってくる。ああ、イク。マサキは乳首を弄りながら、後孔に挿し入れた指を抽送させ続けた。びりびりと痺れるような感

覚が、陰茎の底から這い上がってくる。

果たしてあの男は、三度のマサキとの過ちをどういった考えで犯してみせたのだろうか。

他人の目がある場となると、途端に一定の距離感を保ってみせる男。秘密——と、口にした通り、彼はマサキとの関係を、他人に覺られぬように振舞い続けている。彼の見えぬ本心は、マサキを相応に不安にさせていた。

期待を——してしまっていたのだ。

二度あることは三度ある。男の存在を近くしたマサキは、覚えてしまった快感があるからこそ心を揺らしてしまっていた。彼はいつかロンドベルの艦内でそうしたように、マサキの許に忍んでくるのではないか。だのに男はそういった事實はなかったとばかりに、全く普通の態度でマサキに接してくる！ これでマサキが落胆しない筈がない。

——はあ、ああ、ああつ……

仲間と寝食を共にしている間は控えていた自慰行為。戦場で過ごした日々の合間に

飢えを感じる機会がそれなりあったマサキは、ラングランへの帰郷が決まった瞬間、ようやくこれで高まりきった欲望を消化出来るのだと思った。

それだのに。

どれだけ自らを慰めても、満たされない。常に欲望が胸の奥で燻ぶっている。あの熱い昂ぶりが欲しい。マサキは蕾で咥え込んだ指をより深く後孔に収めながら、記憶の底に封印していた彼との性行為を脳裏に描き出した。

※ ※ ※

お兄ちゃん、おはよ。部屋の中を歩き回る気配にマサキが目を覚ますと、カーテンが開かれる。

とうに光を強めていた太陽は、今日もラ・ギアス世界を燦燦と照らしているようだ。顔に降り注ぐ陽射しに呻きながら瞼を開いたマサキは、ややあつてベッドの上で身体を起こすと、珍しくも自分を起こしに来た義妹にその理由を尋ねた。

「……何だ。何かあったのか」

ラングランへの帰還を果たしてひと月。それまでの激動の日々が嘘のような穏やかな生活。マサキはゆるやかに過ぎてゆく時間を噛み締めるようにして毎日を過ごしていた。

プレシアとふたりで街に出ることもあれば、訪ねてきた仲間たちと騒ぐこともあった。時には気紛れにサイバスターを駆って西へ東へ。知り合いを訪ねて回ることもあれば、ただラングランの変わらない自然の景色を眺めて回るだけのこともあった。

誰に気兼ねをするでもない生活。自由に動き回れる時間に限りがないという現実は、戦いに明け暮れた生活で疲弊したマサキの心を、徐々にではあったが回復へと向かわせていた。ようやく日常生活に戻って来たのだという実感。これまで常にやるべきことに追われていたマサキは、真実の休息を得る機会に恵まれたことで、自分を振り返る余裕が生まれつつあった。

「うん、ちよつと……」

歯切れの悪いプレシアの返事に厄介事が起きたことを悟ったマサキは、仕方なしに

ベッドから出た。クローゼットから今日の服を選び出し、さつくりと着替えを終える。義兄の着替えは見慣れてしまったようだ。マサキは部屋の中で待ち続けているプレシアを振り返った。

「で、誰が尋ねて来たって？」

彼女がこうした態度を見せる時は、面倒な人間が家を訪れた時でもある。

波風立たずに過ぎた日々の終わりはいつだって突然だ。ややこしい人間関係を構築している魔装機操者たちにとって、騒動の火種は戦争だけに限らなかった。心構えだけは充分にしておこう——覚悟を決めたマサキはプレシアの次の言葉に耳を傾けた。

「それが……あの、テリウスさんが……」

「何だって？ テリウスだと。何の用だ」

「お兄ちゃんに用があるって」

「用事の内容くらいちゃんと云えよ。あのお気楽野郎はよ。あの野郎のところでは何を学んだんだ」

部屋を出たマサキは、後を付いてくるプレシアとともにリビングに向かった。

リビングの中央に設えられた年季の入った応接セット。ソファに身体を収めたテリウスが、窓の外をぼんやりと眺めている。彼の様子を目の当たりにしたマサキは、特に変化を感じさせない彼の姿に幾分心を落ち着かせた。

「やあ、マサキ」

気配でマサキの登場に気付いたようだ。マサキに視線を向けてきたテリウスが、テーブルの上に置かれているアイスティーのグラスを取り上げる。中身はさして減っていないように見えたが、薄茶けた色になってしまっている辺り、氷が解けてかさましさだけのようなようだ。

マサキはその向かいのソファに腰掛けた。結構待ったよ。云いながらテリウスがグラスに口を付ける。

「お前がひとりで俺を訪ねてくるなんて、珍しいこともあるじゃねえか。明日は雪だよ」

「それだけ僕も成長したってことだよ」

「ひとりで出歩くのに成長もクソもあるか。で、何の用だって？」

キッチンにてマサキの分の飲み物を用意してきたようだ。リビングに戻ってきたプレシアからグラスを受け取ったマサキは、起き抜けの一杯とそれを胃袋に収め、テリウスが本題を口にするのを待った。

自分に用件を明かさなかったことで、深刻な内容だと受け止めたのだろう。直ぐにリビングから姿を消したプレシアに、「そこまで重要な用事じゃないんだけどね。でも……」テリウスが心なしに気まずそうに言葉を継ぐ。

「彼女は気にするんじゃないかってね。まあ、これは僕の個人的な判断だけど」

「いいからさっさと用事を云えよ。あの野郎がどうしたって？」

「よくわかったね」

感心した様子のテリウスに、わからいでか。マサキは溜息を吐いた。

シュウⅡシラカワという人間に対して思い含むところのあるプレシアに、シュウ自身もまた思うところがあるようだ。決して慣れ親しむとはいかないふたりは、微妙な空気感で会話することも珍しくない。

そういった雰囲気シュウの仲間であるテリウスも感じ取っているのだろう。プレ

シアの前でその名を出すのを避けた彼に、「そういう気遣いこそが余計なお世話だっ
て思わねえのかね」マサキは溜息とともに吐き出した。

周囲が気を遣えば遣った分だけ、彼らが感じている気まずさは増してゆくばかりだ。
だったらいっそももなかったように振舞えばいい。そう、マサキたちがシユウを恨む
ことを止めたように。そうすれば彼らも自分たちの因縁に一々囚われることもなくな
るだろう。

「そうは云つてもね。彼は立派な剣術指南役だっただろう」

面を上げたテリウスの視線がマサキを通り越して、背後にあるサイドボードに向け
られる。テリウスの視線を追ったマサキは、その上に飾られている写真立てに目を留
めた。プレシアとマサキとゼオルト。三人で並んで撮った最初で最後の写真がそこ
には収められている。

「お前がおっさんと顔を合わせる機会ってあったっけか？」

「噂に聞くことはあったけどね。顔を合わせる機会はそんなにはなかったかな」

「だったら余計な気を遣うんじゃないやねえよ。話が進まなくなるのはその所為だろ」

愚痴めかして言葉を継げば、そこでようやくテリウスは話が本題に入っていないことに気付いたようだった。おやといった表情になった彼は、半分ほど減ったグラスをテーブルに戻すと、膝の上で手を組みながら、「そうだった。僕はまだ君にすべき話をしていなかったね」

「お前と話をしていると、話題が同じところをループしてるような気分になるな。で、あの野郎がどうしたって？」

「それなんだけどね」辺りを憚る声。顔を寄せてきたテリウスが、思いがけないことをマサキに尋ねてきた。

「君、シユウの世話をする気はないかい？」

「何だって？」

マサキは目の前のテリウスをまじまじと見詰めた。瓜実顔に浮かぶ半目がちの瞳。とぼけた印象を与える顔立ちだが、彼の眼差しは真剣そのものだ。

担がれているのではないか？ マサキはぼつと胸に浮かんだ疑念を即座に打ち消した。そもそもテリウスは、わざわざここまで足を運び、プレシアにマサキを起こさせ

た上で話をしているのだ。幾らテリウスが人を食った性格をしていようと、そこまでの手間をかけてまでマサキを担ぎもしまい。

けれどもその用件が、あの男の世話とは。

マサキは腕を組んで宙を睨んだ。のつびきならぬ事情であるのは間違いない。大體、あの男の傍には世話焼きなふたりの女性が控えているのだ。サフィーネとモニカ。ふたりに充分に足りる用をマサキに頼んでくるからには、それなりの理由がある筈だ。

「……駄目かな？」

「駄目とかいいとかそういう話じゃなくてだな——」耳に響く自分の言葉。マサキは大きくなりがちな自らの声を潜めた。「プレシアだっているんだぞ。無理に決まってるだろ、そんなの」

気にしない風でキツチンに立っているプレシアの後姿。それでも申し訳なさが先に立つ。だかたこそ、テリウスに向かって身を屈めて小声で囁けば、大丈夫だよ。彼もまたマサキの方へと身体を乗り出してきて小声で言葉を継いだ。

「流星にここであんなに云わないよ。君がこつちに来てシユウの世話をする。それなら

出来るだろう？ 期間は——そうだね……一週間から十日ぐらいでどうだろうか？」

どうだろうも何もマサキには彼らの事情が全くわからないのだ。今のところわかっていることは、あの男が世話が必要な状態にあるらしいということと、その世話がサフィーネとモニカでは足りないらしいということだけである。

前者はさておき、後者であれば、マサキでなければならぬということもないだろう。確かにマサキはあの男と浅からぬ因縁関係にあつたが、仲間というほどに親しい訳ではない。それに、マサキの知らないところでそれなりの人間関係を構築している彼のことだ。その人脈を駆使すれば、喜んで世話をしてくれる人間のひとりやふたりぐらい簡単に見付かるに違いない。

「一体、どういうことなんだ。サフィーネとモニカはどうした。ただ世話するだけつてなら、あいつらで足りるだろ。それが無理でもお前がいるじゃねえか。それも無理だつてんなら、あいつの個人的な知り合いだつているだろ。俺にわざわざ頼むつてことは、それなりの理由があるんだよな？ 先ずはその理由とやらを聞かせてもらえないことには」

マサキの言葉に、刹那、テリウスは酷く困った表情をしてみせた。

どうやら彼は、それをマサキに話してもいいものか思い悩んでいるようだ。暫しの沈黙。マサキに顔を向けたまま幾度か目を瞬かせていた彼は、ややあつて決意を固めた様子で、「わかった。でも事情を話すのはここじや駄目だ。先ずは僕に付いて来てくれないか。シユウの様子を見て欲しい」

第一章 始まりの日

北方に調査に赴いた際に流行り病に罹ったのだそうだ。

それなりに致死率が高いウィルス性の感染症。ワクチンを打たずに現地に入ったのが災いしたようだ。数日と経たずに病の餌食となったシユウは、意識も判然としないまま、十日ほど高熱にうなされ続けることとなった。

テリウスたちが三人で代わる代わる看病に当たること十一日。ようやく小康状態と呼べるまでに容態を落ち着かせたシユウは、ほっと胸を撫で下ろしたテリウスたちを前に意識を取り戻したはいいが、その姿を見るなり盛大に眉を顰めてみせたのだという――……。

「よくよく記憶を失うヤツだな」

テリウスが操縦するガディフォールへの同乗を求められたマサキは、サイバスターを置いてゆくことに不安を感じつつも、送り迎えは僕がするという彼の言葉を信

じてコントロールルームへと乗り込んだ。

「そうだね。でも、今回はそう簡単に済む話じゃなさそうだよ」

「脳がやられちゃった可能性があるってか。厄介だな」

「かなりの高熱だったからね。医者もあの状態から良く意識を取り戻したって驚いていたぐらいでさ」

プレシアにはちよつと留守にすると伝えてある。数日ぐらいなら良くある話だ。彼女は文句を云いつつもマサキの留守を守ってくれる。

問題は二匹の使い魔だった。出来れば連れて行きたくもあつたが、急ぎ立てられるようにテリウスに家から連れ出されてしまった。テリウスとしては事情を知る人数を限りたかったのだろう。それならば、仕方がない。マサキは二匹の使い魔を、そのまま置いておくことにした。

「どこに向かつてるのかわかりやしねえ」

「君は方向音痴だからね」

テリウスとぼつりぼつりと言葉を交わしながら、ガディフオールで道なき道を往く。

自然豊かなラングランでは似たような景色が続くのも珍しくない。メインモニターに映し出される変わりばえのしない風景に、マサキは自分が何処を進んでいるのかわからなくなってしまうていた。

「送ってくれるんだろうな」

「勿論。君ひとりじゃ帰れないだろ」

「なら、いい。話を続けるよ。脳をやられた可能性があるからって、俺に世話を頼むのは筋が違うだろ」

流石は機動力に勝るガディフォルだけはある。サイバスターに匹敵するスピードでラングランの大地を駆け抜けてゆく。ここまできてしまつては、腹を括るしかない。マサキはテリウスに自分にシウウの世話を頼むに至った事情を話すよう促した。

「シウウに敵対する組織が多いのは知ってるだろ」

「まあ、あれだけ派手に動き回ってりやな……」

「半分以上は本人が望んでのことじゃないけどね。だけど、だからって買った恨みが消えるもんじゃない。今のシウウの状態を出来れば他の人間に知られたくないって

うのは、そういうこと」

成程——マサキはテリウスの説明に、彼があ場で口を開きたがらなかった理由を覚った。四六時中命を狙われている彼らにとつて、安全な場所は限られている。街や自宅など論外。定住を避けなければならぬ彼らが何処を拠点としているのか、だからマサキは知らなかった。

大体が人気の多い場所に姿を現わすのに、陰形の術を必要とするぐらいに方々に顔が知られてしまっている男だ。人目を忍ぶように生活をしている彼が、記憶を失った結果、自らの身を護る術までも失ってしまったとしたら……思つた以上に深刻な状況に、マサキの表情は自然と引き締まる。

「それで俺にボディガードを兼ねた世話役を務めろつて？」

「そこまでしてくれるつて云うなら、僕たちとしては願つたりだけど——」

そこで眼下に姿を見せた広大な湖。木々に囲われるようにして広がっている湖にガディフオールが迫る。

「湖に突つ込むつてか？ まつしぐらにも限度があるだろ」

「ここが僕たちの拠点だよ、マサキ」

「気の所為か？ 俺の目にはただの湖にしか見えねえが」

そよ風を受けてさざ波を立てている湖面を滑ったガディフオールが、その中央で動きを止めた。ちよつと待つて。そう云ったテリウスの口から、続けて聞き慣れない呪文が流れ出る。ややあつて大地が嘶くように音を轟かせる。

次の瞬間、さながらモーゼの十戒のように湖面が二つに割れた。

湖底に口を広げているカタパルト。どうやら格納庫に続いているようだ。大規模な仕掛けが動くのを目の当たりにしたマサキは感嘆の溜息を洩らした。尻尾を掴ませることなく動き回っている彼ら一団に、マサキは常々疑問を抱いていたが、それはこうしたカラクリであつたらしい。

「そりゃ、お前らを見付けるのが難しい筈だ」

「自力で作ったもんじゃないよ。科学文明時代の遺跡を借りてるんだ。システムはシユウが作り替えたみたいだけだね」

カタパルトの入り口を潜り抜けたガディフオールが、更に奥へと進んでゆく。背後

で響き渡った轟音は、カタパルトの出入り口を塞いでいた巨大なハッチが閉ざされた音であるのだろう。細かく震える機体に、マサキはテリウスが身体を収めている操縦席の背凭れを掴んだ。ややあつて開けた空間に出る。格納庫だ。マサキは停止したガディフオールから、テリウスとともに降りた。

「世界大戦に備えて作られた地下指令室だったんだってさ」

「ラ・ギアス世界に眠っているのは只の遺跡だけじゃないってことか……」

「そう。この更に下の地層には、巨人族の文明が眠っているって噂だよ」

辺りを見渡しながらそうマサキに説明したテリウスが、近くで細く口を開いている通路に向かって足を進めてゆく。

薄暗い格納庫に響くふたつの靴音。マサキは背後を振り返った。ガディフオールの隣にウィーゾル、その更に隣にノルスが並んでいる。

最奥にて不気味な光を放っているのは、シユウのグランゾンだ。マサキは首を捻った。巨大なユニットを四体収納しても尚余るだけの余裕ある格納庫。これだけの施設が存在が周知とならずにいるのであれば、シユウを守る為に自分が出る必要はないの

ではないだろうか？

「で、ここでシウウのお守りをしろってか？　これだけの施設だ。特にボディガードが必要な状況にも思えないが」

「彼に記憶を失われたままじゃ困るんだよ」

凜と言葉を継いだテリウスの、底知れぬ迫力にマサキは気圧された。

「そりやそうだが……だからって、俺を呼んでも役に立つことなんてないだろ」

シウウの許で自分を磨き続けた青年は、順調に自分に自信を深めて行っているようだ。以前とは比べ物にならないぐらいに落ち着き払った態度。そして、確固たる意志を秘めた眼差し。その視線は真っ直ぐに、通路の奥へと注がれている。

「あるかも知れないし、ないかも知れない」

カツン……カツン……静まり返った通路に靴音が響く。人が擦れ違えるほどしか幅のない金属製の通路には、壁面に何某かのシステムが動いていることを窺わせる幾何学的な模様が幾つも浮かんでいる。それらはそれぞれに色を変えて、不規則に明滅しながらマサキが行く先へと道を示していた。

続く言葉を待ちながら、テリウスの後を付いてゆく。カツン……カツン……高く響く靴音がやけに耳に障る。落ち着かない。テリウスに絆されて、安易にここまで足を運んでしまった……単身でこの場を訪れることとなったマサキは、果たして自分がここに來てよかったのかと不安になった。

記憶のないシュウはマサキを見てどういった反応をするのだろうか。

それを目の当たりにするのもマサキは怖かった。

以前にも記憶を失っている彼は、その時にはマサキに全く興味も関心も持たない様子を見せている。それは彼にとつてマサキ＝アンドーという人間が、その程度の存在でしかないということを示していた。

確かに記憶がない以上、どう反応しろという話ではあった。ましてやぼつと出の得体の知れない地上人など、自分のことで手一杯なシュウがどうすれば興味を持ったものか。

けれども——マサキはシュウと接点の持ちようがない自らの属性を顧みた。

地上と地底。平民と王族。魔装機計画が発動していなければ、マサキはシュウと街

角で擦れ違うことすらなかったのだ。

決して交わることもないふたつの点。生まれも、育ちも、置かれた立場も異なるふたりが因縁を結ぶこととなったのは、神が気紛れに振った運命のダイスの結果ではない。わかつていても、やりきれない。臍を噛むような気分になりながら、マサキはテリウスの後を行った。

カツン……カツン……耳に障る靴音は途絶えることがない。マサキはなるべく静かに歩くように努めた。それでも鳴り止まぬ靴音は、それがテリウスの足元から発せられている音であるからだ。

無言のまま歩き続けること暫く。正面に扉らしきものが見えてきた。あの先にシュウはいるのだろうか？ マサキは緊張感で喉に溜まった唾を飲み込んだ。

「ねえ、マサキ。君は自分がシュウにとつてどういう存在だと思う？」

テリウスがようやく言葉を口にしたのはその瞬間だった。

「さあな……」マサキは思いがけない質問に動揺した。「因縁が深い相手だとは思っているが」

それは、秘められた関係を結んでしまった相手だったからこそその動揺だった。

好きでも嫌いでもない。どちらかと云えば憎々しい男。けれども、肌を重ね合わせてしまった男。マサキの弱味に付け込むように不埒な行為に及んだ男が、よもやありきたりな感情で自分に接しているとは、さしものマサキも思っていない。

「それだけ？」

「それだけ……って」

間近となった扉は、自動で開くといったことはなさそうだ。固く入り口を閉ざしている。脇に入力装置が存在しているということは、セキュリティコードを必要とするのだろう。流石は化学時代の軍事施設だけはある——マサキはテリウスがその扉を開くのを待った。

「顔を合わせれば嫌味や皮肉の応酬になりがちだけど、僕にはそんな君たちがお互いに執着し合っているように見えるよ」

「そりゃあ気にはするだろ。何をしでかすかわからない危険人物だ。警戒をしておいて損はないってな」

「そういう意味じゃないんだけどね」テリウスの指が入力装置の上を滑る。「それともわかっていて惚けているのかな」

コードを入力し終えたテリウスの向こう側で、低いモーター音を響かせながら扉が開く。途端にぱあっと目の前に広がる白く眩い光。その向こう側から、テリウス？と、モニカの声が聞こえてくる。直後、潮が引くように弱まった光に、視界がクリアになった。

マサキの目が光に慣れたのだ。

壁に直結している入力デバイスに、タワー型となった集積回路。中央にホログラフが層となつて展開している。

扉の向こう側に広がっていた小さなホール状の室内には、様々な機器が並んでいた。それらが何にどう利用されるのか、魔装機以外の機械の知識に乏しいマサキにはわからなかったが、正面の壁に所狭しと並ぶモニターの群れが施設内部を映し出している。辺り、どうやらここはこの施設の管理を行う部屋であるようだ。

「連れて来たよ、サファイーネ。それに姉さん」

部屋の中央では、サファイーネが立体ホログラフを眺めている。入力デバイスの前を離れたモニカに続いてマサキの許へと歩んできた彼女から漂ってくる、ぷん、と匂い立つ甘ったるい香り。彼女の香水の匂いが強いのはいつものことだが、今日はやけに鼻を衝く。

「待ってたわよ、ボーヤ」

言葉とは裏腹に、歓迎しているとは云い難い雰囲気。冷え冷えとした空気が肌を刺す。サファイーネの刺々しさを感ぜさせる声の調子に、乞われてここまで足を運んだマサキは途惑いを覚えずにいらなかった。

自分がここに呼ばれたのは、彼女らの総意ではなかったのだろうか？ そう思つてテリウスを振り返れば、彼は特に感じることはないらしく、普段通りの力の抜けた表情でその場に立っている。

「どこまで話を聞いたのかしら？」

「流行り病で熱を出して記憶を失ったってことしか聞いてねえよ」

「それだけ聞いていれば充分よ」

ふん、と鼻を鳴らしたサファイーネは、まるで勝負を挑んできた敵を迎え撃つような表情だ。

「それと俺を呼んだことの繋がりがイマイチ理解出来ないんだがな」

「そんなの決まってますでしょう」サファイーネの隣で露骨に面白くなさそうな表情を晒しているモニカが続けた。「わたくしたちではシユウ様の記憶を取り戻せなかったのですわ」

「だからそれと俺を呼んだことにどんな関係が」

「自覚がないにも限度がありますわね、マサキ。わたくしたちと違った関係を構築しているマサキだったら、もしかしたらシユウ様の記憶を取り戻せるかも知れない。わたくしたちはそう考えたのですわ。マサキの力を借りなければならぬのは癪に障りますが、シユウ様をこのままにはしておけません」

「そういうことよ」モニカの言葉を引き取ってサファイーネが続ける。「私たちとしては、シユウ様の記憶を取り戻せる可能性がありそうなことは、どんなことであれやっておきたいのよ」

シユウを挟んで女の戦いを繰り広げているらしいサファイネとモニカは、シユウを恋敵扱いしてみせるウエンディやリユーネのようにマサキを恋敵視することはなかったが、シユウと友人関係とはまた違った関係を構築しているマサキに思うところがあるようだ。

マサキが感じている居心地の悪さは、どうやらそうした背景からくるものであるらしい。どいつもこいつも——とは、要らぬ嫌疑をかけられているマサキとしては思わずにはいられなかったが、だからといって、既に考え得る手を尽くした上で自分を呼んだに違いない彼女らをはいそうですかと見捨てられもしない。

「それで俺にあいつの面倒を見ろって？ それだったら顔を合わせるぐらいでいいんじゃないのか」

マサキとしては出来る範囲で協力するつもりではあったが、それとシユウの世話をすることは同一線上に並ぶものであるのだろうか。以前、マサキはシユウに記憶のないうところを保護されているが、彼がそのままマサキの面倒を見続けたのは、王都から離れた場所での出来事であったが為に、頼れる仲間を持たなかったからだ。

今回は違う。シユウには頼れる仲間が側にいる。

だからこそ、疑問に思ったマサキが尋ねてみれば、これみよがしに溜息を吐いたサファイネが嫌気をたつぷりと含んだ声で言葉を継ぐ。

「私たちは警戒されてしまっているのよ」

「何でだよ……って、そうか。記憶がないからか」

「それもありますけど」サファイネの顔をちらと盗み見たモニカが、気まずそうに言葉を継ぐ。「なくなつた記憶は10歳以降のもの。つまり今のシユウ様は、精神年齢的には9歳の子どものものです」

意識を取り戻したシユウは、見知らぬ男女三人に囲まれている状況に強い警戒心を抱いたらしかった。

——それで、あなたたちは何者なのです。侍従というには品格に欠ける格好をしている方がいるようですが。

おもむろに口を開いた彼の言葉に、当然ながらサファイネたちは疑念を抱いた。現在の記憶を失っているのは確かなようだが、全ての記憶を失ってしまった訳でもなさ

そうだ。本当にわたくしどものことを憶えてらっしゃらないのですか。サファイーネの問い掛けに、シユウはただ眉を顰めてみせただけだったという。

果たしてその記憶はどこまで残されているのだろうか？ サファイーネが、モニカが、そしてテリウスが、その確認を続けようとする様子を見て、シユウは自身が奇異な状況に置かれていることを受け入れたようだ。筋道を立てて話をしてくれませんか。静かにそう乞うたシユウは、彼らからここに至るまでの経緯を訊くと、鏡を——と、先ずは現在の自身の姿を検めることにしたのだそうだ。

成長しきった己の特徴ある顔立ちを鏡で見た彼は、特に感慨らしきものを持つことはなかったようで、あっさりと自身がとうに青年と呼ばれる年齢になっていることを受け入れたのだという。こんな風に成長したのですね。そう云って口元を歪めてみせると、自身の記憶が9歳の或る日を境に失われてしまっていることを打ち明けてきたのだとか。

十年以上もの長きに渡る記憶の欠落をすんなりと受け入れてみせる辺り、合理的主義者である彼らしい。

だが、その後自身が進むこととなった人生について彼らから聞かされることとなったシユウは、それらを素直には受け入れ難い現実として認識したようだ。

特に邪神教団との関りはシユウを懐疑的にさせた。

彼は珍しくも強い口調で話の根拠となる具体的な品の提示を彼らに迫ると、モニカが差し出した装飾品に少なからぬ衝撃を受けた様子だったという。

直系血族だけが持つことを許されるラングラン王家の紋章が刻まれたブレスレット。それは彼の記憶の中では幼い子どもであったモニカが、確かに目の前の女性であることを表していた。ひとりで考えたい。過酷な現実を向き合わなければならなくなったシユウは、北方からこの地へと戻ってくると、そう云っては自宅に籠る日々が続いているのだという。

「そういった状況なら、俺があいつの世話をするのは却って逆効果なんじゃないか。見ず知らずの他人だぞ」

話を聞き終えたマサキは宙を仰がずにいられなかった。

彼が現実拒否感を示すなど思ってもみなかった事態だ。いつでも冷静に、理的

に物事を処理してみせる彼は、自身の過去に於いてもそうした傾向を顕著とした。サーヴァ・ヴォルクルス。破壊神に操られこのラングランに災厄を振り撒いた男は、正気を取り戻してからといって自らの悲惨な人生に溺れるようなことはなかった。

そもそもそうした過去さえも事実として受け入れ、したたかに戦い続けているのがマサキの知るシウ・シラカワだ。彼のそういった不撓不屈な精神性に一目置いているマサキとしては、特徴的な性質を失ってしまった彼と向き合うのは流石に心細さが勝る。

「それでも僕たちに頼れるのは君しかない」

「お願いします、マサキ。わたくしたちは北方で調査の続きをしなければならないのです。それがシウ様が記憶を失う前に手掛けていたこと。この機会を失えば、次に調査の機会が巡ってくるのはいつになるかわかりません」

「一ヶ月も二ヶ月もって訳じゃないのよ。ボーヤにだってしなければならぬことがあるでしょ。私たちが戻ってくるまでの間でいいのよ。それで記憶が戻らないようであるのなら、また他の方法を考えるわ」

口々に頼み込んでくる彼らの真剣な様子に、わかったよ。マサキは視線を彼らに向けた。

押し切られる形となつてしまったことに不安は残るが、このままそれは無理だと断つてしまうのも後味が悪い。何よりシュウの精神年齢が9歳であることがマサキの背中を強く押した。それなら彼との間に間違いが起こることはない筈だ。

問題はどうか彼と接していくかだが、こればかりは彼の出方を見ないことには決められそうにない。いずれにせよ、記憶を戻すなどといった大袈裟なことは考えずに、ボディガードぐらいのつもりでいればいいのだ。そういった任務ならマサキにも経験がある。

「記憶を戻せるかはわからねえが、世話はする。それでいいだろ」

「だったらシュウの許に案内するよ」

安堵の表情を浮かべたテリウスが、シュウの許へと案内をするつもりなのだろう。入ってきた通路からは右手奥側にある閉じている扉を開く。彼に続いてその場を去ることにしたマサキは、扉を潜り抜ける直前、部屋に残ったままのサファイーネとモニカ

をちらと窺った。

「わたしたちは直ぐに北方に向かいます。なるべく早く戻ってきますので、それまでどうかシユウ様を宜しくお願いしますね」

四六時中シユウに纏わり付いているイメージのある彼女らだが、マサキたちに付いて来るような真似はしないようだ。それぞれ持ち場に戻って作業の続きを始めた彼女らに、マサキは背後で扉が閉まるのを待ってからテリウスに尋ねた。

「珍しいじゃないか。あいつらが付いて来ないなんて」

「それだけシユウの警戒心が強いんだよ。モニカ姉さんや僕の名前には覚えがあるようだけど、自分が知っている姿より成長してるしね。彼にとっては他人も同様、なんじゃないかな。ましてやサフィーネなんて名前も知らない存在になってるし……」

仄暗い通路を往く間、テリウスは言葉を選びながら、ぽつりぽつりとマサキにシユウの状態を語って聞かせてきた。

届けられた食事を口にする以外は、殆ど部屋に籠りきりなこと。偶に部屋から出てくることはあるが、それはテリウスたちとの交流が目的ではなく、この巨大施設

の構造やシステムに強く興味を惹かれてのことであること。部屋の中で何をしているかはわからないが、様々な文献を漁っているらしい様子が窺えること……人は記憶を失った程度では、その核となる特性までもを失ったりはしないのだろう。幼くともシウらしさを感じさせる行動の数々に、そうか。と、マサキは頷いた。

「この辺りは施設を運用するスタッフの居住区だったみたいだよ」

ややあつて、複数の扉が並ぶエリアに出る。

無機質な中にも生活感が窺えるのは、彼らの匂いがするからだろうか。マサキは左右を見渡した。扉の数は全部で10枚。通路の左側に寄ったテリウスが中ほどの扉の前で足を止める。この部屋だよ。ブザーを鳴らしたテリウスが、中からの返事を待って扉を開く。

マサキはテリウスの後に続いた。

キッチンにリビング、そして寝室と三部屋で構成されている居住スペース。ざっと見た限りでは必要な調度品はすべて揃っているようだ。ちよつとしたホテルといった様相を呈している室内で、シウは読書に励んでいたのだろう。ソファに収まってい

た身体が、テリウスを向く。

「そちらがマサキですか」

既に話を通してあったのか。短くも鋭い視線をマサキに向けてきたシュウは、「もう結構ですよ、テリウス。どうぞ僕に構わず北方へ向かってください」そうテリウスに告げると、手元の書物へと視線を戻した。

「マサキに使う部屋を教えなければならぬんだ」テリウスは自身を拒絶するようなシュウの態度に構わず言葉を続けた。「君からの挨拶はそれだけかい、シュウ。これから暫くの間、君の世話をすることになる相手だけど」

「なら、それが終わってからこちらに来てもうことにしますよ。守って欲しいルールを伝えなければならぬですし」

それに領いたテリウスとともに部屋を出たマサキは、続けてここに居る間に自分が使うこととなる部屋に向かった。

シュウの部屋のふたつ隣の部屋は、間取りを同じくしている上に、衣類や食料も含めて、必要なものが全て揃っている状態だった。恐らくこうなることを見越した上で

準備を進めていたのだろう。荷物を持たずにここまで来てしまったマサキからすれば有難いこと他ない。

「このままで充分生活が出来るな」

「僕たちの我儘を聞いてもらうんだ。このぐらいいはね」

「お前たちは直ぐに出るのか？ モニカの口振りだとそんな感じだったが」

「うん。だから君をこうして呼んだ訳だしね」

北方での調査は一刻を争う状態であるようだ。部屋の中を検め終えたマサキに、後のことはシユウに訊くようにと云い残してテリウスが去って行く。ひとり残される形となったマサキは、途惑いを覚えながらも、シユウの言葉に従って彼の部屋を訪ねることとした。

ブザーを鳴らして少し待つ。

どうぞ——と、中から声がするのを待つて部屋の中に足を踏み入れてみれば、先程よりは残りの頁を少なくした本を膝に乗せたシユウがいる。見た目は何も変わらないが、以前の彼と比べると幾分神経質そうに感じられる。それはきつと彼の切れ長の眦

が、その險しさを増しているからであるのだろう。

「マサキ……ですよね。訊いたところによれば、あなたは風の魔装機神サイバスターの操者であるのだとか」

「ああ。つて云つても、今回は機体を持ってきてないがな」

「それは残念です」本を畳んだシユウが向かいのソファを勧めてくる。「魔装機計画がどう成就したのか見たくあったものですから」

マサキはシユウに勧められるがままソファに腰掛けた。彼の眼差しは険しいままだったが、マサキに対して拒否感を抱いているのではなさそうだ。穏やかな声のトーン。マサキが良く知る彼の口振りとは比べると、利発さが勝っているようにも感じられる。

「持って来れるなら持って来たいところだが、ここが何処かわからないしな……」

「ここはラングラン州の南に位置するバオダ州です」

「なら、戻るのに半日以上はかかるな」マサキは眉間に皺を寄せた。

一時間余りの旅路は、機動力に優れるガディフォルだからこそその移動時間であったのだ。それを陸路でするとなると、乗り継ぎの手間なども相俟って何倍もの時間が

必要となる。参ったな。マサキは呟いた。それだけ距離が離れているとなると、方向音痴のマサキでは額面通りの時間では戻れない。

「あなたが何処に住んでいるか僕は知りませんが、テリウスが戻ってくるのかかった時間からして、それなりの距離を移動してここまで来たのは間違いないでしょう。サイバスターが必要であるというのであれば、僕が付いて行くという手もありますが、果たしてあの機体を僕が操縦出来たものか……」

どうやらシウは、グランゾンの存在を認知はしているものの、操縦をしたりといったことは経験していないようだ。そう言葉を継ぐと、物憂う表情をマサキに向けてきた。

凡そ初めて見るシウの弱気な態度に違和感は拭えなかったが、今の彼は大幅に記憶を失っている状態だ。そもそも、未来の自分の技術や知識に追い付けというのは無理がある。気にするな。マサキは彼にそう声をかけて、万が一の事態を脳内でシミュレートした。

サイバスターを欠いた状態で何日も過ごすのは、魔装機神の操者となつてからは初

めでの経験だ。

特殊な状況に不安を感じはしたが、この施設が有している設備が設備だ。開錠ナンバーを必要とする扉は、容易には開けられもしまい。仮に侵入者を許したとしても、この狭いエリアで迎え撃てば大丈夫だろう。陸に上がった戦士が相手ならば、剣聖の称号に与っているマサキに分があるのは明らかだ。シユウひとりぐらいであれば、守りながら戦うのに不自由はなかった。

「サイバスターを見せてやれないのは残念だが、ここに留まっていた方が安全なのは違う。下手に動き回らずに期限まで過ごすことにするさ」

「彼らから聞きましたが、僕は相当に方々で恨みを買っているようですね」

苦笑いを浮かべたシユウがソファから立ち上がる。何か飲みますか。シユウに尋ねられたマサキは、何があるんだ。訊き返ししながらキッチンへと向かうすらりと伸びた長軀を目で追った。

「紅茶とコーヒーですね。冷たい飲み物はあまり好きではないので」

「なら、紅茶にしてくれ」

既に湯は沸かしてあったようだ。ぎこちない手付きでケトルを手にしてポットに湯を注いでいる彼に、俺がやろうか？ やり慣れなさを感じ取ったマサキは声をかけた。「大丈夫ですよ、マサキ。もし記憶が戻らなかつたら、僕はこの僕として生きて行くしかないでしょう。だったら、出来ることを多くしておかなければ」

マサキの知ることのない時間のシュウⅡシラカワという人間は、どうも皮肉屋な現在の彼とは異なり、聡明な性質が前面に押し出された性格であるようだ。歯切れ良く言葉を紡いでみせる彼は、自らに降りかかった奇禍を運命として受け入れてしまったのだろうか。迷いを感じさせない言葉の数々に、マサキとしては違和感が募る。

マサキはシュウが歩んできた苦難の道のりに思いを馳せた。

三柱神がひとり、破壊神サーヴァⅡヴォルクルスによる支配……死を迎えたことによってその鎖から解放されたシュウは、ルオゾールの手によって与えられた再びの生にしがみ付くようにして生きている。

凡そ普通の人間では歩めもしない人生。彼が何を求めて生き続けることを選択したのか、マサキにはわからない。けれども彼は新たに得た人生を——帰るべき場所を持

たないその人生を、自らの居場所を獲得する為の戦いに捧げる決心を固めたのだろう。それは邪神教団と対立することとなっても変わらない。むしろそれこそが自らに与えられた使命と云わんばかりに、彼は悪しき組織を殲滅すべく、方々で暗躍を続けている。

打てる手を打ち切るより先に、もしもの未来を案じてみせるなど彼らしくない。マサキは記憶を失ったシユウに感じていた違和感の正体がわかった気がした。マサキの良く知るシユウⅡシラカワという人間は、自身の幸福を獲得する為に、真っ向から運命に立ち向かってみせる人間だ。そう、元来、彼はこんな風に聞き分けのいい人間ではないのだ。

「未来の僕は紅茶といった嗜好品には拘りがあつたようですね」

ややあつて差し出されたティーカップ。マサキはシユウが淹れた紅茶をひと口啜つた。きつと上質な茶葉を使用しているのだろう、薫り立つ風味が口の中にふわりと広がる。

「そうだな。味には煩い奴だったよ」

何気なく放ったひと言だったが、シユウからすればまさに求めていた言葉であつたようだ。それが聞けただけでもあなたに会った甲斐はあつた。そう呟いた彼は、神経質な表情から一転、口元に笑みを湛えてみせると、「あなたに聞きたい話が沢山あるんですよ、マサキⅡアンドー」そう云つて目を細めてみせた。

何が彼の関心を引いたのかマサキにはさっぱりだったが、どうやらシユウはマサキⅡアンドーという人間を、自分にとつて有益な情報を齎してくれる存在として認識してくれたらしかつた。

マサキは胸を撫で下ろした。

この先一週間以上に渡つて生活をともしなければならぬ相手である。シユウとしてはあまり警戒を強めてもと思つたのかも知れない。いずれにせよ、共同生活の相手が警戒心を解いてくれたのは幸いだつた。マサキの役目は彼の世話だけに留まらず、ボディガードにまで及んでゐるのだ。ある程度は信頼度を稼いでおかなければ、いざという時の立ち回りに支障を生じさせかねない。

そういつた心配をせずに済むのは、素直に有難かつた。マサキは手にしたティーカッ

プをテーブルに置いた。そして柔らかに微笑み続けているシュウに向き直った。

「聞きたい話か。そういった話ならあいつらの方が良く知ってるんじゃないか」

「彼らは僕の仲間として行動をとともにしている人たちなのでしょう？ その所為か、彼らの話は主観に基づいて語られているように感じられるのです。僕が聞きたいのは、そういった都合のいい話ではありません。良いも悪いも含めてありのままの事実を知りたいのです」シュウは手にしたカップの中身に目を落とすと、愁いを含んだ表情で絞り出すように言葉を吐いた。「そうでなければ、僕は自分が犯してしまった罪を償えない。自分がどういった経験を経て変わらざるを得なくなったのか、先ずはそれを知らないことには……」

マサキはサファイアとモニカに聞かされた話を思い出した。邪神教団に属していた事実に対して懐疑の念を抱いたらしいシュウは、それもあって彼らと距離を置いてしまったと聞いている。それは、それだけ9歳の彼にとって、現在の彼が歩んできた人生が信じ難いものであったということだ。

「だが、俺に話せることには限りがあるぞ。そもそも俺は地底世界の人間じゃない。

ラ・ギアスに召喚されたのも、お前が教団の人間となつてかなりの年月が経つてからだ」

「知っています」シュウが深く頷く。「だからこそあなたの情報が大事なんです、マサキさん」

陶器のように白く滑らかな肌に、深く色を湛えている紫水晶の瞳。彼が顔を上げた次の瞬間、整い過ぎたきらいのある面差しに暗く影が落ちた。それが室内を照らしている照明の光の加減であるのか、それとも現状に彼が疲弊してしまっているからこそこの翳りであるのか、マサキにはわからない。

「あなたは僕を殺した」

不意に耳を貫いた言葉は、思いがけずマサキの心を深く抉った。

自らの運命を受け入れて潔く月に沈んでいったシュウは、マサキにとっては斃さなければならぬ敵であつたし、ラングランの未来視たちに魔神と予言されし脅威でも

あつたが、同時にサーヴァーヴォルクルスに自意識を奪われた操り人形でもあつたのだ。

それをマサキは知らなかった。

知っていたならば、また違った手段を取っていた——シユウの言葉に頷いたマサキは、まじまじと彼の顔を見詰めた。何ら感情が読み取れない。良く出来た彫刻のように人間味を感じさせない顔が、何を考えているかわからない表情を浮かべてマサキを見詰めている。

「でもそれは、僕の仲間を称する彼らだからこそその表現です。魔装機神サイバスターの操者として使命を負っているあなたからすれば、僕の死はまた違った表現になることでしょう。未来の僕にしてもそうです。彼にとつてそれは救いであつたかも知れないし、地獄への入り口であつたかも知れないですね。僕が云いたいのはそういうことですよ、マサキ」

「成程。お前が求めている話がそういった意味のものであるのなら、俺でも役には立てそうだ」

「俺でも、は余計なひと言ですね。あなたは唯一無二の立場に就いている。その視点
は他の人間では持てないものです。もっと自信を持つてはくれませんか、マサキⅡア
ンドー」

「そうは云われてもな」マサキはティーカップを再び取り上げた。「知らないことが
多いってのも問題だろ。誰かの正義は誰かの悪意で、誰かの悪意は誰かの正義だ。万
人が等しく満足する平和なんてモンはないとわかっちゃいるが、その公平さを判断す
る材料を持たないってのはな」

温くなった紅茶を口に含み、喉を潤す。

他に取れる手段を持ち得なかったマサキは、魔装機神の操者としてシユウの命を終
わらせることを決意した。その選択が間違っていたとは思わない。あの時にはそれし
か取れる手立てがなかった。

戦いは選択の積み重ねだ。そうした自身の選択の重みを背負って生きて行くのが魔
装機神の操者の使命でもある。だからこそ、マサキは目の前のシユウに謝罪の言葉を
口にはしなかった。

全ての責任を負うのは自分だ。

それでも心が揺れてしまう瞬間がある。いつだったか、シユウがマサキに語って聞かせてきたことがあった。正義とは独善と隣り合わせのものである。それはマサキを指しての言葉ではなかったが、マサキに正義とは何かを深く考えさせた。

「知らないからこそ、公平に判断出来ることもありますよ」

「そうかねえ。目の前の争いを場当たりの収めていったところで、根本的な部分は解決していかないと思うが」

魔装機神サイバスターの操者として唯一無二の立場に在るマサキは、他人からすれば自信たっぷりにその道を歩んでいるように見えることだろう。内心など誰もわかりはしないものだ。マサキは自分が発した言葉を裏付ける記憶を、瞬時に脳裏に蘇らせていた。

まだサイバスターに選ばれる前、ジャオームを相棒に戦いの場に赴いていたマサキは、ただただ目の前で起きるかも知れない悲劇を防ぐことばかりを考えていた。あれはマサキの未熟さの表れだった。

マサキは他に判断材料を持たない世界で、武力とは悪である。その一念だけで行動していた。そう、己が揮う暴力的なまでに強大な武力について考えを及ぼすことなく、マサキは奢っていたのだ。自分こそが正義だという大義名分を与えられたことに。

「では知っていたとして、それをどう解決しますか」

マサキはシュウの言葉にはつとまって顔を上げた。

「あなたに与えられているのはサイバスターという力だけです。双方が武力に頼っている状態では、どれだけ画期的な解決策があつたとしても、効力が発揮されることはないでしょう。先ずは争いを収めることから。あなたたちに求められているのは、様々な立場の人間たちが始まりの一步を踏み出す為の土壌を作ることですよ」

流星は十指に及ぶ博士号を有することとなつた男。才能に恵まれた人間は、幼少期からその萌芽を露わとする存在であるらしい。迷いを知らぬ様子で淀みなく言葉を吐いたシュウに、成程な。頷きかけたマサキは、そこではたと我に返つた。

「ちよつと待て。お前はそういう話を俺としたのか？」

「いいえ。ですが、こういった話をするのは嫌いではありませんので」

「子どもの頃の方が厄介な奴に思えるな。いや、今のお前も充分に厄介ではあるんだが……」

思わず口を衝いて出た率直な感想に、しまった。と、マサキは思うも、シユウが気分を害した様子はなさそうだ。むしろ喜んでいるのだろうか。目を細めて口元を緩ませている彼は、今にも膝を打ちかねない勢いでマサキの言葉に飛び付いてくる。

「それですよ、それ。そういった彼らにない評価が僕は聞きたいんです」

自分という人間を腐すような言葉を吐かれて喜ぶ人間が何処にいたものか。シユウの感性のずれた反応に、流石にマサキは顔を顰めた。

「お前、変わってるって云われないか？ 云っておきながら云うのもなんだが、相当に失礼なことを云ったぞ、俺」

「可愛げのない子どもでもあることに自覚はありますよ」

どこか稚さを感じさせる笑顔。空となったティーカップを片手に立ち上がったシユウが、おかわりを尋ねてくる。

「牛乳があれば、カフェオレが飲みたくあるんだが」

「ありますよ。少し待っていてください」マサキから空のティーカップを受け取ったシュウがキッチンに立つ。

どうも今のシュウにとつて自分の身体は扱い慣れないものであるようだ。距離感が掴めていない動き。彼の動作にマサキがぎこちなさを感じてしまうのは、彼が一足飛びに成長を迎えてしまった自らの身体を持て余しているからであるのだろう。

不思議な少年だ。マサキはその背中を眺めながら、彼と現在のシュウの違いに思いを馳せた。

そもそもマサキとつて、シュウⅡシラカワという男は謎に包まれた人間であつた。それなりに長い付き合いになりながらも、住居や連絡先ひとつ知らない。当然、プライベートをどう過ごしているかなど知る由もない。

顔を合わせるのは大半が戦場で、日常生活をとにもすることなど滅多にない。シュウと個人的な話をする機会が限られているマサキは、既に一線を超えているにも関わらず、だからこそ9歳のシュウの求めに自分が応じられる筈がないと思つてしまった。何を思つてシュウはマサキを抱いたのか。その答えをマサキが知ることは、もしか

すると一生ないのかも知れない。

熱で変性してしまった脳が元に戻ることは先ずない。

彼の健忘が熱病による脳の不可塑的な変化を原因としているのだとしたら、9歳のシユウ——或いはクリストフⅡマクソードという人間は、このままシユウⅡシラカワとしての人生を歩むことを余儀なくされる。彼は現在のシユウとの間に断絶を感じている様子だ。それもその筈だ。竹を割ったような性格、9歳のシユウは幼さ故か。迷いや怖れを知らぬ世界に生きている。

マサキは額に手を当てて、長い溜息を洩らした。どうにかして彼の記憶を戻してやらねば……そうでなければ、今後の人生は彼にとって相当に生き難いものとなることだろう。長い記憶の断絶。このままでは、シユウは10年以上の経験と知識を新しく獲得していかねばならなくなる。

けれども、どうやればシユウの記憶を蘇らせられたものか。

マサキは途方に暮れた。シユウが置かれている状況は、マサキが以前置かれていた状況とは異なるものだ。ウィルス性の流行り病。熱での脳の変性もあれば、ウィルス

が脳に入り込んだ結果の可能性もある。それと比べれば、頭を強く打ったことで記憶が飛んだマサキが記憶を取り戻すのは容易いことだ。

時間の経過で回復する一時的な健忘。シユウがマサキを手元において経過を観察することにしたのは、そういった経緯もあつた……。

「どうかしましたか、マサキ」

余程、難しい顔をしてしまっていたようだ。マサキはかけられた声に顔を上げ、シユウからマグカップを受け取った。

牛乳がたっぷりと入れられたカフェオレは、こちらにも上質な素材を使っているようだ。口に含めばふわりと広がる牛乳の味。かなり濃い。これはかなり飲み甲斐がありそうだ。マサキはゆっくりと噛むように味わいながら言葉を継いだ。

「以前、記憶を失った時のことを思い出してたんだ。今のお前の役に立てばと思ってな……」

「ああ、僕が以前に記憶を失った時の」

「そつちじゃねえよ。俺が記憶を失った時の話だ」

「そういつたことがあったのですか」シウは微かに瞳を開いてみせた。「それは初耳です」

「なら、お前は仲間には話してなかったんだな」

記憶を失っていたのは僅かな日々だった。突如として取り戻された記憶は、口にするのも憚られるような状況下でのことだったからこそ、これまでマサキに振り返らせることを拒絶させていた。

あの時のマサキは自分が何者かもわからなければ、自分が何処にいるのかもわからなかった。残っていたのは、生きていく上で最小限の日常生活を送る為の知識だけ。何せ、洗濯機の回し方ですらわからなかったぐらいだ。どうして自分が何者かをわかったものか。

自分を構成する記憶の全てを失ってしまったマサキは、正体不明な自分という存在に押し潰されそうになっていた。

だから、マサキはシウに気を許してしまったのだ。

繰り返し、繰り返し、重ねた口唇。シウが与えてくれる温もりは、マサキが感じ

ていた不安と孤独を和らげてくれた。彼さえいればどんな困難も乗り越えられる。それは、マサキを呼び求めるサイバスターの声よりも確かなものだった。

今となってみれば、彼よりも自らの仲間の方が信用出来る存在であるのは確かなことだったし、それ以上にサイバスターやサイフィスの方が信用に足るのは間違いないことだったが、あの時のマサキにとっては、記憶の不確かなマサキの存在を証明してくれたシウしか信頼を寄せられる対象はなく。

彼を世界の全てとして生きた日々。その記憶を、今のマサキは欲望の捌け口に使う為にしか思い返すことがない。

巫山戯ているのは自分の方だ。マサキは自らを嘲るしかなかった。何を考えているかわからない男の不埒な振る舞いなど、肉欲に全てを没われてしまっているマサキが夜な夜なしている行為と比べれば、かなり良心的であるとも云える。

けれども、それをマサキはシウに打ち明けはしなかった。

「僕はそれを知っていたのですか。あなたが記憶を失ったことを」

シウが仲間にマサキの一件を伝えていなかったのは幸いだった。細かい点で矛盾

が生じて話せない内容ばかりだ。今のシユウにしても知らないからだろう。先ず聞くだろうと思われることから尋ねてくる。それでいい。マサキは努めて平然と振舞った。

「お前が俺を助けたんだよ。戦鬪で頭を強く打っちゃって……意識を失っていたらしい。目を開いたらお前がそこに立っていた」

「僕は何をしにそこに？」

「さあな」マサキは頭を振った。「このラングランで偶然行き合うことが多い奴だ。何かの調査のついでだったのか、それとも追手から逃げていたのか、それともそれ以外の理由か。俺は聞いていないからわからない」

「そうですか……」何か知りたいことがあったのだろう。シユウは微かに落胆した様子をみせた。

「何か切欠はあったのですか。記憶を取り戻すのに」

ややあつて尋ねてきたシユウに、ない、とマサキは答えるに留めた。

あの時のマサキはどうかしていたのだ。あの男の温もりを求め、それに溺れ、その

更に先を求めた日々……精神科医や心理学者はしたり顔でその関連性を指摘することだろう。かつてのペッティングの記憶が性行為と結びついたことで記憶が蘇えつたのだと。

シユウとの性行為を夢想しなかったなどとは云わない。強烈な快楽の記憶はマサキの欲望を幾度も煽った。密やかな望み——シユウと性行為セックスがしたい。けれどもマサキはその欲を心の奥底に封じ込めることとした。そう、自分はその欲を一生叶えることなく生きていこうと。

それがマサキなりのけじめの付け方だった。

サーヴァーヴォルクルス。三柱神がひとり、破壊の神。シユウを傀儡として地上と地底に混乱を呼び寄せたものの正体を、今のマサキは当然知っている。それだけではない。シユウがその強力な支配から逃れたがっていることも、マサキは知っている。だからマサキは片目に蓋をした。そして、シユウが背負い切る覚悟をしている数多の罪を赦すことにした。

それ以上の赦しをシユウに与えることは、彼によって絶命させられた数多の命に背

くこと。

だからこそ、マサキは自らの記憶は自然に戻ったものだと思っているのだ。あの男との性行為が記憶の扉を開いたなどということは断じてない。あれは本当に、あの瞬間に、偶然に起こってしまったことだった。

性行為の最中に、ふっと湧き上がってきた自意識。マサキⅡアンドーとしての人生の記憶は、一瞬にしてそれまでのマサキを塗り替えた。たったそれだけだった。自身の全てをシユウに預けることを躊躇わなくなったもうひとりのマサキは、その瞬間に呆気なく消滅した。

「記憶が蘇るのなんて一瞬さ。きつと、以前のお前もそうだったんじゃないか」

いっしか膝を眺めていた己に気付いたマサキは、そつと視線をシユウに戻した。彼はマサキの言葉を最後に黙り込んでしまっていたようだ。何の気なしに言葉をかければ、そうなのでしょうか。と、心細そうな言葉が返ってくる。

「あまりいい話じゃなかったな」マサキは苦笑いを浮かべるしかなかった。

これは未来に不安を抱えている今のシユウにしている話ではなかったようだ。

今のシユウは恐らく確証が欲しかったのだ。いつかは戻るなどといった樂觀論ではなく、失われた記憶が必ず戻るという保証が。それを大きく裏切るような話をしてしまった。心苦しさを感じたマサキは、今度はシユウ自身に話をリードさせることにした。

「話を変えよう。お前が聞きたい話は何だ？ 俺で答えられる内容なら幾らでも答えるぞ」

その目論見は当たったようだ。ぱあっと表情を明るくしたシユウが、ソファアから身を乗り出すようにして言葉を発する。

「そういえば、あなたの使い魔はどうしたのですか。僕が訊いた話では、魔装機神の操者は使い魔を持たされる筈ですが」

「ああ……」マサキは視線を宙に彷徨わせた。「テリウスが急かすもんだから、つい置いてきちまってる……」

つい。と繰り返したシユウが眉を大きく歪ませる。彼は、ええと……と、口を開きかけたものの、後に続く言葉が出てこないようだ。

当たり前だ。マサキは盛大に浚面を作った。他のものならさておき、魔法生物とはいえ生き物である。自らの足で付いて来れるだけに留まらず、喋ることも出来る生き物をどうして置いてきてしまったのか。

「使い魔、なんですよ。あなたの」

「一度は帰れるかと思ってたんだよ」

それもこれもテリウスの所為であるのだ。シウウの世話をとなれば準備ぐらいはさせてくれるだろう——そうマサキは当て込んでいたのだ。だから彼の勧めに従って、ガデイフオールに素直に同乗した。それがまさか、そのままこの場に残されることになろうとは。

サイバスターもなければ、使い魔もない。おまけに戦う為の実剣もないときている。ついではいえ、この状態で彼らも良くマサキにシウウのボディガードを頼もうと思えたものだ。

「そういう大事なことは先に云っていただかないと。大事な相棒パートナーなのでしょ

う」
「つうても、サイバスターもない以上、特に役に立つような奴らじゃないしな……そ

れよりもお前の口煩い使い魔はどうしたよ。まさか俺の時みたいに意識を失ったってか」

「そのまさか、なのですよ」困り果てた様子でシユウが溜息を洩らす。「前回、僕が記憶を失った時の彼は立派に飛び回っていたのですよね。そう彼らに聞きました。それが今回は意識を失ってしまっている。だから僕はこう思うんですよ、マサキ。あなたの時も使い魔が意識を失っていたというのであれば、彼らの活動力は僕たちの記憶の量に左右されるものでないかと」

「そうなのかもな。実際、俺は自分の名前もわからない状態だったしな」

期せずして戻ってきた話題に、マサキは再び自分が記憶を失った当時の状況を思い返した。

二匹の使い魔は、頭を強く打って倒れていたマサキの傍で意識を失った状態で発見されたのだという。彼らはマサキが意識を取り戻しても目を覚ますことがなかった。行動不能——記憶のない主人は主人ではないとでもいうかのように昏々と眠り続けた彼らが意識を取り戻したのは、マサキが記憶を取り戻してからだ。

恐らくチカも同じような状態にあるに違いない。

シユウがこのまま記憶を取り戻すことがなければ、目覚められない彼は使い魔としての役割を持たなくなる。使えなくなつた使い魔がどういった道を辿るのか。マサキは詳しくなかったが、命を持たない魔法生物だ。恐らくは、処分されることになるだろう。

「僕としては面白い性格をしていると聞いたので、彼と話をしたくあつたのですが」「止めとけよ」マサキは即座にシユウをいなした。「お前、実際にあいつが喋るところを聞いたら、絶対に後悔するぞ」

チカと長い付き合いである筈のかつてのシユウですら、彼の齒に衣着せない達者な物言いに辟易していたのだ。彼よりも潔癖な傾向の強いこちらのシユウでは、拒否感で処分を決めかねない。

「てか、あいつら絶対適当なことをお前に云つてるだろ。あれのどこが面白い性格なんだ？」

「そうかも知れませんか。僕はこういった状態ですから、何を云われてもそうだと受

け入れるしかありませんし」

「あいつらの話も、俺の話も、話半分に分けよ」

決して性格が悪い人間ではないものの、人の悪さが目立つことも珍しくない彼らは、物事に余裕を持つて挑むことと茶化すことを混同している節がある。場を弁えず巫山戯始める彼らは、シユウが記憶を失おうとも、そうした態度を改めることはないだろう。むしろ、ここぞとばかりに都合のいい嘘を吹き込んでいる可能性も少なくない。

「お前から見た世界の実実は、お前の中にしかないんだ。他人の言葉に頼り過ぎると今の自分も見えなくなる。自分を大事にするのは悪いことじゃない。気を付けるんだな」

彼らにかかつては、記憶を失ったシユウをあしらうことなど赤子の手を捻るようなものだ。だからこそ釘を刺すようにマサキが言葉を吐けば、その言葉に何某かの感銘を受けたのだろうか。シユウはふふ……と、眼差しを緩めて笑った。

「あなたは想像していたよりもずっと、他人に真摯に向き合ってくれる人なようですね」

「あいつらが巫山戯過ぎなだけだろ」

「親しい仲でもない僕の為にここまで足を運んでくれているのに？」

「珍しくテリウスが深刻な様子だったからだ。あいつがいつも通りだったら、どうか……それでも俺はここに来ちまったかも知れねえ。義を見てせざるは勇なきなりつてな。俺にだってそのぐらいの優しさはあるさ」

その言葉にシュウが言葉を返してくることはなかった。

ただ、温かな眼差しがマサキを捉えている。

中身が9歳児であるとはいえ、外見はマサキが良く知るシュウのものだ。見慣れた彼の面差し。けれども彼がしている表情は、初めて目にするかといったぐらいに新鮮なものだった。

心砕けた表情。それは彼が他人と居る時に、稀に見せる表情だった。

マサキ相手だと頻繁に嫌味や皮肉を吐くシュウは、他人相手だと面倒見の良さを発揮することもあるらしい。惜しげもなく知識を与え、惜しげもなく技能を伝授する。各所で彼が頼られているのは、そうした彼の懐の深さに惹かれてのことであるようだ。

他人に慕われることに嫌な思いをする人間はそういない。それはシュウも同様であるのか。以前と比べるとふとした瞬間に表情を緩めることが増えた。だからこそ、マサキはそういった表情を自分にシュウが見せてくることはないと思っていた。

そう、例えば中身が9歳の子どもであろうとも。

落ち着きを欠いた心臓が、鼓動を速めている。マサキはゆっくりとシュウから視線を外し、努めてさり気なく壁に掛かっている電波時計へと目を遣った。

シュウの視線から逃れたい。その一心だった。

デジタルで時を刻んでいる時計は、昼も大分過ぎた時間を指している。それを目にしたマサキはそこでようやく、自分が食事を摂っていないことに気付いた。

寝ているところにテリウスの来訪を受けたマサキは、取るものも取らずにここに駆け付けている。そこからここまで腹に入れたものと云えば紅茶にカフェオレ。飲み物で誤魔化し続けた胃袋は、そろそろ空腹の限界を迎えようとしていた。

このまま朝も昼も食事を抜くことになっては、どれだけ若さが盛りにあるマサキとて身体が持ちそうにない。いい加減、何か腹に入れなければ。

あのよ。マサキは口を開いた。「俺、朝食を食べずにここに来てるんだが——」

※ ※ ※

朝食を抜かざるを得なかったマサキに対して、昼食がまだだったようだ。シユウの部屋のキッチンを借りてふたり分の食事を用意したマサキは、ソファで少し遅めの朝食を摂ることにした。

「あなたがいてくれて助かりました」

訊けば、ここまで食事を自分で作ったことがないとのこと。

これまではテリウスたちが用意してくれた食事を食べるだけだったというシユウは、その環境が自分にとって良くないものであることに自覚があるようだ。きちんと将来を見据えているのだろう。料理ぐらいは出来るようになりたいとマサキの手伝いを申し出てきたシユウに、けれどもマサキは料理を手伝わせなかった。ケトルからポットに湯を注ぐのですら危うく映る状態だ。包丁を握ったりするのはもう少し日常の動作

に慣れてからにした方が、本人の習得が早まるに違いなかった。

「美味しいですね、これ」

「材料がいいからだろ。失敗しなきゃこんなもんだ」

マーケットで見たことはあるものの、一般的な市場価格よりも三倍の値段になることから、買うまでには至っていなかったミートソースの缶詰。戸棚の中にあつたそれを目にしたマサキは、こういった機会でもなければ使う機会もなしと、その缶詰を使った料理をやることにした。

パスタを茹で、ミートソースに絡め、チーズをたっぷりかけてオーブンで焼く。たつたそれだけ。けれども、どれもそれなりにいい食材であつたようだ。マサキが普段作る同じ料理よりは味に深みとコクがある。

インスタントのスープはシユウが用意したものだ。

本人はそれだけと不満に感じているようではあつたが、ケトルを扱う際の危うい手付きを指摘してみせれば納得せざるを得なかつたのだろう。先ずはこの身体で動くことに慣れないと、ですね。ほとほと困り切つた様子でシユウは云つた。

テリウスたちは長く施設を空けることを見越していたらしかった。冷蔵庫に入っている野菜は、今日明日で使い切れるくらいの最低量。腐らせては元も子もないからだろう。野菜を消費しきった後の食事は缶詰や冷凍食品、乾物で賄えということらしい。こちらは充分過ぎるぐらいの量が用意されている。

外に出ることを想定していない以上は仕方のないこととはいえ、味気ない食卓となりそうだ。マサキは明後日以降の食事を思つて、少しばかり憂鬱になった。

食後はシユウの願いを聞き入れて、格納庫へと出た。

三体のユニットが出払った格納庫は、まるで洞^{うろ}のようだった。高く開けた天井に、限りなく続いているフロア。最奥にグランゾンが佇んでいるだけとなった格納庫にシユウが来たがったのは、剣技の修行をしたかったかららしい。

自分の身は自分で守れるようになりたいのだそうだ。

彼はマサキが剣聖ランドールの名を受け継いでいることをテリウスたちから訊いていたのだろう。少しでいいから稽古を付けてくれませんか。中身だけとはいえ、9歳の少年にそう頼まれては嫌とも云えない。彼の先の見えない未来を少しでも明るいも

のとしてやれるのであれば——と、マサキはその願いを聞き入れた。

「つて、云つても俺には剣すらないんだがな」

「僕の予備の剣を貸しますよ」

「いや、いい」マサキはシユウから距離を取った。

10メートル……20メートル……30メートルほど離れた位置で足を止め、シユウに向き直ったマサキは両手をだらりと下げた。

グランゾンで剣術を扱ってみせるだけあつて、シユウ自身の剣技の腕は相当なものだったが、その実力が幼い頃から発揮されていたかということでもなさそうだ。それは彼の剣の持ち方を見ればわかった。グリップが甘い。長軀を生かすべく現在の彼が使用している長剣は、9歳のシユウにとっては大きく感じられるのだ。

剣の長さを持て余している彼は、恐らく実力の5分の1も発揮出来ないだろう。ましてや彼は自身の恵まれた身体さえも持て余してしまっている状態だ。距離感を掴ませるだけでも三日は必要になる。マサキは彼の動きを観察して、そう見通しを立てた。ならば剣は必要ない。

先ずは剣に慣れさせるところから始めよう。初歩も初歩、剣を握ったばかりの初心者相手の稽古から彼の訓練を始めることにしたマサキは、何が起こるのかと身構えているシュウを見て微笑^{わら}った。

「手加減しなくていいぞ。全力で打ち込んでこい」

マサキの余裕ある態度に闘争心を掻き立てられたのだろう。即時にその目論見を見抜いたらしいシュウの顔が険しさを増す。

それなりに剣の腕に自信を持っているようだ。すう、と息を吸って呼吸を整えた彼は、直ぐにマサキに飛びかかるような真似はせず、ゆつくりと剣を上段に構えてみせた。

鋼の精神力は幼い頃から健在であつたらしい。マサキの挑発に乗ることなく精神統一を果たしてみせたシュウに、合格だ。マサキは心の中で呟いた。

剣技の習得では、技術よりも精神性の方が重要視される。冷静さを欠いた剣は大きな隙を使用者に生み出したものだったし、その結果が命に直結するのは語るまでもない結果だった。そういった点で9歳のシュウの精神性は充分に及第点に達していた。

これなら技術を教え込むだけで済む。

経験があるにしては型に拙さ^{つたな}が目立つが、それにしても、彼自身が長剣を扱い慣れないものと感じているからでしかない。距離感を掴ませれば直ぐに勘を取り戻すだろう。マサキはシュウの一挙手一投足に神経を集中した。シュウが手にしているのは、刃先を潰した訓練用の剣ではない。あまり余裕を見せ過ぎては、いかにマサキとて怪我を負いかねなかった。

行きます。次の瞬間、静かに宣言したシュウの足が床を蹴った。

残像を残しながら、滑るように、シュウの身体がマサキめがけて迫って来る。その距離が数メートルに詰まった刹那、彼の衣装の裾がひらりと羽根を広げた。高く掲げられた剣がマサキに向けて振り下ろされる。

緩やかに動く世界。マサキはシュウが剣を振った方向とは逆方向に身体を逃がしてその剣先を避けた。シュウもマサキの動きを見越していたのだろう。続けざまにもう一撃、返す刃で剣がマサキを追い掛けてくる。

マサキはシュウの背後に回り込んだ。

認識している身体のサイズと現実のシユウの身体のサイズの開きが、彼の動きに隙を生み出している。即座にそう判断を下したマサキは、彼に一撃を加えるべくモーションを取った。

恐らく彼は、長剣のリーチの長さを、動きを大きく取ることと補おうとしたのだ。大振りになりがちな剣。脇が開いてしまつては思うようには剣に力が伝わらない。マサキが易々と彼の剣を躲けたのは、そのお陰でもある。

だからといって、ここで手心を加えてやれるほどマサキはお人好しではないのだ。彼にとつて外の世界は命の遣り取りが常となる世界だ。そうである以上、身を守る術を身に付けるのは急務でもある——マサキはシユウの背中に^{ブラザー}気を乗せた一撃を当てた。肩甲骨の下、鳩尾に打撃が通り抜ける位置に肘が吸い込まれてゆく。

声なき呻き声がシユウの口から洩れた。

衝撃を受けて吹き飛んだ彼の手から剣が離され、身体とは異なる方向へと吹き飛んでゆく。鋭い音を立てて床に跳ねた剣からマサキが目を離せば、受け身の取り方は知っていたようだ。シユウは地に叩き付けられる寸前でダメージを抑える姿勢を取つてみ

せた。

まあまあだな。云つて、マサキは彼から遠く転がった剣を拾い上げた。

「剣のサイズを変えることは出来ないのか。お前、ショートソードの方が使い慣れるんだろ」

「やっぱり、わかりますよね」のそりと身体を起こしたシュウが、途方に暮れたように言葉を吐く。「長剣を扱うのは初めてのことなので、勝手がわからないんです。リーチの長さも、僕の体感とは全く異なりますし」

「街に出られればなあ」マサキは手にした長剣を軽く振ってみた。

鋭い光を放つ刀身が、空気を撫でるように滑らかに動く。恐らく彼の身長に合わせ、刀身を伸ばしたのでろう。普通のロングソードよりも二割ほどリーチが長い剣は、技術のある鍛冶屋にオーダーしなければ手に入れないものだ。

職人が手間暇かけて作り上げた剣は、それに違わぬ質の良さをマサキに伝えてくる。マサキの剣も重みを増した特注品オーダーメイドだったが、それとは異なったコンセプトの剣。彼は軽やかに動ける剣が好みなようだ。

だが、9歳のシュウにとつては手に余る代物でしかない。

彼が欲しているのは、自分で自分の命が守れるだけの技術だ。如何に今の彼に剣聖であるマサキを相手に二度も剣を振れるだけの實力があろうとも、この剣でそれを叶えるのには一ヶ月はかかるだろう。マサキはシュウに、ここから一番近い街までどのくらいの時間がかかるかを尋ねた。交通機関がある街道まで徒歩で一時間ほど。そこからバスで三十分ほど行けば街に着けるようだ。

「明日は街に出てみるか。出るなどは云われてないしな」

「大丈夫でしょうか」

神経質な面が目立つシュウは、やはりと云うべきか。敵の多い環境に出て行くことに不安を感じているようだ。マサキは出来るだけ彼の不安を払拭してやろうと、精一杯の笑顔を浮かべた。

利発さに勝る頼もしい口振りに惑わされるが、彼の中身は9歳児だ。如何にラ・ギアスの成人年齢が15歳であるとはいえ、そこに至るまでに6年をしている子ども。マサキが思っているより、彼の不安は大きいものであるだろう。

「俺を誰だと思ってるんだ。お前ひとりを守れるぐらいの腕はあるぞ」

「そう……そう、ですよね。すみません。街に出ること自体に慣れていないものですから」

マサキははつとなつて目を見開いた。王族として生きた記憶しか持っていない9歳のシユウにとつて、市井の世界は未知なるものであるのだ。

かつて足を踏み入れた王宮の光景が、マサキの脳裏に蘇る。

豪華絢爛に飾り立てられた建造物に、百花繚乱と咲き誇る花々。我が世の春と華やぐ世界は、ラングランの権力の象徴として厚い城門の向こう側に在った。そこに足を踏み入れることが許されるのは、一握りの権力者と国からの榮譽に与った者だけだ。

9歳のシユウの記憶はそこで生きた時間で止まってしまっている。市井に出る機会にはそうそう恵まれなかっただろう彼があゝの門の向こう側でどういった生活を送っていたのか……ふと胸に湧き上がった疑問を、けれどもマサキは口には出来なかった。

今更それを尋ねて何になるというのか。

突然、未来に放り出された彼にとつて、それを尋ねられることほど辛いこともある

まいに。

「しかしこうも軽くないなされると凹みますね。流石は劍聖だと頭ではわかっていても口惜しさを感じます」

マサキが差し出した剣を受け取ったシュウが、扱い慣れない手付きで剣を鞘に納めた。

彼もマサキという強者を目の前にしては、無理をして稽古を続けようとは思わなかったようだ。今日はこれまでにしておきます。素直にそう口にした彼に、ああ。と、マサキは頷いて、格納庫の奥にあるグランゾンに目を遣った。

「乗ってみたのか？」

仄かな光に照らし出されながら佇んでいる青銅の騎士は、記憶を失ってしまった自らの主人をどう感じているのだろうか。マサキは自分たちを見下ろしているグランゾンの顔を見詰めた。赤く明滅する瞳。ない筈の瞼を瞬かせているようにも映る。

まるで涙を堪えているようなグランゾンの赤き瞳。マサキには、自意識を持たない筈のグランゾンが寂しさを訴えているように感じられた。

「グランゾンにですか。ここに戻って来るのに少しだけ。ただ、今の僕では扱い切れる気がしませんね。だから反応速度を上げる為にも、剣技の腕を磨こうと思ったのですか」

「身体は成長してるし、経験もある。動かせそうなものだがな」

「僕の頭が付いていけないですよ」シウが頭を振る。「僕の身体が未来の僕の動きの記憶を持っているのはわかります。偶に自分が知らない動きを、無意識にしていることがありますから。ただ、僕自身がその状況に混乱してしまうというか……」

そうか。と、マサキはシウの言葉に短く答えるに留めた。

きつと、彼が感じている迷惑いは、マサキが記憶を失った自分が起こした行動の数々に対して抱いている感情と同じものであるのだ。

「戻りましょう。明日、街に出るのであれば、今日ここで出来ることはもうありませんし」

「そうだな」マサキはシウの後に続いて格納庫を出た。

居住区のエリアに戻るまでの長い道のりを、彼の他愛ないお喋りを聞きながら歩く。

マサキは記憶を失ってしまった自分が起こしてしまった行動の数々を振り返った。

決して人懐こい性質ではないマサキは、何故あも自分が容易くシユウに気を許してしまったのか、自分のことながらわからない状態だった。フィルム一枚を挟んだ向こう側にあるような光景。まるで他人の意思がマサキを動かしていたかのように。あの時期のマサキの記憶は、マサキにとってそこだけが切り取られてしまったかのように自意識から隔離されてしまっている。

記憶は連続しているが、意識は連続しない。

自分があそこまでシユウに心を預けてしまったのは何故か。肉欲を満たしたいといった単純な欲望でなかったのは間違いない。あの時のマサキは、シユウを世界の全てとして、彼に頼り切ってしまったのだから。

もしかすると、マサキは心の奥底では、あれこそが本来の自分であると認めているのかも知れなかった。

両親を喪つてひとりで生きていかなければならなくなったマサキは、環境の変化によつて全てを諦めるようにして生きることを余儀なくされたが、だからといって希望

や願いを抱かずに生きられるほど、世の中に絶望しきってしまった訳ではなかった。腹も減れば眠くもなる。本能が働く程度には自我を保っていたマサキは、だからこそ荒涼とした世界の中で過酷な人生を生きることによって疲れては、誰かに頼りたいという願望を抱くことがあった。

けれどもそれは叶ってはならない望みでもあった。

個人にとつての世界とは狭くも小さいものだ。関わりのある人間で構成される半径何キロの世界。幼かったマサキはその世界で自ら生きてはいなかったのだと、両親の死を経験したことで思い知ることになる。

マサキは彼らの庇護によつて生かされていたのだ。

喪つたことで露わとなつた現実をマサキは真摯に受け止めたからこそ、こう思うしなくなつた。彼らに並ぶ存在などあつてはならない。安らかに眠れる家、温かな食事、着るものに不自由しない生活……そして愛情。自分に全てを与えてくれた両親という存在の偉大さを、マサキは彼らを喪つたことで気付かされることとなつた。

だからマサキは自らの願望を弱さと受け止めた。そしてだからこそ、自身が抱いた

希いの数々を心の奥底に深く封じ込めることにした——……。

「さっきはああ云いましたけど、明日を僕は楽しみにしていますよ。街に出る——と、いうより、外に出るのは久しぶりです」

居住エリアに戻ってきたシウは、暫くは読書に専念するつもりであるようだ。夕食の時間までマサキに自由にしていると告げてくると、自室に続く扉を潜る前に、そう自身の気持ちを打ち明けてきた。

「僕からすれば彼らは未だ信用が置ける人間ではありません。彼らの能力までもを疑ってはいませんが、それでも、自分の命を彼らに預けることには躊躇いがあります。でも、あなたでしたらそういった不安を感じずに済みそうです。感謝していますよ、マサキ。ここまで足を運んでくれて」

「俺をあまり信用するなよ。味方じゃないんだ。かといって敵でもないが」

「それは未来の僕とあなたが必要以上の干渉をしない関係であったということでしょうか」

「どうなのかな。お前は好き勝手にしたいことをしているように、俺の目には映った

けどな」

使命のない日々におけるマサキは、他人の目には自由に振舞っているように映るようだ。

勝手気ままに西へ、東へ。サイバスターを駆って方々へと出歩いて行けば、気兼ねなく過ごせる仲間たちと遊行に耽ることもある。マサキ自身も自由を満喫している自覚はあったが、そうした日々が終わりなく続くものではないということにも自覚がある。

——世界の存亡の危機においては、全てを捨てて戦え。

魔装機操縦者の唯一無二の義務に縛られているマサキはその気高き拘束に背くつもりはなかったが、それでも時折、酷い閉塞感に見舞われることがあった。心安らかに過ごしている日々が、いつまた乱されることも限らない。平穏な日常の中で、ふと思いつく自身の使命。それはマサキに強烈な緊張感と猛烈なプレッシャーを与えるものだったからこそ。

次こそ命を落とすのは自分であるかも知れない。

それと比べればシュウの日常は優雅なものだ。誰に縛られることなく西へ東へ。思い立ったことを即座に実行に移せるフットワークの軽さは、様々なしがらみに縛られている筈の彼を、何故か自由に生きているように感じさせる。

「これだけ恨みを買って生きているのに？」

けれども突如として未来に放り込まれることとなった9歳のシュウにとっては、自分で全てを選び取らねばならない現実は無窮に感じられるものでもあるようだ。恐らく、シュウと比べて保持している能力に劣る彼としては、生き延びることだけで精一杯なのだろう。微かに瞠目してみせた彼に、それもそうだな。マサキは頷いた。

「何かに縛られているのは、俺もお前も一緒だったな。悪いことを云った。忘れてくれ」

それでもマサキは時折、彼の生き方を羨ましいと感じてしまうのだ。

マサキたちに与えられた使命は戦いの場で生きること余儀なくするものだ。それは同時にそれ以上の干渉を許さないものでもある。戦争で疲弊した国内の建て直し……生活を壊された一般市民の補助……それらにまで逐一手を出してしまっているのは際限

がなくなるとはいえ、ただ戦って終わりとなる自らの立場にマサキが何も思わない筈がない。

そうしたしがらみを持たぬあの男が羨ましい。

何に関わり、何を守り、何を晴らすか。その全てを自身の選択のみで成せる立場にいるシュウ。彼は自らの心のままに生きている。

「……未来の僕は、こういった何重もの檻に囲われたような生活をしていることをどう感じているのでしょうかね。僕は自由が欲しいと望んでいましたけど、それは大それた望みだったのかも知れません」

ぽつりと言葉を吐いた9歳のシュウが、それを最後に扉の奥へと姿を消す。ひとり通路に残されたマサキは、改めて彼の置かれている境遇を不憫に感じながら、ふたつ隣にある自分に与えられた部屋へと向かった。

必要な物資が揃っているにも関わらず、生活感に乏しく感じられる室内。部屋を見渡したマサキは、寂しmondana。そう呟かずにいられなかった。

二匹の使い魔を欠くなど滅多にない事態だ。ひたひたと這い寄るように迫ってくる

静けさが、いつでも傍にいるのが当たり前な話し相手の不在を強く意識させる。さて、どうするか。マサキはするべきことも思い付かないままにリビングのソファに腰掛けた。

科学時代の遺産たる巨大地下司令施設。どこかにはメインの機能である指令室が存在している筈だ。

錬金学が隆盛を誇る時代となった今となつては時代遅れの施設。どういった経緯でこの施設が遺棄されることになったのか。ラ・ギアスの歴史に詳しくないマサキにはわかる由もなかったが、彼らがここを拠点として行動を起こしているからには、それなりに生きているシステムがある施設である筈だ。

この自由時間を使って施設内を探索してみるのも悪くない。マサキは思い付いた自由時間の使い道に心を躍らせた。

あからさまに対立することもなければ、さりとして決定的な味方となる訳でもない。マサキと付かず離れずの距離を保ち続けている彼らは、自分たちが信ずる道を自分たちの遣り方で突き進んでいるからこそ、利害が相克すればマサキたちとは異なる道を

平然と往つてみせる。だからこそ、彼らが有している施設の内情を知っておいて損はない。そう考えたマサキは胸を躍らせた。すべきことが出来た。けれども瞬間、ふと9歳のシウの顔が思い浮かんだ。彼をこのエリアにひとり残していてもいいものだろうか？ 気掛かりを覚えたマサキは頭を悩ませた。

自由時間に部屋を出るのに、その都度彼に伺いを立てる必要はないだろうが、9歳で記憶が止まってしまっている彼のことだ。マサキの不在に心細さを感じないとも限らない。さりとて、目的が目的だ。そうでなくとも猜疑心に見舞われている彼は、ちよつとの切っ掛けでもその天秤を一気に傾けそうである。

暫く悩んだマサキは、今はそういった行動は控えるべきだと結論付けた。

酷い方向音痴なのだ。

誰かの案内なしにこの巨大施設を回り切れる自信もなければ、無事にこのエリアに戻つて来られる自信もなかった。マサキは宙を仰いだ。サイバスターに愛用の剣、そして二匹の使い魔。どれもマサキにとっては相棒と呼べるほどに大事なものだ。その全てを欠いてしまっている。マサキ自身は縁起を担ぐような性格ではなかったが、こ

れだけの不遇にあつて慎重さを欠いた行動に出られるほど考えなしでもない。今日のところは大人しくしておこう。マサキは夕食まで部屋で過ごすことを決めた。

明日になれば街に出られるのだ。気分転換はそこで済ませればいい。

しかしどうこれからの時間を過ごしたものか。夕食まで何をするか悩んだマサキは、改めて部屋の中を漁ってみたが、暇潰しの娯楽となりそうなものはテレビしかなかった。仕方なしに早目のシャワーを済ませ、だらだらとソファの上でテレビを見ながら時間を潰す。

夕食はハンバーグにした。

肉や魚はほぼ冷凍されていて、直ぐに使えそうな食材が挽肉しかなかったからだつた。

そこに冷蔵庫の野菜で作ったサラダとスープ、軽く焼いたバケットを付け合わせる。冷凍庫を除いてはほぼ空となった冷蔵庫に、レトルト食品を好まないらしいシユウは不安そうだったが、どうせ明日は街に出るのだ。そのついでに食材を買い足せばいいと云い聞かせた。

サラダのレタスはシユウに千切らせた。

彼はその程度のことでも調理に関われたのが嬉しかったらしく、感慨深そうにレタスを口に運んでいた。レタスを千切ったぐらいで大袈裟な。と、マサキは思ったが、彼にとつての今の生活とは、見るもの聞くもの珍しいものでもある。

美味しいですね。心なしか声を弾ませているようにも感じられた彼の言葉に、マサキは深く頷いた。

そこまで喜ぶのであれば、もう少し手がかかることをやらせてみるのも悪くはない。マサキは食事を進めながら、明日の料理の支度で彼に何をさせるかを考えた。剣を振れるぐらいには刃物に馴染んでいるシユウ。刃物を扱わせても問題はないのではなからうか。行き着いた考えに、それも悪くない。納得したマサキはシユウに包丁を持たせることを決めた。

それにしても——と、マサキは食後、皿洗いの為にキッチンに立っているシユウの背中を眺めながらつくづく思った。その後の10年以上の歳月で、果たして彼に何が起こったのか。神経質なきらいはあるが、素直で聡明な9歳のシユウ。彼は、皮肉屋で

皮相的な物の見方を常とする現在のシユウとは懸け離れた性格をしているように映る。良く知る姿形をした人間が、本人がしそうにない反応をみせる。それはマサキに複雑な感情を呼び起こした。なんとも滑稽だが、何とも物寂しい。日頃、シユウから嫌味や皮肉を聞かされることも多いマサキだったが、こうなるとそれらの言葉が懐かしくも感じられた。

調子が狂うな。マサキはシユウに聞こえぬように、そうつと言葉を吐いた。

「そういえば、あなたはお酒は嗜まないのですか？ 僕は偶に飲むことがあったようですが」

「パーティなんかでは飲むが、晩酌って意味ではしないな。酒はあんまり好きじゃない」

「そうですか。戸棚の中にワインボトルがあつたので、あなたが飲めるのでしたら、お礼代わりにと思ったのですが」

「てか、お前のボディガードでもあるんだぞ、俺は。ここでは飲めないだろ」

洗い物を終えてソファに戻ってきたシユウが何を飲むか尋ねてくる。その中に酒を

含むつもりであつたらしい彼に、マサキは世間知らずな彼の氣質を垣間見たような気がした。きつと、自身が9歳であるからだろう。酒に酔うということがどういったことであるのか、彼にはまだ良くわかっていないに違いない。

「持ち帰つてはいかがです。あの人たちのことだ。あなたにお礼をしてくれるかも怪しいと思いますし」

「そういった気は遣わなくていい。困った時はお互い様だ。俺も記憶をなくした時にお前に世話になつてゐるしな。それに味に煩いあいつのことだ。秘蔵のワインを持ち帰つたとなると、しつこく根に持つだろ」

冗談めかして云えば、「彼らでもあるまいし——」と、シユウは露骨に顔を顰めてみせた。

テリウスたちが自ら口にしていた通り、シユウの彼らへの警戒心は相当なものであるようだ。

言葉の端々から滲み出る不信任と嫌悪感。教団屈指の魔導師であつたサフィーネはさておき、モニカやテリウスは出自をとにもする血族である。そこまで毛嫌いをする

理由もないだろう。しかもその割には彼らから話を聞いただけのマサキには気を許している様子をみせるなど、彼の行動には矛盾が感じられる。

「ワインはさておき、カフェオレは飲みたいな。食後の一杯にな」

「それなら僕がやりますよ」

初日にして気掛かりばかりが増えていくものの、それを気兼ねなく尋ねられる関係性でもない。マサキは詮索を避け、ワイン代わりにカフェオレを頼むだけに留めた。いずれ長い付き合いになれば、それを知る機会にも恵まれるだろう。

今は9歳であろうともシユウはシユウなのだ。

そう思ったからだった。

キッチンに立ったシユウの動きは、剣を振ったことで感覚が掴めてきたからか。それともレタスを千切ったことで自信が付いたからか。いずれにせよ、昼間と比べてぎこちなさが減ったように感じられた。距離感を掴んだ動き。危なっかしいのに違いはなかったが、手を出したくなるほどではない。

ややあって、どうぞ——と、差し出されるマグカップ。それを受け取ったマサキは、

彼がソファに腰を落ち着けるのを待つて、彼に現在の身体の使い勝手を尋ねてみることにした。

「大分、その身体にも慣れてきたか？」

「そうですね。最初は物を取るのですら苦労しましたから、それと比べれば大分」

「いきなり身体がそれだけでかくなればな。身長は幾つだったんだ」

「40センチほどですね」

成程な。マサキは納得した。実に40センチほどの身長差とあつては、動きがぎこちなくなるのも已む無しだ。

「明日は街に出るが」マサキはシユウに釘を刺しておくことにした。「もし何かが起こったとしても、お前は相手にせず逃げることに専念しろ。その身体に慣れるまでは無理をしない方がいい。慣れればお前のことだ。俺以上に上手く立ち回れるようになる」

昼間の稽古で自分が置かれている現状とマサキとの実力差を思い知ったのだろう。はい。と真顔で返事をしたシユウに、現在のシユウとは別人のようだ——と、今更な

がらにマサキは思わずにいられなかった。

学術に魔術、剣術と、人並み以上の才能に恵まれているシユウは、大半の物事を自分自身で処理してしまえるからか、他人の助力を拒否する傾向が強かった。自信家で皮肉屋。尊大な物云いも日常茶飯事な彼は、いざ助けられたとしても他人に素直に礼を述べることにすらしない。尤も、サファイーネやモニカ、テリウスを連れ歩くようになった彼は、多少はその傾向を改めたようである。マサキに頼みごとをしてくるのも珍しくなくなった。

けれども、窮地に陥れば地が出る。マサキを保護した時にせよそうだった。勿論、欲もあったには違いなかったが、彼は頼るのが比較的容易い自らの従妹ですら頼ることをしなかった。利己的な男は、常に自身の利益を最優先に動く。彼との付き合いが長いマサキとしては、そうした彼の振る舞いには思うところが大いにあったが、さりとて、彼がしおらしく負けを認めるところなど想像も付かないのが現状だ。

「なんか、あれだな。お前が素直だと不安になる」

「僕はそこまで厄介な人間でしたか」

「厄介というか」マサキは鼻の頭を掻いた。「何でも出来る能力を持つてるからだろ。そりやあ、あれだけの能力があれば、自分に全幅の信頼も寄せたくなるっていうかな……」本人を目の前にして、明瞭^{はつき}りと物を云うのも躊躇^{ちゅうちよ}われる。言葉を濁したマサキに、けれども9歳のシユウは何を云いたいかを悟ったようだった。表情に険を強めてみせると、

「自らの能力に対する慢心と過信は、得てして自らの足元を掬うものですよ」

まるで未来の自分ですらも他人とばかりに切つて捨ててみせるシユウに、マサキは首を傾げるばかりだ。

9歳のシユウの言葉の端々から伝わってくる性格。子どもにしては聡過ぎるくらいがあるにせよ、彼は真つ直ぐで素直な性格であるようだ。この性格であれば、王室でもさぞ将来を嘱望されていたろうに。一体、シユウに何が起こったのか。マサキは陰性を強めた現在の彼と9歳のシユウを比べずにいられない。物事を一步引いた場所から眺めているような態でいる男は、けれども思いの外、執着心が強かった……。

過酷な運命に己の力で立ち向かってゆく彼は、自身を襲った不条理な運命さえも、

目の前にひれ伏させようとしているようだ。それは、彼が自由に対して並々ならぬ執着心を抱いていたからではないか。だから彼は、例え運命が相手であろうとも、それに屈服するのを良しとは出来なかった。

「お前に何があつたんだ」マサキはシュウに訊ねた。「俺の良く知るお前は、そんな素直な性格じゃない」

「僕にもわからないのです」

顔を伏せたシュウが、手にしたティーカップの中身に視線を注ぐ。悩まし気な表情。9歳のシュウにとつても、自身の未来に何が起こったのかは大きな謎であるようだ。

「彼らにそれを訊ねても、言葉を濁すばかりで……」

滑らかに光を映す琥珀色の液体が微かに揺れた。はたと気付いたマサキは彼の手に目を遣った。ティーカップを包んでいる両手が小刻みに震えている。愁いを帯びた瞳。彼は明かされない謎に穏やかならざる感情を抱いているようだ。

「……僕がどうしたらあんな外道な、宗教とも呼べない組織に自ら属せたものか」

絞り出すようにそう吐き出したシュウに、マサキはどう声を掛けてやればいいかわ

からなかった。

過去のシユウと現在のシユウ。その人生の狭間には、彼の性格を大きく変えてしま
うほどの大きな何かがあった。しかもそれはあの奔放な女狐サファイネをして、口を閉ざさせる
ものであるようだ。マサキは俯いたままのシユウを凝視みつめ続けた。長軀をすつきりと
ソファに収めている彼は、現在の精神年齢そのままに稚く見える。

プライド
自尊心が高く、高慢で、執着心に勝る。

そこにはマサキが知るシユウシラカワの姿はなかった。そう、彼はクリストフ
グランマクソードなのだ。マサキは自分が抱いていた違和感の理由に思い当たった
ような気分になった。

誇り高きラングラン王家の一員として、栄華を極めた王宮世界で彼は自身に与えら
れた輝ける人生を謳歌していた……彼がいた時間に思いを馳せたマサキは寂しさを覚
えた。今のシユウはマサキの知らない時代に生きている。何が絆だ。マサキは口の端
を吊り上げた。ああだこうだと仲間になで囃し立てられるような仲でありながら、マ
サキを目の前にしても彼の記憶は一向に蘇る気配を見せないではないか！

彼にとつて大切な記憶とは、マサキと過ごした日々よりも、クリストフであつた日々にこそあるのだ――。

サーヴァールヴォルクスの支配をも跳ね除けてみせた男が、たかだか熱病如きでその記憶の大半を失つてしまったなど、三文芝居の劇作家ですら書き得ない結末だ。けれども、だからこそ、事実は小説より奇なりであるのだろう。恣意的に失われた訳ではない記憶は、けれどもある種の指向性を持つている。彼にとつて苦痛の大きい出来事。それを彼は綺麗さっぱり忘却してしまった。それは彼が自身が置かれている環境に強いストレスを感じていたからではないのか？ 苦難に満ちた道を歩み続けている現在のシユウが置かれている立場を振り返ったマサキはそう思わずにいらなかった。マサキ・アンドー。やがて、沈黙を続けていたシユウがそうマサキの名を呼びながら顔を上げた。

「それがどれだけ僕を絶望に叩きのめす出来事であっても、僕は知りたいのですよ。未来の自分がその過去の先に立っているのであれば、それは僕にも乗り越えられる壁である筈です」

決意に満ちた眼差し。きつぱりと云い切つてみせたシュウに、けれどもマサキとしては無茶なことを云うなと制することしか出来ない。

「無理はするな。お前は自分の身体にも慣れなければならないだ。先ずはきちんとその身体で動けるようになることが先だ。あれもこれもと一度に欲張つて、背負いきれなくなつちまつたんじゃ本末転倒だぞ」

「僕は怖いんですよ、マサキ」シュウが頭を振る。「僕はどれだけの人間を無意味に殺してしまつたんです？ 叔父に剣聖、王宮の兵士たち……。その他の人々にしてもそうですよ。罪も咎もない一般市民なんて、命を奪つてはならない最たるものでしょう。彼らはただ恙なく過ぎてゆく日々を精一杯生きていただけだったのに」

「お前がやったことじゃない。それこそがサーヴァールヴォルクスの力だ」

「違いますね」ぴしゃりとマサキの言葉を跳ね除けた彼は、一気呵成と言葉を継ぐ。

「僕はこの手で死ななくていい人間を沢山殺してしまつた。その罪と責を負うべきは、他でもない僕自身です。僕の内面世界で何が起こつていたにせよ、他人にとつては目に見える世界が全てですからね。だから僕は方々で恨みを買つてしまっているのでしょ

う。だったら僕はその現実と向き合わなければなりません。邪神教団の大司教となるまでに至った僕に何が起こったのか。先ずはそこを知ることから始めなければ」

どうも9歳の彼は潔癖が過ぎるようだ。事情もわからぬうちから全てを自分の所為だと思い込むなど、他人に寛容である彼らしくない。清濁併せ呑む——彼は自身の醜ささえも飲み込める人間であることを、マサキは知っている。でなければマサキとの性行為を、ああも強引に進められたものか。

彼はだから、利己的に生き続けているのだ。食欲に、自らに与えられた生にしがみ付きながら。

だの9歳のシユウと来た日には、そういった未来の自分が置かれている苦境が理解出来ないからか。マサキの様子も目に入らぬ様子で言葉を紡ぎ続ける彼は、マサキを飛び越えた自らの理念を見ているようだ。とにかく黙らせなければ。マサキは彼を一喝することにした。

「一度にやるなと云っただろう！」

はっと目を開いた彼が、すみません……と、肩を落として謝罪の言葉を口にする。

「全く——」マサキは腕を組んだ。

ひとりで出来ることには限りがあるということを、9歳のシユウはまだ知らないのだ。

未来の自分の罪までも引き受けようとする彼の純真な気持ちは尊いものであったが、全ての能力を一度に使いこなせる由もない。どれだけ彼が才能や能力に恵まれていようとも、身体はひとつしかないのだ。何をするにしても順序が大事だとマサキが彼に説いたのは、そういった理由からでもある。

先ずは本来の自分の能力を取り戻すべき。

失われた記憶の真実を探すのは、その後でも遅くはない。マサキは目の前で萎れているシユウを見遣った。似ていない性格に思えても、そこはシユウの少年期だ。こうと決めたら譲らないところや、自分の考えに固執しがちなところなどは、現在のシユウにそっくりだ。

過去から現在に至るまでのシユウに何が起こったのか。ラ・ギアスに召喚されてからのシユウしか知らないマサキには、わかっていることに限りがあったが、それでも、

彼の経験が稀有なものであることは承知していた。その、経験の欠如が、9歳のシユウを純粹無垢な存在足らしめているのは想像に難くない。

現在のシユウはそこから様々な経験を通して、酸いも甘いも噛み分けるようになっていったのだ。

巖のように頑固な彼は、マサキに対しては自身の理想を押し付けがちな面があったが、他者に対しては広く行き渡る空気のように寛容でもあった。論すような口を利いたりもしながらも、彼らの選択は最大限尊重してみせる。それは彼が経験した不自由な環境と無関係ではない筈だ。

「頑固なのは昔からだな、お前は。あんまり意地になるな。ヴォルクルスはお前が思っているような偶像的な存在じゃない。実存する神だ。この世界じや度々姿を現わしてみせたりもするが、神様つてのは本来、人智を超えた存在だろ。大体、身体を持たない意識の塊なんて、生身の人間でどう対抗出来るっていうんだ？ まあ、精霊でさえも使役してみせようとかえるラングランじや、神に対抗しようって考えが出るのも無理はないがな」

「神だからといって、人間の生活を脅かす存在を放置していい筈ありませんが」

「そりやそうだ」マサキは笑った。「神様だつて人間界に降りてくりや、弱肉強食の世界のヒエラルキーに組み込まれちゃうもんだろ。そういう意味じゃ人間に斃されたつて文句は云えねえわな」

「だから僕は、事情があつてのこととはいえ、邪神に自分が与したという歴史に腹を立てているのですよ。ヴォルクルスは三柱神のひとつではありますが、現実には存在する彼や、彼を信奉する人間がそれに相応しい活動をしているかというところではありません。世界に混沌を呼び込むことで、人々の恐怖心を糧とする。彼らの在り方は、サタニズム悪魔的に近い」

考え方という面においては、やはりシウはシウであるようだ。9歳とは思えぬ弁舌。理屈に走り始めた彼に、マサキは現在のシウの面影を見たような気がして、口元を緩めずにいられなかった。

理屈で他人を煙に巻くのが好きな男だった。

博覧強記な彼の弁舌の数々によく遣り込められたマサキだったが、けれどもシウ

との付き合いが長くなるにつれ、受け止め方が違うのではないかと思うようになっていった。彼はただ、自身の考えを端的に伝えたいだけなのではないだろうか？ 目の前の9歳のシュウの能弁な口にしてもそうだったし、使い魔たるチカの達者な口にしてもそうだ。彼らは伝えたいという気持ちの赴くまま、ひたむきに言葉を紡いでいる。

「ですから――」

話を続けようとするシュウを、まあ、待てよ。と、マサキは制した。

「難しい話は苦手なんだ」

「そんなに難しいことを云ったつもりはありませんが」

「俺はお前が思ってるほどに学はないぞ」

肩をそびやかして云ったマサキは、納得が行っていないさそうな顔をしているシュウに言葉を続けた。ラングランに召喚されちまったしな。それで彼はマサキが抱えている事情が自分とは異なることに思い至ったようだ。微かに目を開いてみせると、そうでした。と、視線を落とした。

「そんな顔をするな。嫌だったらとつくに地上に帰ってる。俺がここに残ってるつて

ことは、そういうことだ」

「有難いことです」ぽつりと洩らしたシュウが、けれど——と、言葉を継いだ。

「魔装機に精霊を組み込み、操者には地上人を頼る。人間は道具を使うことで弱肉強食のヒエラルキーの頂点に立ちましたが、更なる脅威に立ち向かう為とはいえ、その手を有機物にまで広げるのはどうなのでしょうね。それこそ鳥澁がましいとは思えません……」

「だが、それで救われた人間がいるのも事実だろ」

マサキは冷えたカップを手を取った。僅かに温みを残すカフェオレを口に含む。

あのまま地上世界で生きたとしても、マサキに未来はなかった。

砂を噛むような味気ない日常。親の愛情で生かされていたマサキは、その庇護を失った者に対して世界が冷たいことを知った。何をしようとも世界から弾かれる。稀有な運動能力を有するマサキに活躍の場は多かったが、それでもマサキは地上世界で自分の居場所を作れずにいた。

世間に逼塞感を感じながらも、生きることには怠惰だった。それはそうしなければ心

が潰されてしまいそうだったからだ。自由に飛び回れる翼が欲しい。灰色のコンクリートジャングルの中で、幾度そんな夢を見たことだろう。

ラングランに召喚されることがなければ、マサキもまた、いずれ数多の若者と同じように、社会の歯車となつて回り続けるような味気ない日常に放り込まれるしかなかったであろう。

その生活を悪いとは思わない。

マサキが欲しかったのは、栄誉でもなければ、生き甲斐でもなかった。ただ自分が生きていることを、そして生きてゆくことを認めてくれる社会。この豊かなる自然溢れる地底世界ラ・ギアスをマサキが早々に第二の故郷と決めたのは、そこに生きる人々が、マサキがこの世界で生きてゆくことを欲してくれたからだつた。

「救われた、ですか。平和というものは自らの手で築くもの。他人に守られることに慣れた結果、闘争心を失っていくでは話になりませんね」

けれどもシウは、そういったマサキの事情にまでは考えが及ばなかったのか。若しくは、地底人の他力本願とも取れる態度にそれだけ腹を立てていたのか。一顧だに

せず吐き捨てると、煽るようにティーカップの中身を飲み干した。

「誰もが戦う能力を持つている訳じゃないだろ。戦場に立ちたくとも立てない人間もいる」

「能力的な問題まで責めようとは思ってませんよ。ですが、平和を築く手段は戦争だけではありませんよね。外交、抗議活動、治安維持……地道な活動を支えるのはどういった感情です。闘争心もそのひとつではありませんか。平和を獲得してみせるといふ。フィールドが変わろうとも、闘争心が必要になることに違いはありません」

「平和を獲得する戦いとも云うしな」マサキはソファを立つたシユウを目で追った。話に一段落ついたと思ったらしい彼が、次の一杯を注ぎにソファを立つた。熱湯を溢れさせるのが怖いのだろう。そろそろとティーポットに湯を注いでいるシユウに、そこまで怖がるもんじやないだろ。マサキは笑った。

「最初の頃に思いつきり熱湯を溢れさせてしまったんですよ」

「だからってそこまで慎重になることもないだろ。そういった動きに慣れるのも、今のお前で剣をきちんと扱えるようになる為には必要だぞ」

「頭ではわかつてはいるのですが」

「失敗を恐れるなよ。お前はそういった面があるよな。負けず嫌いだからか、出来ないことを恐れるみたいなさ」

そうなのでしようか——ややあつてソファに戻ってきたシユウが、先ずはひと口と紅茶を口に含む。

テリウスたちを遠ざけてひとりの時間を過ごし続けてきた彼は、誰かと話をする機会が限られていたのだろう。喉が潤いました。久しぶりに大量に話をしているらしい彼は、そう云つてひと心地ついたような表情をみせた。

「ところで、さっきの話だが」

「続けるのですか？ 僕はあなたが納得してくれたのだと思つていたのですが」

「ひとつだけ云つておきたいことがあつてな」

シユウの鼻を明かしたいといった浅慮な考えではなかった。

彼の物事の捉え方は深層的ではあったが、同時に局所的でもあった。9歳という年齢にしては柔軟性に欠ける結論。彼はひとつの真理を発見したと感じると、そこに固

執したがる傾向がある。それは、様々な視点からひとつの物事の分析を繰り返し、そこから砂漠で一粒の砂金を拾い上げるように真理を導き出す現在のシユウにはないものだ。

十を知ること、唯一を識る。

世界の地平を眺めているような態度の男は、もしかするとその高みにいるからこそ、他人の心の機微にまで目が届くようになってしまったのかも知れなかった。栄華を知り、苦境をも知る。自由を知り、不自由をも知る。生を知り、死をも知る。それはジェツトコースターのように緩急差の激しい人生だったが、彼に深い洞察力を備えさせるのには大いに役に立ったに違いない。

鼻持ちならなく感じられる彼の物云いや態度が懐かしく感じられるのは、彼が通り一遍な皮肉屋ではなかったからだ。

マサキは怪訝そうな表情を向けているシユウの顔を凝視^{みつ}めた。

端正な面差しは、まるで切れ味鋭いナイフのようだ。その印象に違わぬ言説を放っていた男は、今はマサキの記憶の中にしか存在していない。9歳の自分という稚い精

神を抱え込んだシュウシラカワは、自己——或いは自我を失って何処に向かうのだろう。

マサキはそれを見たくなかった。

どれだけの困難に見舞われようと、不死鳥の如く世界に返り咲いてきたシュウ。その彼にこんな終わり方など似合わない。彼が矢折れ尽き果てるのは、彼自身が万策尽きたと感じる時でなければ。だからマサキは、心の底に溜め込んでいたその想いを口に乗せることにした。

「お前は救われた人間をラ・ギアス世界の人間に限ってるだろ。でもそれはそんな単純な話じゃない。魔装機という力俺たちをも救ってくれたんだ」

それは。と、シュウが言葉を詰まらせる。

聡明な彼のことだ。この言葉だけで全てを悟るだろう。マサキは空になったカップを手にしち上がった。粉をたっぷり使って泥水のようなコーヒ―を淹れる。嗜好品

の味に拘るシユウがそれに反応をみせない辺り、様々に考えを巡らせているようだ。

どこまでシユウがマサキとの会話に時間を使うつもりかは、彼の匙加減ひとつにかかっていたが、マサキとしては出来得る限りそれに付き合つてやりたいと思つていた。そうでなければどちらのシユウも報われない。

確かに彼はマサキに対して不埒な振る舞いに及んだ。身体に残っている彼との性行為の記憶は、今尚マサキにシユウを強く警戒させると同時に渴望させてもいる。けれども、どれだけシユウがマサキにとって厄介な性質を持つ人間であろうとも、彼の自我が奪われたままの状態であつていい筈がない。

とある人物をその人物足らしめているのは、それまでの経験が詰まつた記憶があるからこそなのだ。

ソファに戻つたマサキはコーヒを啜つた。不味い。9歳のシユウの紅茶の淹れ方にあれこれ思う割には、彼のことなど微塵も云えない出来。これならシユウに任せた方が良かった——自ら望んで淹れたコーヒでありながら、マサキは身勝手にもそう思わずにいられなかった。

シユウはかなりの時間を沈考するのに費やしていた。

マサキの思惑が何処にあるのか。その意図は何か。そして言葉が意味するもの。それらをシユウが正しく汲み取ってくれたのかは、マサキにはわからない。

「僕は知らなければならぬことが多いようです」

ややあつて、顔を上げた彼は、込み上げてくる感情を抑えるようにそう云った。そしてようやく、自分が聞きたかつた話を聞く土壌が出来たと感じたのではないだろうか。しつかとマサキに顔を向けてきた彼は、深くゆらめく紫水晶の瞳にマサキの顔を映し出しながら、

「だから、マサキ。僕にあなたが見てきた僕の話をしてくれませんか。あなたがラ・ギアスに召喚されてから今日まで。あなたにとつて僕がしてきた行動がどう映ったのか。遠慮は要りません。正直な感想を聞かせてください」

第二章 中日

寝慣れないベッドの上で目を覚ましたマサキは、けたたましく起床時刻を告げている目覚まし時計を手探りで止めると、まだ抜けきらない睡魔に必死に抗うようにブラケットの中に潜り込んだ、

9歳のシユウとの話は深夜にまで及んだ。

彼にとって未来の自分の行動は疑問が先に立つものばかりだったようだ。何故？

どうして？ 細かく尋ねてくる彼に、マサキはどう答えたものか言葉に窮したりもしたが、どうにか現在に至るまでの経緯を説明しきった。

飲んだコーヒーの数は5杯を数えた。

部屋に戻っても中々寝付けなかったマサキは、彼との性行為を脳裏に蘇らせながら自慰に耽った。部屋ひとつ挟んだ隣に9歳の彼がいるこの場でよくもまあ——とは、マサキ自身も思ったことだったが、元来ストレスがピークに達すると身体を慰めずに

いられなくなる性質だ。仕方のないことだとマサキは自分に云い聞かせて、欲望に溺れた。

限られた空間で精神年齢を後退させてしまったシユウとふたりきりで生活する。戦場の過酷な環境に比べれば遥かに恵まれた環境であるのはわかつてはいたが、理性で封じ込められるような本能でもない。マサキにとって自慰とはストレス発散の方法であり、自身のアブノーマルな嗜癖を満足させる手段でもあり、本能的な衝動でもあるのだ。

朝食は目玉焼きと、焼いたベーコン。そしてサラダとチリコンカンにした。

昨日考えていた通りに、シユウには包丁を持たせた。試しにと玉葱を微塵切りにさせてみたら、完璧主義者な面が強く出た。時間はかかったものの、それなりにきちんとした微塵切り。本人としては剣のように包丁を使えないことに不満を抱いていたようだが、ようやく料理に本格的に参加出来たこともあってか。昨日に引き続いて上機嫌な食卓となった。

「今日はこの後、街に出るのですよね」

「ああ。徒歩で出るとなると時間がかかるからな。早目にいたいところだ」

マサキとしては、昨夜、これまでに起きた様々な出来事を一度に聞かされたシユウの調子が気に掛かるところだったが、既にテリウスたちから触りを聞いていたこともあつてか。強く思い詰めたりといったことはなさそうだ。

「ついでに食料も買い足そうと思ってるんだが、お前は行きたい場所はあるか。ただ必要な物を買うだけで終わるのもな。面白くないだろ」

「寄れるのでしたら本を買いたいのですが」

「本か。お前はやっぱり小さくともお前なんだな」

「知識の蒐集に勝る快感はありません。とはいえ、ここにある本はどれも前提知識が必要なもののばかりで、今の僕が読むには少々難しくあります。ですから、それを補える本が欲しいと思っていたところで」

「なら書店にでも寄るか。お前が求めるような本があるかどうかはわからないが」

「なければ取り寄せます。いずれまた外に出ることもあるでしょうし」

マサキの話を聞きたがつていたシユウが、昨晚、特に気にしていたのは、地上での

自分の行動であつた。

同行していなかったテリウスたちでは詳しい説明が出来なかったからであるらしい。同じく地上に出たマサキならより詳しい話を知っているだろうと、シユウとしては期待をしていたようだ。

とはいえ、その辺りの事情に関しては、マサキよりもリユーネの方が詳しいのではないだろうか。

DC総帥ビアンⅡゾルダークが娘、リユーネ。

マサキのざっくりとした説明を聞いたシユウは、途中で出てきた彼女の名前に引っかけかりを覚えた様子だった。彼女の話を訊くことは可能ですか。そうマサキに尋ねてきた彼に、マサキとしては応えてやりたくもあつたが、秘密基地の様相を呈しているこの地下施設に勝手にリユーネを連れてくる訳にも行かない。テリウスたちが戻つて来てもお前の記憶が戻らなかつたらな。マサキはそう答えるだけにした。

「記憶が戻るのが一番なんだがな」

「そうですね。でも、今のところは何も……」

「リユーネのことなんかは気にしてた様子だったじゃないか」

食べ終わつた後の後片付けは、今日もシユウがやるつもりであるようだ。キッチンに立ち皿を洗い始めた背中に、そうマサキが言葉を投げかければ、そういった意味ではないのですよ。シユウは困惑した様子で言葉を返してきた。

「彼女はDC総帥であるビアンゾルダークの娘であるのですよね。だから、ですよ。僕が何故その組織に属すことになったのか。そして一定の地位を築き上げるに至つたのか。彼女でしたら知っているのではないかと思つたものですから」

自分よりもリユーネの名前に反応したシユウに、マサキは面白くなさを感じていた。地底世界から地上世界へと。単身、彼を追つたマサキとしては、シユウの中で自分が一定の位置を占めているという自惚れがあつた。それをより強固なものとしたのが、他ならぬシユウの執着心だつた。性的にスノツプにマサキに迫つてきたシユウ。彼にとって特別な存在であるという自負は、マサキの自我を支えるひとつの拠り所でもあつた。

だからこそその不快感。そういった態度が言葉に表れてしまつていたのだろう。どこ

か云い訳めいた風に言葉を継ぐシユウに、「わかつてるよ」とマサキは頷く。

「お前にとって、あの男は心を惹かれる存在だったんだろ。そうじゃなきゃ最後まで付き合おうなんて思うかよ。独りで行動してばかりだったお前がさ。だからリユーネのことも気に掛かるんだ」

「そうは云ってはいないのですが――」

始まりからマサキに対して距離を取る男ではあった。まるで興味の範疇外。そういった態度を見せることも珍しくなかったシユウが、ようやくマサキの存在を認めるようになったのは、やはり月での決戦の後であるだろう。

歯牙にもかけていなかった少年が、自分を打ち倒すまでに成長した。

その事実を、彼はマサキが思っているよりも深く受け止めたようでもあった。シユテドニアスの侵攻を経て、再度、顔を合わせた邪神の神殿で、彼がマサキの呼びかけに応じて正気を取り戻したのも、恐らくは彼の中にマサキとの戦いの記憶が強く刻まれているからであるからだ。

彼の口から嫌味や皮肉が頻繁に吐いて出るようになったのも、そこからだ。

そう考えると、彼のああいっただ皮相的な一面は、気を許した相手にこそ向けられるものであるのかも知れない。マサキは自らの肌を辿ったシユウの指の感覚を思い出した。ただ気に入らないだけではああした行動には及べまい。それはマサキがシユウの善性を信じているからこそその思い上がりでもあった。

何より記憶を失ったマサキに対して、彼は優しかったのだ。

何を考えているのか読み取れないポーカーフェイスではあったものの、マサキに必要だと思われることを全てしてくれたシユウ。彼は記憶を失ったマサキが自分を求めたことに途惑い、葛藤しているようであった。結果的に彼はマサキを抱いたが、それはマサキが強く望んだからこそでもある。そうである以上、三度目の逢瀬について彼ばかりを責めるのはお門違いというものだ。

そんなことはわかつている。マサキは宙を睥んだ。

かといってマサキにも意地がある。彼とだけは二度とそういった関係を結んではならない。その決意が揺らぐことはないというのに、シユウがリユーネの名前に反応をみせてことが面白くない。自分はどれだけ身勝手なのか。マサキは苛立つ感情の赴く

がままに、爪先で小刻みに床を叩いた。

「何か、気に掛かることがあるのですか？ そんなに難しい顔をして」

洗い物を終えたシユウがマサキの許へと戻って来る。「いや。少し考え事をしていただだけだ」マサキはソファから立ち上がった。

「支度は充分か。だったら街に出るぞ」

彼の記憶がないのは紛れもない事実であるのだ。だのにマサキは、愚かにも自らの感情をぶつけてしまった。これだから、俺は。悔しさと切なさの後悔が入り混じった胸中を覚られないように表情を取り繕ったマサキは、特に準備することもないらしいシユウとともに居住エリアを出た。

「ところで、何処から地上に出ればいいんだ？ まさかあのカタパルトを使う訳にも行かないだろう」

「格納庫の奥に非常口があります。森の中にある洞窟に出るので、出入りが気付かれ難いのだから」

「自然にカモフラージュした地下施設か。難攻不落の要塞に思えるな」

「とはいえ、過去の大戦では占拠されてしまったこともあるようです。その際に正面出入口は破壊されてしまったのだとか。今となつては、そこに続く通路は土と岩盤に埋もれてしまっています」

「成程な」マサキはシュウの後を続いて通路を往った。

格納庫から居住エリアに辿り着くまで二十分はかかる道のり。この地下施設の全貌がどれだけのものであるのか、マサキは未だ知ることはなかったが、一部であってもこれだけの広さを誇るのだ。もし敵が攻め込んできたとしても、無理に戦う必要はないだろう。そう、逃げて遣り過すのも一興かも知れない。

「他に非常用の出入り口はあるのか。場合によっては、それらを利用することも考えないとならないが」

「これだけの巨大施設ですから、他にも幾つか非常口があるとは思いますが、僕が彼らに教えてもらえたのはそこだけです。自分の足で探索することも考えましたが、なにぶん、ひとりで回りきるには広過ぎて……」

ついでにシュウに訊ねてみたところ、この地下施設には指令室や資料室、通信室の

他に、研究プラントまで揃えられているらしかった。とんでもない巨大施設だ。マサキが驚いて声を上げると、研究プラントは未来の僕が後から作ったものらしいですが、そう云ってシユウは笑った。

「研究プラントって、個人で作れるのかよ」

「元々は訓練場であつたようです。そこを改修して研究用プラントにしたのだとか。覗いてみましたが、結構な設備でしたよ。あれなら僕のやりたい研究が全部出来そうですが、未来の僕はそのくらいとうに叶えているのでしょね」

格納庫の奥、グランゾンの左手側にひっそりと存在する扉をシユウが開く。

センサーが感知して自動で照明を点灯するように出来ているようだ。うつすらと明かりが灯った非常階段を見上げたマサキは、ガディフオールに乗って走った湖面からここまでの距離を振り返った。

かなり深い筈だが、どのくらい階段を上れば地上に着くのだろうか。

「カタパルトの深さからすると、結構な距離を上がらないとならない気がするんだが」「そうですね。休みなく階段を上り続けて三十分ぐらいといったところでしょうか」

「だろうな。けれど、それだけ時間がかかるというそグランゾンに乗りたくないな。行きはともかく、帰りに荷物を持ってここを下るのはキツそうだ」

「なら、グランゾンに乗ってみますか？ 僕に操縦は無理ですが、あなただったら出来るでしょう」

「馬鹿云え」マサキはシュウの背中を小突いた。「お前にとって可愛い我が子みたいなもんだろ。幾ら俺でもやっていいことと、悪いことの区別は付く」

訓練場を潰して研究プラントにしてしまったということは、この巨大施設での剣の稽古に使える場所は格納庫しかないということでもある。「まあ、基礎体力の向上の訓練にはいいか」マサキは躊躇うことなく階段を上り始めたシュウに続いて階段を上って行った。

きっかり三十分後。洞窟の中に出たマサキは、こちらですよ。と、道案内を続けるシュウの後を追って森に向かった。

さして入り口から遠くない場所に出たからか。洞窟の中で迷うことはなかった。けれども森の中はマサキにとっては迷宮のようなものだ。似たような景色が延々続く上

に、途切れがちな獣道。度々シユウが足を止めてくれなければ、ここでマサキは彼とはぐれてしまっていただろう。

どうやら彼はマサキが病的な方向音痴であることをテリウスたちから聞いていたらしい。マサキとの距離が開くと見るや否や、まるで心得ているといった風に足を止めてみせたシユウは、森から出るとマサキを振り返って歯を零して笑った。

「あなたが迷うことなく森を出られて良かったですよ、マサキ」

「何だ、知ってたのか。その割にはスタスタ先を行かれた気がするな」

「ちゃんとあなたが付いて来ているかは確認していましたよ」

木々が開けた先には平原が広がっていた。中天に座す太陽に照らされた草花が、そよ風に頭を揺らしている。さわさわと音を立てながら波打つ見渡す限りの平原。丸一日ぶりにラングランの自然を目の当たりにしたマサキは、その風光明媚なさまに目を細めずにいらなかった。

「街道はどっちだ」

「平原の先ですね。ほら、バスが走っているのが見えますよ」

湾曲する大地が雲に飲み込まれてゆくその切れ間を、一台のバスが走っている。かなりの距離だな。マサキは額に手を翳してこれから向かう先に目を遣った。

目印らしい目印のない道のり。

西を見ても、東を見ても、南を見ても平原が広がっている。絶望的な景色に方向音痴を自覚しているマサキは溜息を吐いた。辺り一面を草花に支配されたと云っても過言ではない世界。少しでも気を抜けば直ぐにシユウとはぐれてしまいそうだ。

唯一景色が異なるのが、今来た方角である北側だ。森の東側に湖、北側に山が広がっている。これを背にして歩けばいいんだな。マサキが云えば、「その通りではありませんが、それをわざわざ確認されると不安になりますね」シユウは驚きと呆れが入り混じった表情でマサキを振り返った。

「魔装機なしで街に出るのはあなたにとつては危険な道のりなのでは、マサキ？」

「何を云ってるんだ、お前は。徒歩だからまだマシなんじゃねえかよ。サイバスターに乗ってみろ。ラ・ギアスを一周しても止まらねえぞ、俺は」

「それは迷つてすることに気付かないという意味で、ですか？ それとも軌道修正して

もそうなるという意味で、ですか？」

「どっちもだよ」マサキは頬を膨らませた。

莫大なマサキの気は、サイバスターの計器類を狂わせてしまうことがままあった。スピードメーターや燃料計が壊れるのは序の口。だが、電波探信儀まで狂うとなると事情が異なる。

エネルギーの残量管理や武装の残弾管理は暗算でもどうにか出来るが、方角はそうはいかないのだ。

ラ・ギアスの太陽はいつだって同じ場所に浮かんている。太陽の傾きで方角がわからない世界。現在位置はおろか、進行方向もわからなくなったマサキは、幾度ラ・ギアスを一周したのか。

「ロープを持ってくればよかったですね。そこまで聞いてしまつては、繋いで連れて行かなければ無事に街に着ける気がしません」

想像よりも遥かに酷い状態だったのではないだろうか。自分の疑問に対するマサキの答えを聞いたシユウは、そう云つて困つた風に目を瞬かせた。だよな。マサキは自

分でも力のない表情をしていると思ひながら、それでも彼の不安を払拭してやらねばと、精一杯の笑みを浮かべてみせた。

「まあ……その、なんだ。出来る限り頑張るから、お前もちよつとは俺のことを気に掛けてくれると、はぐれて探すって手間が省けるんじゃないかって……」

「大丈夫ですよ、マサキ。僕はきちんとあなたを街に連れて行ってみせます」

「大きく出たな」マサキは目を見開いてシユウの顔をまじまじと凝視^{みつ}めた。「お前、俺の方向音痴を軽く見てないか？」

「この平原ですからね。あなたほどの身長があれば、はぐれても必ず見付け出せますよ」

やはり心の何処かでたかが方向音痴と軽く考えているのだろう。そういう問題じゃないんだよなあ。不安を煽るようなシユウの台詞にマサキが呟けば、長くこの話題を続けては、街に着くのが遅くなると思ったようだ。行きますよ。シユウが早速と、平原へと足を踏み入れてゆく。

「あ、おい。待ってって」

度々振り返つては、マサキが付いて来るのを確認しつつ、先を進んでゆくシユウ。その後が続いてマサキは平原を往つた。吹き抜ける風がどうしようもなく気持ちいい。ラングランの風だ。ふと口にすれば、そうですね。前方をゆくシユウが足を止めた。「外の世界はこんなにも色鮮やかで、こんなにも眩い。僕はやつと、ラングランという国の美しさを知った気がしますよ」

足を止めたシユウは、吹き抜ける風に身体を晒して立っている。

「王室を出ることがなければ知らなかった世界です。そういった意味では未来の僕に感謝をしてもいいかも知れませんか。彼は僕にこの美しい景色を授けてくれました。ここで生きてゆくことに不安はありますが、どうしてでしょうね。楽しみでもありません」

そう云つて再び歩き始めたシユウの背中、昨日よりも逞しさを増しているようにマサキには感じられた。

9歳のシユウ、彼はあのきらびやかな王宮という世界で、どう生きていたのだろうか？マサキは王室で生きていた人々を思い返した。アルザール、フェイルロード、セニア、

モニカ、テリウス……そして、シュウ。治安局の局長だったフェイルロードや情報局の局長であるセニアとは、彼らが魔装機計画に深く関わっていたこともあつて顔を合わせる機会に恵まれていたが、他の王族——わけでも当時まだ王族であつた筈のシュウとは、まるでと云つていくらい顔を合わせる機会がなかった。

この自然豊かな神聖ラングラン帝国という国家を、王宮という限られた世界から見下ろしていた彼らは、だからこそ外の世界を目指したのかも知れない。シュウに始まり、モニカにテリウス。魔力のなさ故に落ちこぼれ扱いをされていたセニアだけが王宮に残ったのは、そう考えると不思議なことだった。

彼女は何を成す為にあの場に残つたのだろうか？

マサキたち魔装機操者に寄り添い続けてくれている女傑。彼女のバックアップなしでは、マサキたちは思うように活動出来なかった……マサキはシュウの背中を眺めながら歩き続けた。口が達者な割に自分のことを多くは語らない男は、王族時代の自分を語ることもない。

セニアを残して去つていった前世代の王族たち。彼らは——そして、シュウは、こ

の広いラングランの大地で、そしてラ・ギアスという世界で、何を見て、何を知り、何を成したのだろうか。そしてこれから何を見て、何を知り、何を成してゆくのだろうか。

それを自分は見届けることになるのだろう。マサキは彼らとの切れぬ縁にそう思わずにいらなかった。

「ほら、街道が見えてきましたよ、マサキ」

馬車や人、バスが行き交う流通の要は、だだっ広い平原の中にあっても賑わいを見せていた。建ち並ぶ宿に食事処。町と呼ぶには規模の小さい集落は、旅人たちの疲れを癒す安息所であるようだ。

客引きに精を出す宿の呼び子たちや、食事処の看板娘たち。彼らに袖を引かれたりもしながら、集落の中央を走る街道に沿って歩いてゆけば、程なくしてバスの停留所に出る。マサキはシユウとともに時刻表を確認した。次のバスは十五分後に到着する予定だ。

「魔装機を使えばあつという間ですけど、歩いてゆくとなると大変ですね。待ち時間

も思つたより長いですし」

「でもまあ、こういうのも楽しいもんだな。普段サイバスターを使つてゐるからか、出掛けてゐるって気になれる」

「迷わずに済んでますしね」

「まあなあ。目的地にきちんと着けるってのは、嬉しいもんだよな」

バスを待つ人の列に並んで、到着までの間を他愛ない話に費やす。

朝食の席でもそれとわかるぐらいに上機嫌だった彼は、外に出たことで一層その傾向を強くしていた。

澆漖とした笑顔。マサキの方向音痴を話の種に軽口を叩く彼は、すっかりマサキに気を許しているようにも映る。底抜けに明るい彼に事情を聞けば、記憶を失つてからというもの、外に出ることを控えさせられてきたのだという。

自分の身を自分で守れるかも危うい状態であるシウを、彼らが外に出したくないと思うのは仕方がないことにせよ、壁が押し寄せてくるような錯覚に囚われる地下施設にシウを閉じ込めておくのはやり過ぎな気もしなくない。

勿論、敵の多い彼のことだ。記憶を失っていると知れば、ここぞとばかりに命を狙われかねない。

執念深い彼らの相手をするのは、マサキであつても骨が折れる。何せ、捨て身の攻撃も厭わないような連中だ。そうである以上、マサキとしては、敵をおびき寄せるような結果になるのだけは避けたかった。マサキはシュウに街での注意事項を伝えた。物珍しいからといって周囲を眺め過ぎないこと。危険を察知しても慌てずにマサキの行動に合わせること……わかりました。と、真顔で頷いたシュウは、改めて自分が置かれている立場を自覚したようだ。

「僕はかなり浮かれていましたね。もし何かが起こったとして、その対処をするのはあなたなのに」

「そこは気にしなくていい。俺がやると決めたことだからな。それに、今は珍しいことも、いずれは珍しくなくなるんだ。それまで迂闊な真似は控えておけて、それだけの話だ。お前が気に病むようなことじゃない」

それに対して、はい。と頷いたシュウは、けれども緊張感が漲った表情を戻すつも

りはないようだ。

「外出するのにも用心が必要なんというった生活を、未来の僕はどう捉えていたのでしょうか。うね。自分の自由に時間を使えるという意味では気軽ではありますが、外に出るのにも心構えが必要という意味では、王宮に居た頃とそこまで変わりがない気がします」
笑い顔もぎこちなく、ぼつりぼつりと語りかけてくるシユウにマサキは答えた。

「その答えはお前が自分で見付けるんだ」

望んで手に入れた訳ではない生活を、彼がどう感じているのかなど、マサキが現在のシユウから聞けた筈もない。けれども傍目にしている分には、シユウは制限のあるこの生活を謳歌しているようだった。

気紛れに方々に姿を現わし、自らが望み願うままに振る舞う。

人間関係のしがらみや、かつての立場に対するしがらみと、様々な思惑が絡み合う中で生きている彼は、それらに雁字搦めに縛られているように見えることもあったが、だからといって自ら行動範囲を狭めていたりしなかった。むしろそういった環境に反発するかのように、自身の行動範囲を広げてゆく。マサキの目にシユウが自由に

生きているように映るのは、そうした彼の奔放な性格が彼自身の行動に影響を与えているからなのだろう。

「自分で……ですか。まるで僕の記憶が戻らないようなことを云う」

ぼつりと呟いたシユウに、記憶を取り戻したくないのか。マサキは尋ねた。わかりません。そう答えたシユウは悩んでいるらしかった。

自身の記憶を「知らなければならぬ」と、云い切ってみせた割には歯切れが悪い。やっぱりな。マサキは視線を足元に落とした。乾いた砂がそよぐ風に撫でられて、砂埃を上げている。

ふと未来に放り出されてみれば、自身の悪行が広まり切ってしまったている。それはどれだけの衝撃を9歳のシユウに与えたことだろう。それどころか、それが原因で絶えず命を狙われる事態に陥ってしまっている。

彼にとって昨日と今日では、世界そのものが大きく姿を変えてしまったのだ。

その現実を受け止め切れていない9歳のシユウは、だからこそ記憶を取り戻したくないと望んでいるのかも知れない——と、マサキは考えていた。

そうすれば、現実を直面しないで済む。

未来の自分が犯した罪を償わなければならないと考えている彼にとって、現実は無情で不条理なものだ。どうしてそれを素直に受け入れられたものだろう。

強靱な精神力で自我を保ってはいるが、彼の中身はまだ9歳の少年である。大人びたこと口ばかりを利いているとはいえ、年相応な面がないなどどうして云えたものか。マサキはシユウを見上げた。マサキの問いに悩まし気な表情を晒してみせた彼は、自身の失われた記憶の内容を識^しりたいと望みながらも、取り戻したいとまでは望んでいないのかも知れない。

だから、「わからない」なのだ。

記憶があつた方が幸福なのか。それともないままの方が幸福なのか。彼の境遇を深く知らないマサキでは、その答えは見付けてやれそうにはなかった。彼に答えを自分で探すように云つたのは、だからだった。だが、現在のシユウが失われてしまつていることに、心の一部が欠けてしまったような寂しさを、マサキ自身が感じているのは事実だ。

「まあ、どちらにせよ、戻るときには呆気なく戻っちゃうもんだ。あんまり深く考えるな。もしかすると記憶を取り戻したお前は、それまでの自分の行動や考えを “どうかしてた” と思うかも知れないぞ」

その言葉を意外と受け止めたのか。マサキを見下ろしているシュウが瞠目する。

「記憶を取り戻したあなたはそう思ったのですか、マサキ？」

「俺か。俺はな……」

続きを口にしようとした矢先、響いてくるクラクシヨンの音。顔をそちらに向ければ、土煙を上げながらバスが走って来るところだ。「この話はまた今度な」マサキはバスに乗り込むべく道路に向き直った。

あまり多くを語りたい話でもない。

記憶のなかったマサキが何をしたのか。そして、その記憶を使って何をしているのか。それだけは9歳のシュウに知られてはならないのだ。マサキはバスが来たのを契機に、話を切り上げることにした。

「混んでそうだな」

「座るのは難しそうですね」

フロントガラスの奥に、まばらに立つ乗客の姿。ややあつて停車したバスにシユウとともに乗り込んだマサキは、座れる場所を探して周囲を窺った。けれどもどの席も既に埋まつてしまっている。マサキは即座に座るのを諦めて、少しでも楽に立てそうな位置を探した。

最後尾の座席の前、進行方向から左手を向いて手摺りに掴まる。がたごとと音を立てながら、畦道のような街道を往くバス。しつかり手摺りに掴まっていなければ倒れてしまいそうだ。

「あんまり乗り心地は良くないな。ラングラン国民はこんな交通事情の中で生活しているのか。足が痛くなりそうだ」

「道が整備されればまた違うのでしょうけど、その辺りは各州の議会の管轄なので……」
「どこの世界も、インフラ整備の状況は一緒ってか」

マサキの故郷である日本では恒例の光景。道路工事ばかりが目立つようになる年の暮れをマサキは思い出した。

無駄に道を塞いでいるとしか思えなかった工事の数々は、継ぎ接ぎだらけとなった道を自転車で走っていたマサキからすれば、本当に効果があるのか不明なものだったが、こうして未舗装な道を走る機会に恵まれると有難みを実感する。

「意味があつたんだな」

マサキがぽつりと洩らせば興味を喚起されたようだ。シユウがマサキの顔を見下ろしてくる。

「何の話です？」

「地上でさ、年末になるとあちこちで道路工事が始まるんだよ。一度に全部じゃなくて一部分だけ、つてのが色んなところであるからさ、道が通り難くなつて仕方がねえつて思つてたんだが」

「一度に全部となると、かなり大規模なインフラ整備になりますね。予算もかなりの額に上るでしょうし、封鎖した道の代わりをどこにするかという問題もあります。地方の行政では一部で済ますのが限界なのではないかね」

「大人たちは余つた予算を道路工事で消費してるんだつて云つてたけどな。でも、そ

ういった意味だろうが、道路をマメに整備するつてのには意味があつたんだなつて思つたよ」

「やらないよりかはやつた方がいいですよ。交通の発達は商業や産業を盛んにします。それは通貨の流通に弾みを付けるでしょう。国を潤したければ、人を動かせ。政治の基本です」

マサキからすれば当たり前の世間話も、彼にとつては如何に国家を発展させるかという政治論になつてしまうようだった。あいつもそうだったな。何かに付け、国のシステムを論じたがつた男は、幼少期よりそう躰けられてきていたのだろう。かなりの一家言持ちであつた。

9歳のシュウの態度でそれを知つたマサキは、今更ながらに彼の出自を強く意識した。

「お前、やつぱり王族なんだな」

それに対して、シュウは肩をそびやかしてみせただけだった。

鼻につくほどの自信家でありながら、自らの立場を笠に着ることのない男は、かつ

ての自らの地位に思い含むところがあつたのだろう。あれこれ詮索するのが好きではないマサキは彼にわざわざ過去を尋ねることをしなかったし、彼もまたわざわざ語るような真似をしたりはしなかったけれども、そうした話題になつた折になんとはなしに伝わってくる空気は、彼が過去についてつまびらかにするのを嫌がっていると感じさせるに充分足り得た。

マサキはそれを彼の劣等感の表れだと思つていた。

世界を混乱に陥れた首謀者として指名手配犯と扱われるに至つた過去は、彼の意思に反して起こつたことであつたからこそ屈辱的な記憶となつたのだと。だが、今のシユウの態度から察するに、それはマサキの読み違いであつたようだ。

がたんごとん。バスは不規則な揺れを刻んでいる。

宿場町を抜けたバスは、今は街まで続くだろう草原の中をひた走つていた。馬車の轍も目立つ未舗装な道。運転手にどれだけの腕があらうとも、スムーズにバスを走らせるのは難しいことだろう。頻繁に石に乗り上げては左右に振れる車体に、マサキはどうかバランスを保つのが精一杯だった。

「——地上はどういった世界なのですか」

途切れた会話を繋ぎとめるようにシユウが尋ねてくる。

「どういった世界……か。その質問に答えるのは難しいな」

「あなたが住んでいたところの話でいいですよ、マサキ」

彼にとって、地上世界はまだ未知なる場所であるようだ。あからさまではないにせよ、好奇心を窺わせる態度。切れ長の眦の奥に潜んでいる紫水晶の瞳が、きらりと輝いたようにマサキの目には映った。

「俺が住んでいた場所か？ この世界と比べりやごちやごちやしてるぞ。何処に行っても建物が密集してるし、そこかしこを電車やら車やら自転車やらが走ってる。普通に歩く奴の方が珍しいんじゃないか。何せわざわざウォーキングなんて、歩くのをスポーツにしてる奴がいるくらいだ」

「まだ科学文明の時代なのですよ、地上は」

「そうだな。資源に環境、問題が山積みな世界だ」

「自然はどうです？ あなたの話だと、自然がそんなないようにも思えますが」

「都市部から離れりや嫌つてほど自然が広がってるさ。田んぼに畑、山に川。まあ、人の手が入っちゃまつてる土地を、草木が生えてるからって自然扱いしていいのかって問題はあるけどな」

マサキの言葉から自分なりの地上のイメージを作り上げたようだ。成程、と、頷いたシユウが、「生き難そうな場所ですね」きつと心の底から出た言葉であるのだろう。云って、けれど——と、言葉を継いだ。

「死ぬまでには一度、訪れてみたい場所です」

白河愁。彼が持つ名前と地上世界は、恐らく無関係ではないのだろう。どこか遠くを眺めるような眼差し。雲の切れ間に色を薄くしてゆく大地を、バスの車窓越しに見詰めながらシユウがぼつりと呟く。

「もう何度も地上に出た後だぞ。今のお前は」

「わかってはいるのですけど」大まかな事情は聞いているのだろう。シユウの笑い顔は儚げだ。「そこだけ記憶を取り戻すなんて、都合のいいことは出来ないでしょう。いえ、それさえも思い出さない方がいいのでしょうか。僕は地上でも非道な行為に手

を染めてしまったようですし……」

自らが犯してしまった罪に押し潰されそうなプレッシャーを感じている。それが窺える9歳のシュウの態度の数々に、マサキはどう言葉をかけてやったものか迷った。一足飛びに強くなれと云ったところで、そう割り切れる話でもあるまい。

一日ばかりの付き合いでも、9歳のシュウが芯の真つ直ぐな性格であることは知れる。果たして現在の彼はどうかだったのだろうか？ 人が変わってしまったかのように太々しくなった現在のシュウ。それが彼が辿ってきた過酷な道のりの結果であるのだとしたら、運命とは不公平に出来ているとマサキは思う。

「お前の記憶が戻らなかったら、地上に連れて行ってやるよ」

「……本当ですか？ でも、僕の為にそんな。ラ・ギアスは地上世界を快くは感じていませんよ。そんなことをしたら、あなたがどういった懲罰を受けたものか」

「野蛮な人種だつてな」マサキは声を上げて笑った。「気にするな。そういった扱いには慣れてる。それに俺にはサイバスターがあるんだぜ。まあ、だからって勝手に地上に出ちまったら問題にはなるかな」

ラングランに召喚された直後。サイバスターの操者として、そして剣聖ランドールとして我が世の春を謳歌したマサキは、その後に庇護者であったフェイルロードを失ったことで、地上人を取り巻く現実と直面した。

直接、口を聞いてもらえないのは当たり前。聞こえよがしに野蛮人と云われたことも数多くあった。

どれだけマサキがラ・ギアス世界の為に身体を張ろうとも、態度を変えることがない彼ら。それはマサキに強い決意と覚悟を求めさせた。決して全ての人間から理解が得られるとは限らない。それでもこの世界を護る為に戦い続けるのか——と。

「笑い話ではないですよ、マサキ」

「大丈夫だ」マサキはシユウに笑いかけた。「俺は魔装機神サイバスターの操者だからな。セニアにちよつとどやされればいいだけの話さ」

「本当ですか？ 本当にそれだけで済みますか？」

「当たり前だろ。大体、どうやって俺を止めるんだよ。魔装機神でなきゃ地上に出られないっていうのに」

マサキの言葉を聞いたシュウは悩まし気な様子を見せた。彼はマサキが魔装機神の操者という立場を盾に、規則違反を押し切ってしまっていることに気付いてしまったのだろう。それでも抗い難い地上への関心。それが彼の心を揺らがせているのだ。

「あんまり難しく考えるな。見たいものを見りや記憶が戻るかも知れないぞ。それと比べたら、セニアにどやされるくらいどうってことはないさ」

がたんごとん。バスが揺れる。

マサキたちに限らず賑やかな車内は、どうかするとシュウの言葉を掻き消してしまいうさだ。

がたんごとん。街を目指すバスが揺れる。

マサキはシュウの返事を待った。潔癖な彼はこの程度の保証では、地上へ行くのを躊躇うかも知れない。そう思いつつも、心のどこかでは彼が誘惑に勝てないだろうとも思っていた。

「……そうですね」

ややあつて、マサキを向いたシウの顔は彼の覚悟を窺わせる力強さに満ちていた。「わかりました、マサキ。いつかでいいです。僕を地上に連れて行ってください」

「ああ、約束だ」マサキはその言葉に深く頷いた。

※ ※ ※

長く揺られたバスから街へと降り立ったマサキは、先ず帰りのバスの時刻を確認した。

街から出るバスの本数は決して多くないようで、時刻表には空白が目立つ。多くても一時間に一、二本。暗くなる前に地下施設に帰り着く為にも、ここは時間厳守で行きたいところだ。遅れないようにしないとな。バスの到着時刻を胸に刻んだマサキは、シウとともに大勢の人で賑わう大通りに足を踏み入れた。

「この街には詳しいのですか」

「いや。多分、一度ぐらいは来たことがあるんじゃないかとは思うが」

「方向音痴なんですよね」

「残念ながら」マサキは肩を竦めた。

方向音痴でありながら、初めての場所にも物怖じせずに飛び込んでゆく。そういった向こう見ずなマサキの性格を心配しているらしい。辺りを見回したシユウは、街の中央に聳え立つ時計台を指差して、

「はぐれたらこの場所で待ち合わせというのは出来ますか。あそこに丁度いい目印になりそうな時計台がありますか」

「そこまで辿り着けるかな。あれを目標して街を出ちまうぐらいは日常茶飯事だしな」

「わかりました。とにかくはぐれるなということですね。気を付けます」

そうしてくれ。そう云って、マサキは周囲に目を遣った。店を飾る色取り取りの布製の底オリニングに、意匠を凝らした看板。軒を連ねる店の数は、流石は街の入り口だけはある。矢鱈

と飲食店が目につくのは、街の外から訪れる人々の需要を当て込んでいるからか。時計塔に向けて伸びているメインストリートは平日とあっても活況だ。

喫茶店に定食屋、レストランに酒場。中には切り分けたフルーツや海鮮を串に刺して売っている店もある。歩き食いにはもってこいだが、今日の目的はそこにはない。

先ずは自分たちの目的を叶えなければ。

マサキは飲食店の谷間に並ぶその他の店を一軒々々見て回った。八百屋、魚屋、洋品店、雑貨屋、家具屋……鍛冶屋の需要はそこまで多くはなければ、煙が出ることもある。大通りにはない可能性も高かったが、作られた製品を扱っている店があることも多い。根気良く武器屋を探し回っていると、どうやら目撃くも書店を発見したようだ。早速と足を止めたシユウがマサキの袖を引いた。

「少しだけ見てもいいですか」

利発な性質ではあっても、中身はやはり9歳の少年だということなのか。それともそれが、知識の摂取が快感だと云い放った彼の無邪気さであるのか。書店を目の前にして子どもっぽさを発揮したシユウに、やはり慣れない——と、マサキは頭を掻いた。

「十分だけな」

マサキは店の外でシユウの用事が終わるのを待とうとしたが、シユウとしてはこの場に方向音痴のマサキを置いてはいけなと思ったようだ。あなたも中に、と乞うてくるシユウに、その方が安全かと考え直したマサキは彼に続いて書店の入り口を潜った。

店内に足を踏み入れるなり、鼻腔を擽ってくる書店独特の香り。真新しい紙とインクの香りが混じり合った匂いを嗅ぐと落ち着くのだそうだ。顔を綻ばせて書棚に向き合ったシユウに、俺には一生理解が出来ない感情だな。マサキは首を傾げた。

そして、迷うことなく次から次へと本を手にしてゆくシユウを目の前にながら、彼の用事が済むのを待った。

「えらいスピードで本を選んでる気がするんだが、どうやって自分が必要とする内容だって判断してるんだ。お前、一ページも中身を読んでないだろ」

さっと中身に目を滑らせては次、また次と、マサキには到底無理なスピードで、自身が必要とする本であるか否かを選別してゆくシユウに訊ねてみれば、彼にとっては

当たり前のことであるからか。「中身をばつと見れば、後は本が呼んでくれますよ」
さらりと云い放った。

「本が呼ぶ」

口を動かしつつも手と目を動かすのを止めない彼に、マサキとしては奇異なるものを目の前にしている気分になる。本が呼ぶ。その感情なるがままに言葉を発すれば、呼ばれませんか？ と、シュウが不思議そうな表情を浮かべてマサキを振り返った。

本気でそういうものだと思うているようだ。いいや、と首を振ったマサキに、「家庭教師の先生方はそういうものだと仰っていましたか」一般人とは感覚がかけ離れた人種を例に挙げて首を傾げてみせたシュウは、これ以上マサキと会話を重ねても話が発展しないと思ったのだろう。少しの時間も惜しいといった様子で本棚に向き直った。
「……そりゃあ、お前らの世界ではそれが常識なんだろうよ」

マサキは自分が感じたことのない感覚に、彼と自分との違いを思い知った気がした。何かを知りたいと思った時、マサキは先ず他人に訊ねるところからスタートする。そして与えられた知識に満足する。興味深いと感じれば更にその先を調べることもあつ

たが、それにしても他人の知識が頼りだ。

けれどもシユウは違う。聞いて知るが常なマサキに対して、彼は先ず、自分でその知識を獲得するにはどうすればいいかを考えているようだ。他人に頼るのは最後の手段。彼にとって知識とは目指すものではなく、呼ばれるものであるのだろう。

「今のところ必要な本はこのぐらいでしょうか」

「凄いな。十分でそれだけ選べるなんて」

きっかり十分で、自身が必要とする本を選び終えたシユウにマサキは感心した。

本を読みなれているからこそその動き。知識人とはこうやって必要な本を選ぶのだ。

それを思い知ったマサキは、彼らと自分は根本的に人種が違うのだと感じずにいられなかった。

——わかんねえ。

そういつた立派な知識人たる彼が、済む世界が異なるマサキに、どうして性的な関心に向けてくるのか。会計に向かったシユウの背中を見送ったマサキは、入り口前で彼の戻りを待ちながら、疑問符が浮かぶ胸の内を消化しきれずにいた。

「有難うございます。助かりました。これで未来の僕が読んでいる本の内容が頭に入ってきてそうです」

「札を云われるほどのことは何もしてないがな」

会計を終えた彼の手には、十冊ほどの本が詰まった手提げ袋が提げられている。後にしても良かったんじゃないか。本来の目的を叶えるより先に出来た結構な量の荷物に、店を出たマサキがそう云えば、これもトレーニングの一環ですよ。幸せそうに笑ったシユウがそう嘯いてみせた。

「そのでかい図体じゃ足りないだろ」

「確かに、軽いですね。まあ、一般書店に置いてある本ですし、こんなものかと」

昨日、シユウの膝の上に置かれていた本。どこで殴つても人を殺せそうな厚みの本は、まさに鈍器と呼ぶに相応しかった。あれと比べれば、今彼が手にしている紙袋の中に入っている本はどれも薄い。

「それにしても、未来の僕がこんなに育つとは思ってませんでした」

現在の自分との体格差に慣れつつある様子のシユウではあったが、それでも手足が

余る身体にはまだ違和感があるようだ。自らの身体のサイズを確かめるように手のひらををしみじみと眺めたシユウに、既に成長しきった姿しか知らないマサキは、
140センチか。彼の9歳の時点での身長を改めて口にした。

「成長期に苦労してそうだよな、お前」

「成長痛ですよ。夜中に骨が軋む感触があるのだとか」

「そうなんだよ。あれは痛え」

小学校の時点で前から数えた方が早かったマサキは、中学に入るなり身長が伸び出したタイプだった。測れば測っただけ伸びていく身長。あつという間に足りなくなつた制服の丈に、理不尽にも教師はマサキを叱った。風紀を乱すな。痛みで眠れなかつた夜を数多く経験していたマサキは、理解に乏しい周囲の環境に、成長が止まつて欲しいと何度も思つたものだ。

「あなたも苦労したのですね」

そういつた思いをシユウもしたのではないかと思うと、親しみにも近い感情が湧いてくる。マサキは隣に立つシユウの顔を見上げた。頭半分は高い。
180センチを数える

長軀とあつては、その苦しみはマサキの比ではなかつただろう。

「全くだ」マサキは視線を大通りに戻した。「広場があるな。あれは案内板じゃないか？」

少し先で噴水が飛沫を上げている。どうやら、マサキたちが歩いているメイנסトリートと直角に交差する形で、別の大通りが走っているようだ。その中央を広場としているのだろう。ベンチで休む人も多いそこに掲げられた案内板。闇雲に武器屋を探して回るよりは——と、マサキは広場に足を向けることにした。

鳩が空を舞っている。

ベンチの誰かが餌を撒いたようだ。足元に寄ってきて餌を啄んでは、行き交う人々を避けて空へと飛ばたいて行く。風船を持っている子どもがいるのは、何処かで配っているからだろう。きやつきやと声を上げながら両親とともにマサキたちの目の前を通り過ぎてゆく子どもに、可愛らしいですね。シユウが目を細めた。

「可愛らしいって、お前も子どもだろうに」

「こんな風には遊ばせてはもらえなかつたので」寂し気な表情をみせたシユウが続け

た。「羨ましくもあります」

シウは勿論のこと、フェイルロードにセニアとモニカ、そしてテリウスと、王室で育った彼らがどういった子供時代を送ってきたのか。マサキは彼らの口から訊いたことがなかったが、彼らの逞しい生き様を見てみると、マサキたちが過ごしてきたような子どもらしい幼少期を送ってきたのではないだろうと予想が付く。

マサキはシウの背中をポンと叩いた。

職業選択の自由が保障されているラングランに於いて、たったひとつの不変なる血統——王族という檻に閉じ込められた彼らには、それ以外の生業に就く選択肢は与えられなかった。そう、モニカやテリウスがしてみせたように、重罪人の咎を受ける覚悟を背負って王室を飛び出すより他には……

シウが様々な学問や習い事、果ては武芸にまで通じているのは、そういった背景あつてのことだ。未来の神聖ラングラン帝国を正しく導いてゆく為に、彼はそれらの教養を国家によつて身に付けさせられた。その為に彼が費やしただろう膨大な時間は、どれだけ幼い頃から教育を受け始めたとしても早過ぎることはないぐらいだ。

その時間の分、彼は子どもらしく過ごせる時間を奪われてきた。

大丈夫ですよ、マサキ。風船を手にした子どもが人いきれの中に姿を消してゆくのを眺めていたシユウは、ややあつて背中に置かれたマサキの手に気付いたようだ。微笑みながら振り返ると、行きましよう。と、マサキを促して案内板の前に立つ。

「武器屋はあちらの通りにあるようですね。宿屋を目印にすればすんなりと辿り着けます」

「宿屋の隣に武器屋って、まさしくRPGの世界だな」

「RPG?」シユウが怪訝そうな表情を浮かべた。

「そういうゲームのジャンルがあるんだ」

そうマサキは答えてみせるも、シユウにはいまいち伝わっていない様子だ。

地上世界よりも発達した文明を誇るラ・ギアス世界だが、マサキが見聞きした範囲では、電子技術を用いたゲーム機というものは存在していないようだ。それを裏付けるシユウの反応に、やっぱりな——とマサキは思いつつも、過剰に発達した技術力のある世界。作れない筈がない遊具であるだけに、釈然としない思いが残る。

「科学文明時代があつたなら、ゲーム機が発達しなかつたなんてことはねえと思うんだがなあ」

「ゲーム機、ですか……ボードゲームやカードゲームはプレイしたことがあります、ゲーム機というものには心当たりが……」

「そう考えると、地上の方が文明的には贅沢なのかも知れないな」シユウを促して歩き始めながらマサキは云つた。「味気ない世界つて意味では地上の方が上かも知れないが、選べる選択肢が幾つもある」

豊かな自然と発達した技術、そして剣と魔法の世界が同居しているラ・ギアス世界には、家に閉じこもつて遊ぶようなゲーム機の実在は必要ないのかも知れない。メインストリートを折れた先の通りにも溢れる人々の群れに、マサキはそう感じずにいられた。なかつた。

街角で立ち話に興じる大人たちに、通りを駆け抜けてゆく子どもたち。連れだつて歩く人々の手には、食べ物やら風船やら荷物やらと様々な品が握られている。その表情は千差万別だったが、マサキの目には彼らが伸びやかに暮らしているように映る。

「ゲーム機というものは、その、どういったものなのでしょうか」

シユウを伴ってその通りを往けば、彼はゲーム機という存在に関心を持ったのか。話の続きとばかりに尋ねてくる。

「ひとりでだったり、複数人でだったりでゲームを楽しむ機械だよ」

「それは機械である必要があるのでしょうか」

「あるんじゃないか。いや、どうなんだろうな。そもそもラ・ギアスがファンタジー世界みたいなもんだもん。お前にとっては物足りなく感じるかも知れないな」

マサキの説明は、シユウにとつては想像力だけでは補えないものであったようだ。テーブルゲームで十分な気がします——と、首を傾げた彼に、地上に行けばわかるさ。云って、マサキは通りの先に目を遣った。

建物と建物の間をフラッグが繋ぐ通り。降りしきる太陽の光が色鮮やかに周囲を照らし出している。眩さに目を細めながら、シユウをともなつて人の流れに任せて通りを往けば、やがて目印となる宿屋が見えてきた。

あれか。マサキは隣に立つシユウに訊ねた。隣の建物に武器屋を示す看板が掲げら

れている。恐らく、と答えたシユウが先に軒先を潜る。マサキも続けて店内へと足を踏み入れた。

焼けた鉄の匂いが鼻に満ちる。恐らく、店の奥が工房になっているのだろう。

マサキはシユウと並んで、壁際に沿って並べられている剣を眺めた。街と街の距離があるラングランでは、移動の際に護身用の刀剣を持ち歩く民衆も少なくない。

長閑に見える世界ではあるが、都市部を除いた地方の治安はそこまで良くないのが実情だ。追剥に盗賊は勿論のこと、山賊に海賊と不屈き者には事欠かない。時に行き過ぎた力を持ってしまふ彼らを、マサキは任務で何度討伐したことか。

危険が潜む外の世界。店に並んでいる剣は、彼らと戦うぐらいであるのなら事足りそうだが、シユウを狙っている腕利きの暗殺者たちの相手をするには心ともない。

「練習用でしたらこの辺りでしょうか。この長さが一番しつくりきます」

「実戦用の剣も欲しいところだな」

「今からオーダーするとなると、それなりに時間がかかります。その間に記憶が戻らないとも限りませんし、当面はこの剣でいいかと思いますが」

「まあ、確かなな……」ついでとマサキも自分用の剣を選ぶ。

重くもなく、軽くもない。それでいてしなやかな剣。注文は多いが、普段通りの動きをする為にも、愛用の剣に近い感触の剣が欲しい。マサキは次々と剣を手につった。自らの伸びた手足に不慣れな現在のシユウであれば、剣を持たずとも相手は出来たが、元々の能力が能力だ。いつかは剣を持つて相手をしなければならなくなるのは目に見えていたし、何よりどのタイミングで敵が襲いかかって来るかがわからない。

剣技を頼りとするマサキにとって、剣とは守るべき他人の命を預けるものである。不安定な状況に置かれているシユウの為にも出来得る限り上質な剣を持ちたい——そう望むのは、当然の成り行きでもあった。

「これかな。値段は張るが、これなら思った通りの動きが出来そうだ」

剣を購入し終えたマサキは、早速とその剣を腰に下げた。ずしりと腰にかかる重み。この方が落ち着くと感じるのは、それだけ剣を扱うのに慣れたからでもあるのだろう。これさえあれば万が一の事態が起ころうとも、納得のゆく戦いを展開出来そうだ。そう感じさせる程度には、マサキが購入した剣はその手に馴染んだ。

所持金に余裕があれば、予備にもう一本購入したいところであつたが、今後、また街に出る機会が訪れないとも限らない。その時の為にも所持金には余裕を持つておかねば。同じく剣を下げたシウとともに店を出たマサキは、食材を買い出す前に、街を少しだけ見て回ることにした。

「大丈夫でしょうか。あちこち歩き回つて。あなたを危険に巻き込むような事態にならないればいいのですが」

「また来れるとも限らないしな。外の空気を満喫しておきたいんだ」

武器屋の左側に伸びている道は高台に続いている。マサキは迷つた。来た道に戻つて時計塔に行つてみるか。それとも高台に行つてみるか。

シウ曰く、高台の上には平和を祈念する鐘が置かれていて、誰でも自由に撞けるようになっているらしい。対する時計塔は内部への立ち入りは禁じられていたが、下に広がる広場では、大道芸人たちのショーが見られるらしい。

「どっちに行くか悩むな」

「バスの時間もありますしね」

遠く天に伸びている時計塔を見上げてみれば、街に到着してからもう一時間余りが経過していた。バスの時間まで一時間半ぐらいだとしても、どちらか片方を見るのが限界だろう。悩んでいる猶予はない。どちらもそれぞれ魅力的に感じられたマサキは、決断をシユウに任せた。

「なら、鐘を撞きに行ってもいいですか」

「いいのか？　時計塔に行っても構わないんだぞ。さっきの子どもは、多分時計塔に行った後だろ」

「風船って歳でもありませんよ」肩を竦めてみせたシユウが、それに——と、言葉を継いだ。「僕にはそのぐらいしか出来ることはありません。このラングランの地が、二度と動乱に巻き込まれることのないように祈ることぐらいしか」

「……わかった。行こうか」

マサキとしては、あまり思い詰めるなど云ってやりたかった。

シユウの過去に何があったのかはさておき、サーヴァーヴォルクスへの抵抗の意思からして、彼が自らの意思で邪神教団に属することになったのではないのは明らか

だった。彼自身の力ではどうにもならなかった出来事、しかも9歳のシユウにとっては未来の出来事だ。それに対して自責の念を抱いて何になろう。

邪神教団を殲滅すべく日々戦い続けている現在のシユウ。五百万人の信徒を抱える教団は、伊達や酔狂や思い付きだけで滅ぼせるものではない。そう、彼はそうしなければ自らを赦せないまでに、自らが犯してしまった罪を悔いている。

けれどもその言葉は、9歳のシユウにとっては何の慰めにもならないのだ。

フィクション

虚構の世界の話であれば、ここから過去に戻って未来を変える戦いが始まるころだろう。けれども、これは現実だ。ノンフィクションどれだけ9歳のシユウが悔やみ、全てを取り戻そうとしたとしても、彼が過去に戻ることはない。

彼はこれから飛び越えてしまった歳月を、当たり前のこととして受け入れていかなければならかった。

マサキはシユウと肩を並べて歩きながら、彼の内心を慮った。確定した未来に放り出された彼の苦悩は計り知れない。

「すみません。僕の我儘に付き合わせてしまつて」

「氣にするな。そういった由来の鐘なら、俺だつて撞くさ」

丘の斜面に建つ住宅の隙間を縫うように走っているなだらかな坂道を、マサキはシュウとともにその頂に向かって上つて行つた。

時折、カーン、カーン……と、平和の鐘が頭上から鳴り響いてくる。誰が鳴らしているのだろうか。昼下がりの閑散とした通りには、観光客らしき人影は見当たらない。

「観光客が物見遊山で向かうような場所じゃなさそうだな」

「あるといつても鐘ぐらいですしね。見晴らしはいいらしいですが、見れる景色と云つても街と平原ぐらいでしょうし」

「そういうのも楽しいんだがなあ」

途中から七曲りになつてゐる坂を、踏みしめるように進む。

背の低い建物が多いからだろう。連なる屋根。眼下に広がっている見渡しのいい景色にマサキの心は浮きたつた。

「頂上に着くのが楽しみだ。さぞやいい眺めだろう」

「ラングランの自然は豊かですからね」

「あるがままの自然つてのはいいもんだよな。人の手が入った世界つてのは、便利だが疲れちまう」

そこから歩くこと十五分ほど。住宅地もまばらとなった道にある曲がり角を折れると、開けた景色の先に、石を積み上げて造られた階段が空に向かって伸びている。

「……これは上るのに骨が折れそうだ」

「傾斜がきついですね。上るのはさておき、下りるのは難儀しそうです」

階段の上から鐘の音が聴こえてくるということは、この先が高台になるのだろう。頂の様子が微塵も窺えない急な傾斜。階段の段数は百を下らなさそうだ。目で距離を測ったマサキは後ろに続くシユウを振り返って、荷物を受け取るべく手を差し出した。

「持つぞ」

普段であれば気にも留めない彼の荷物にマサキが気を配ったのは、彼が流行り病から生還したばかりであったからだ。

「大丈夫ですよ、マサキ。未来の僕は僕よりも体力があるようですし」

「けど、この階段は結構なもんだぞ」

「このぐらいでへばっていたら、あなたとの稽古も続きませんよ」

「それもそうだな。だが、少しでも不調を感じたら直ぐ俺に云え。お前は病み上がりでもあるんだ。それに、いざつてこともある。身軽に越したことはないからな」

「わかりました。その時には直ぐに云います」

とはいえ、記憶を失った彼は外の世界に出られない環境にあっても、きちんとトレーニングを積んでいたようだ。

どうかするとマサキを置いて行きかねない勢いで階段を上つてゆくシユウの足取りは、まるで背中に羽根が生えているのではないかと見紛うまでに軽やかだ。

後を追いかける形になったマサキは、中身は9歳だもんなあ。そう眩かずにいられなかつた。

「身体が軽くて仕方ない年齢だろ、今のお前」

「でもそれは、その動きに付いて来る身体があつてこそですよ」

「あんまりあいつが真面目にトレーニングをしてとは思えないんだがなあ」

身体能力に恵まれているマサキも努力を知らない側の人間ではあったが、彼の場合はその効力が及ぶ範囲が広過ぎた。学術、魔術、剣術……才能の塊である彼は、料理であろうとそつなくこなしてみせる。

出来るのが当たり前な彼の技術は、どれだけ高度であろうと驚かれることがなかった。シュウ自身もそれをかくあるべきだと思っっているようだ。自信家な面を隠そうともしない。

他人の努力を無価値にしてしまう人間、シュウⅡシラカワ。彼に向けられている憎悪の半分は、彼が天から授かった才能の数々に対する嫉みでもあるに違いない。

いけれども、9歳のシュウを見ると、それは大きな考え違いであったのだと思わされる。

彼はそれと覺らせずに努力を重ねている人間なのだ。

未来の自分の知識に追い付く為に書を求め、未来の自分の剣技に追い付く為にマサキに師事を求める。これがどうして努力でないと云えただろう？ 9歳のシュウは求めるものに貪欲に、正しく努力を重ねることを知っているというのに！

まだ才能的に未熟な9歳のシウを前にして、ようやく彼の努力を知ったマサキは、だからこそ、そこに秘められている現在のシウの努力に目を向けずにいられなかった。

「僕はあまり他人に努力をしている姿を見せたくないのですよ、マサキ。だから未来の僕もきつとそうなのでしょう」

マサキの言葉に俯いたシウが、ややあつてそう言葉を吐く。その表情は窺い知れなかったが、愁いが秘められた口振りは未来の自分を案じているようにも捉えられた。「別に努力は恥ずかしいことじゃないだろ」

「地上人の血が流れているというだけで、僕を見下す人も多いですからね。彼らに馬鹿にされない為にも、僕は努力を知らぬ大公子でいなければならなかったのですよ」瞬間、打ち鳴らされる足。高く響いた靴音は、ままならない立場に対する彼の心境を表しているようだった。

「そういった意味で僕は僕の知能には感謝していますよ。彼らは僕に基礎的な能力ですら及ぶことがない。そう思えば、彼らの態度など気にもなりませんから」

最後の一段を上り終えた彼が、マサキを振り返る。清々しいまでの笑顔を浮かべている彼に、そうだった——と、マサキは呆れ返らずにいらなかった。

慇懃無礼な自信家——中身を幼くしようとも、シユウはシユウであるのだ。

「行きますよ、マサキ」

そう云つて、シユウが階段の向こう側に姿を消す。

急ぎマサキは階段を上がつた。最後の段を踏み越えた先に広がる展望台。吹き抜ける風が肌を煽る。マサキはシユウを探して辺りを見回した。展望台の柵の向こう側に見渡す限りの平原が続いている。

「これは絶景だ」

「この景色を見られただけでも足を運んだ甲斐はありましたね」

思ったよりも多くの人々が集っている展望台。広さは野球のグラウンドくらいか。恐らく、ここは地元民にとつての憩いの場でもあるのだろう。グループの垣根を超えて交わされる挨拶。そこかしこで井戸端会議が繰り広げられている。

マサキは視線を正面に戻した。中央に設えられている石造りのアーチには、黄金色

の鐘が吊るされている。

カーン……カーン……景色を眺め終えた観光客が鐘を撞く。カーン……カーン……その様子をマサキはシュウとともに見守った。カーン……カーン……澄んだ音色が、風に乗って、草原の遙か彼方まで響き渡っている。

マサキは続いてシュウが鐘を撞くのを見守った。

カーン……カーン……カーン……真つ直ぐに鐘を見上げながら、シュウが続けて撞木を振る。カーン……カーン……9歳のシュウの思いが込められた鐘の音。カーン……カーン……鐘を七回鳴らしたシュウが、アーチの下で祈りを捧げている。マサキは彼の足元に目を遣った。御影石で作られた台座には、ラングランの内乱が終結した年と「平和祈念」の文字が彫り込まれている。

どうぞとシュウに場所を譲られたマサキは鐘の前に立った。

何処までも続く平原を向こうに、鐘を打ち鳴らす。カーン……カーン……幾つ鳴らすか悩んだが、シュウに合わせて七つ鐘を撞くことにした。カーン……カーン……ラングランを吹き抜ける穏やかな風が、マサキの撞いた鐘の音を平原へと運んでゆく。

彼が何を思つて七度、鐘を撞いたのか。マサキには思い当たる節はなかったが、澄み渡る鐘の音はマサキに改めて自らが就いている立場の重みを自覚させた。

魔装機神操者。マサキの立場は祈るよりも行動で示すものだ。だからこそマサキは、暴力的なまでに圧倒的な力をどう正しく揮えばいいのかについて、多くの時間を割いて考えてきた。数多の力なき人民の命を預かつて戦争に赴く以上、判断を誤ってしまったでは済まされない。魔装機神の操者という立場は、心の中に正誤を量る天秤を持たねば務まらないのだ。

その意味を昔は軽く考えていたとマサキは思う。

カーン……カーン……未熟だった己を振り返りながら鐘を撞く。居場所のなかったマサキに新たな居場所を与えてくれた神聖ラングラン帝国。その自然は雄大だ。マサキは目の前に広がる絶景を目に焼き付けながら、幾度だって自分はこの世界を護つてみせる。決意を胸に刻みつつ、最後の鐘を撞いた。カーン……高く透き通る音が平原に残響する。

「さて、下りるか」

少し離れた場所で待っていたシュウの許へと向かったマサキは、最後にもう一度だけと平和の鐘を振り返った。先程までマサキが立っていた場所に、ひとりの少女が母親と思しき女性とともに立っている。

戦う力を持たない彼らは、この鐘をどういった思いで撞くのだろう。新たに鳴り響いた鐘の音を背に、マサキはシュウとともにその場を立ち去った。

「上りよりも下りの方がきついな。見ろよ、シュウ。この傾斜。階段であつていい角度じゃないだろ」

「階段の幅が狭いのが恐怖を煽ってますよね」

眼下を見下ろすだけに眩暈を覚える傾斜の鋭い階段を下り、七曲りの道に戻る。下り坂だけあつて歩くのは楽だ。ときたま、これから高台に向かう人々と擦れ違う。彼らはそんな鐘の音を響かせるのだろう。そんなことを考えながら街の中心部へと向かう。

「何で七回なんだ？」

「何の話です」

「鐘を撞いた回数の話さ」

その道すがら、マサキは七つの鐘の音の意味についてシュウに訊ねた。彼のことだ。意味もなくその回数を選んだ訳ではないだろう。

博覧強記と称されるに相応しい知識の持ち主は、地底と地上、どちらの世界の知識にも明るかった。無論、現在のシュウの記憶は9歳で止まってしまっていたが、王族に生まれ付いたが故に叩き込まれた——或いは身に付いた知識がある筈だ。それは平凡な家庭に生まれ付いたマサキとは比べるべくもない量であるに違いない。

「七という数字は『世界』を表すのですよ」

やはり彼は七という数字の持つ意味に願いを懸けていたのだ。さらりと理由を吐いたシュウに、その知識が初耳であったマサキは目を見開いた。

「そうなのか？ 初めて聞く話だ」

「世界が完成するのにかかった日数なのですよ。神は六日かけて世界を創り、一日を休みに充てました。御伽噺ですけれども。けれども御伽噺も侮れませぬ。そこから転じて、七は『世界』や『完全』を表す数字として崇められるようになったのですから」

「だから七つ、か」

世界平和と完全なる平和。シュウは七つの鐘の音に、ふたつの意味を込めたのだ。聡明で素直な9歳のシュウらしい祈り方に、だからこそマサキは首を傾げなくなった。現在のシュウであつたならば、祈るよりも行動ありきと、こういったモニユメントには目もくれないことだろう。

何より彼には他人に勝る力がある。

学術然り、魔術然り、剣術然り……彼が知力を結集して造り上げた愛機グランゾンにしてもそうであつたし、勝手に付いて来ていると口にしがちな仲間たちにしてもそうである。願いや望みを実現出来るだけの力を十全に有している彼は、過酷な人生を強靱な精神力で耐え抜いてきたからこそ、祈りが何の意味も果たさないことを知ってしまったている。

それが彼をして、徹底した現実主義者^{リアリススト}を貫かせているのだ。

そうした彼の性格的な傾向は、けれども今に始まったことでもない。

彼はマサキと出会った時点で、既にかんりの虚無主義者^{ニヒリススト}であつたし、強烈なまでの

皮肉屋でもあった。皮相的に世の中を眺め、斬新的に結論を導いてゆく。既存の価値観を正面から打ち砕いてゆく彼の熾烈な発言の数々に、マサキはどれだけ心を挫かれそうになったことか。

それは、彼がサーヴァーヴォルクルスの支配から解放されても変わることのない本質^{エッセンス}だった。

現在のシュウシラカワという人間の根幹を成す性質。陰性を強く打ち出しているそれは中性的な気質を有する9歳のシュウにはないものだ。と、なれば、彼が現在の性格を形成するに至った出来事は、9歳以降に起こったことになる。

堂々巡りだ――。

大通りへと戻ってきたマサキは、シュウとともに食材の買い出しを進めながら、幾度となく尽き当たる謎に頭を悩ませていた。

9歳のシュウ。ここからマサキと出会うまでのどの地点で彼にそれは起こったのだろう……明け透けに物を語りがちな彼の仲間が言葉を濁すということは、それ相応の出来事があつたに違いない。既に相当に過酷な人生を送っている彼に、襲いかかった

それ以上の奇禍。知ったからといってマサキに何が出来た筈もないのは明らかだったが、知った分だけあの鼻持ちならない男に寛容になれるような気もしている。

マサキは自分に対して不埒な振る舞いに及んだ男の内心を、もしかすると、より深く知りたいと思っているのかも知れなかった。

「結構な量になりましたね」

本の入った手提げ袋に食材が山と詰め込まれた紙袋。両手に荷物を抱えているシュウは、その量の多さに不安を感じているようだ。「消費しきれるでしょうか」目の前の現実が紛れもないものであることを確認するように、幾度も目を瞬かせながら云った。

「お前、俺の胃袋がどれだけ丈夫で、どれだけ底なしか知らないだろう」

肉に魚、そして野菜。バケツト類。三日ぐらいしか持たないとはいえ、三食を自炊で済ませるのだ。それなりに満足出来る食事を摂る為には、食材の種類が必要になる。マサキは自身が抱えている袋の中身を覗き込んだ。卵に牛乳、加工食品。必要な食材は全て買った。後は遅れることなくバスに乗り込むだけ——時計塔を見上げて時刻を

確認したマサキは、次の瞬間、恐れていた事態が起こってしまったことを覚った。

「シユウ、場所を変えるぞ」

大通りを行き交う人波の奥から、あからさまにこちらを警戒している複数の人物の気配がする。

マサキはシユウを促して街の外れへと向かった。出来る限り人が少ない場所を目指して歩を進めてゆく。心なしか隣を歩いているシユウの表情が強張っているように映る。安心しろ。マサキはシユウに声を掛けた。数えられる^{ブラーナ}気の数^{は九}。それなりに戦いの心得はありそうだが、マサキに及ぶほどの実力者ではない。とはいえ、数が増せばその限りではなく。

「増援を呼ばれると厄介だな」

着かず離れずの距離を付いて来る気配に、巻き込まれる市民がないことを願いながら、マサキはシユウを伴って街外れにある木立に入り込んだ。

「待ってください、マサキ。彼らは」

「お前の敵には違いない」

「ですが、彼らを相手にしてしまうと、あなたの立場がややこしいことに」

「俺を誰だと思ってるんだ。魔装機神サイバスターの操者だぞ。ほら、出て来いよ。相手にしてやらあ」

マサキは紙袋を片手に抱え直して、腰に下げた剣に手を掛けた。

背後を振り返り、挑発的に言葉を吐けば、ややあつて土を噛む靴音が響き渡る。その数、十二。木立の向こう側から姿を現わした兵士たちは、質の良い鎧と兜に身を包み、きちんと手入れされた鞆に収まった剣を腰に下げている。

恐らくは、この街の治安維持を務めている衛兵。シユウがややこしいことになると思いを上げたのは、だからだ。

しかし、だからといって、彼らにシユウを引き渡す訳にはいかない。それは彼の意思を尊重し、自由に行動させることとしたセニアの意思に反することだ。

とはいえ、如何にセニアが手を回して抑え込んでいるとはいえ、ラングラン正規軍の規模は世界でも類を見ないものだ。国土の広さに比例して膨れ上がった巨大組織。上層部はまだしも、末端に属する兵士ともなれば、そういった事情に通じていないの

も無理はない。

事情を知らぬ彼らをどう退かせたものか。マサキは劍の柄を握る手に力を込めながら、彼らの様子を窺った。

「魔装機神サイバスターが操者、マサキⅡアンドー様ですね」

彼らの先頭に立っている男が声を発した。

背後に立つ衛兵たちの何人かが劍を抜く。流石に衛兵クラスともなると構えに隙が少ない。「シユウ、後ろに」マサキはシユウを庇いながら彼らに向き直った。

「お待ちください。我々はあなたと争うつもりでここまで足を運んだではありませんせん」

この一団を率いているのは、どうやら先頭に立つこの男であるようだ。とはいえ、彼の言葉を受けても背後の衛兵たちが劍を収める気配はない。彼も彼らを無理に抑え込もうとは思ってはいないのだろう。淡々と言葉を紡ぐ。

「そんな戦いたがつてするような部下を率いておきながらか。笑わせるじゃねえか」
いつ飛び出してこないとも限らない戦意に満ちた部下を率いておきながらの言い草

に、ふん。と、マサキは鼻を鳴らした。

「云った通りです。我々はあなたと戦うつもりはありません。用があるのは背後の重罪人です」

「その重罪人とやらは俺の連れだ」マサキは剣を抜いた。「そうである以上、お前らが剣を向けている相手は俺になるんだがな」

戦いの金科玉条はその集団の中で強い立場の者、或いは実力者を先に潰すことにあ
る。マサキは固まって自分たちに向き合っている衛兵たちを見遣った。剣の構え方
から察するに、彼らの実力は団栗の背比べであるようだ。

ならば、初撃で先頭に立つ男を墜とすまで。

マサキは剣を抜くタイミングを見計らった。誰かひとりでも動けば、タイミングを
合わせてマサキも剣を抜いたものだが、流石に訓練を積んだ衛兵たちだけあって、闇
雲に突っ込んでくるような無様な戦い方はしないようだ。剣を構えたままその場を動
かぬ彼らに、面倒臭い奴らだ。マサキは心の中でこちた。

彼らが交戦を仕掛けてこないうちから剣を抜いてしまつては、反魔装機派の権力者

たちに余計な口実を与えかねない。その突き上げを食らうのは他でもないセニアだ。彼女の立場を守る為にも、マサキは動きどころを間違えられなかった。

今は我慢のしどころだ。自身にそう云い聞かせたマサキは、根気よくそのタイミン
グが訪れるのを待った。

「剣聖ランドールに敵うとは思っておりません。どうかお引き渡しを」

「わかつているなら退くんだな。お前らじゃ俺には勝てない」

「そういう訳には参りません！」凜と響く声が、次いで悲痛な叫びと化した。「その男はこの平穩なるラングランの大地に動乱を齎し、陛下のお命を奪った者にございます！ 国の柱を失った我々がどれだけの苦境に置かれたか、地上に赴かれたマサキ様はご存じないでしょう！」

「お前らこそわかってない！」マサキは声を荒らげた。

邪神教団とサーヴァーヴォルクルス。彼らはシユウを表に立たせることによって彼をスケープゴートとし、そしてラングランという強国に楔を打ち込んだ。その企みは絶大な効果を上げたようだった。それが証拠に、民や兵士たちは今もシユウの影に怯

え、疑心暗鬼に陥り続けている。

「全ては邪神教団の策略だ！ 追うべき相手を間違えるな！ また国が割れるぞ！」
「しかし——それでは、我々は」マサキの剣幕に気圧されたようだ。男が言葉を詰まらせる。

無為な戦いに時間を割きたくないのは、マサキも男も同様であるのだろう。迷いを見せた男に、ここぞとばかりにマサキは言葉を継いだ。サーヴァ・ヴォルクルスが人間の精神に潜める思念体であること……それを利用して邪神教団が暗躍を続けていたこと……地上にシユウを追った旅立ったマサキがそこで何を見たのか……マサキの話を聞いた彼らは言葉を失った。特にシユウの命が一度失われている事実には、彼らは少なからぬ衝撃を受けたようだ。

「ならば……我々は……どうすればいいのです」

力なく言葉を吐いた男に、マサキはもうひと押しと言葉を重ねた。

「俺がここに居ることが答えた。二度とは云わない。退け。手足を犠牲にする覚悟があるならかかって来い」

さやさやと木立が音を立てた。しんと静まり返った一団からは、先程ほどの戦意は感じられない。

「わかりました。今回は退くこととします」

静かに言葉を吐いた男に、乗り切った——マサキは内心で、安堵の息を吐いた。

「ですが、我々は納得をし切った訳ではありません。いずれまたその男がラングランを蹂躪するようなことがあれば、その時には……」

「好きにしろ。こいつが道を間違えたら、俺もこいつの敵になるだけだ」

その言葉が決定打となったようだ。剣を構えていた衛兵たちが腕を下ろす。次々と鞘に納められてゆく剣に、小さく頷いた男が退却を命じる。来た時と同じく土を噛むようにして去っていった彼らに、マサキは剣から手を離し、黙って成り行きを見守るだけだったシュウを振り返った。

虚空を凝視^{みつ}める瞳。心非ずな表情が痛々しい。

シュウ。と、マサキはシュウに声をかけた。はつとなった様子で、マサキに視線を合わせた彼が、僕は……と、喉の奥から絞り出すように言葉を吐いた。

「僕は確かに叔父を好ましくは感じていませんでした」

「シュウ。お前、何を」

「叔父は僕を立場で押え付けるような人でもありません。僕はそれが嫌だった。でも、だからって、死んで欲しいなどとは思ったことはなかった！」

目にしてしまった現実をどう処理すればいいのかわからないのだ。子どものように首を振る彼に、マサキはその胸中を慮った。センシティブ繊細な彼にとって、この過酷な現実はまだ受け入れ難いものであるようだ。

当たり前だ。記憶と現実の乖離など、マサキであろうと受け入れられる筈がない。

だからといって、このままの状態が続いてしまうようでは、連れて帰れるものも帰れなくなってしまう。バスの時間が近いのだ。彼の無事を保証できる場所は、今のところあの地下施設しかない。マサキはシュウを落ち着かせる為に声をかけた。

「大丈夫だ。誰もお前が心から望んでやったことだとは思ってない。だから、落ち着け」

「だったら僕は何故こんなことをしでかしたんです！」

「それがサーヴァーオールクルスの力なんだ」マサキはシュウの背中に手を置いた。
「そういう存在なんだ」

シュウが教団を殲滅させようと決意したのは、彼の中にあるこうしたままならない感情を昇華させる為でもあるのだろう。

マサキは過去のシュウの反応を見ることで、現在のシュウの感情が理解出来るような気になった。自身の感情に対して寡黙を貫き通す男は、こうして様々な感情を胸の奥に押し込んだ上で、長く果てのない戦いに身を投じる決心をしたのに違いなかった。罪を罪として受け入れた男は、罰として自らに戦いを科したのだ。

巖のように信念を貫くあの男のことだ。それがどれだけ苦難の道であろうとも、達成するまで退きはしまい。とはいえ、五百万人に及ぶ巨大組織が相手だ。恐らく、生涯に渡って彼の戦いは続くことになるだろう。

その道がマサキたちと交わることがあるのかは、マサキにはわからない。

けれども、マサキの中にあつた蟠りは、彼を考え続ける内に解けていつているようだ。以前ほど感じなくなった彼への抵抗感に、いいことなんだか——マサキはどこか

物寂しい想いを抱えながら、シユウの背中を摩った。

「そういう存在……なの、ですね……邪神というものは……」

許し難い……と、続けて呟いたシユウが俯いて口唇を噛む。

肩を震わせて黙り込んだ彼は、涙を堪えているようでもあったし、怒りを抑えているようでもあった。

それでいい。マサキはシユウの背中に置いてある手に力を加えた。そして彼の身体をそうっと押し出した。

「行こう。バスの時間に遅れる」

シユウ自身に罪の清算は求めない。

シユウが邪神教団と対立する意思をみせたその瞬間に、マサキはそう決意をした。彼を赦す。今際の際にゼオルートが云った言葉の意味を正しく理解出来ているか、マサキには今もわからないままだったが、恐らく憎んだり恨んだりしてはならないというのはこういったことでもあるのだ。

もし、仮にサーヴァーヴオルクルスが人の心の弱さに付け込むような存在であつた

としても、シユウは既に充分過ぎるほどの罰を受けている。自身の理想と現実の乖離にしてもそうだったし、失われた立場や地位にしてもそうだった。

ならばもう彼に求めることは何もない。

後はただ、彼が再び道を違えるようなことがないか、見守つてゆくだけだ。

バス停に辿り着き、待つこと五分ほど。ガタゴトと揺れの激しいバスに乗り、宿場町まで。夕暮れを迎えて賑やかさを増した町に背を向け、暖かいそよ風が肩を撫でる平原を抜ける。うつそうと木立が繁る森、洞窟の中に隠されている非常用出口に身体を潜り込ませる頃には、辺りは暗くなり始めていた。

その長い道のりの間、シユウはひと言も言葉を発しなかった。

地下に向かう長い階段を下つてゆく間も、沈黙を貫く。ただマサキを背後に従えて歩くばかりとなったシユウに、かける言葉をもう持たないマサキは付いて行くしかない。病的な方向音痴の割には、順調な帰路。よくはぐれずに済んだとマサキ自身思ったが、それはそれだけマサキがシユウを気に掛けていたからでもあるのだろう。

すらりとした長軀。群衆の中で頭ひとつ抜け出る彼の恵まれた体軀は、今は風が吹

けば塵となつて消えてしまいそうなまでに儚かった。足取りは決して頼りなくはなかったが、その背中はひと回り小さくなつたように感じられる。沈黙は雄弁なりとは良く云つたものだ。シユウは黙ることで、自身が受けた衝撃の度合いを語り尽くしていた。「マサキ」

ようやくシユウが口を開いたのは、居住地区に戻り、彼の部屋の冷蔵庫に食材を収め終えてからだつた。さんざ涙を流した後のような掠れた声でマサキの名を呼んだ彼は、その醜態を取り繕うように声を張つて言葉を継いだ。

「僕は強くなりたい。未来の僕を超えられるぐらいに強く」

ああ。と、頷いたマサキは、その瞬間に、彼が何を考えながらここまで歩いてきたのかを理解した。

——彼は怒り続けていたのだ。サーヴァーヴォルクルスという存在に。

彼が何を考えているのか。マサキは道中でその胸中を様々に推測した。神経質な面が目立つ少年は、潔癖にも未だに自身が犯した罪について考えているのではないだろうか？ 若しくは、邪神に精神を乗っ取られることとなつた己の弱さを責めているの

ではないか？ いや、もしかすると彼は、喪われた命の数々を自らの疚しさが奪ったものと考えているかも知れない……

けれどもそれは間違いだったのだろう。

マサキが知るシュウシラカワという男は、常に未来を見据えて生きている。

ただ前に、ひたすらに前に。例えその原動力が、自身の運命を捻じ曲げられたことに對する怒りであろうとも、人生を諦めることなく生き続けようとする彼の姿勢は立派なものだ。凡百の人間が挫けてしまうだろう理不尽な奇禍に遭っても、折れることのない強靱な精神力。彼の人間性に問題がないとはマサキは云わないが、それだけは手放しで褒め称えていいと思っている。

9歳のシュウは、その境地に辿り着いたのだ。

記憶の中で自らに傳っていた兵士たちが、自身を「その男」と憚ることなく呼ぶ。彼にとって、それは耳にしていた現実が形を取って現れた瞬間だった。

王家の一員として研鑽を怠らずにいた彼からすれば、彼らの自身に對する扱いは屈辱以外の何物でもない。けれども、そうした境遇に彼を墮としたのは、他でもないサ―

ヴァーヴオルクルス。ようやくその事実を受け入れたシユウは、退き絞った口唇に覚悟を乗せながらマサキを振り返った。

「だから、マサキ。明日は僕に思う存分稽古を付けてはくれませんか。僕は未来の僕がしていたように戦いたい。例え記憶が戻ることがなくとも」

「わかった」マサキはシユウの肩を叩いた。「明日は覚悟するんだな」
はい。と頷いたシユウが笑った。「流石にお腹が空きました」

眼差しの鋭さも手伝って冷ややかに映る顔立ちだったが、何故だろう。9歳のシユウが笑うと、その顔は途端に人懐っこさを増す。何とはなしに面倒を見たくなる雰囲気。そう考えると、現在のシユウは実に勿体ないことをしているとマサキは思う。

「お前、そういった表情も出来るんだな」

「そういった表情、ですか？」

「人懐こい顔だよ。屈託なく笑えるんだな、って思ってたさ」

9歳のシユウの心安らかなる笑顔は、彼のこれから先の人生に待ち受ける苦難を微塵も感じさせないものだ。

だからマサキは不思議だった。

教団と自身の関係を受け入れた彼がこれだけの笑顔を見せられるのであれば、現在のシウウの常に鬱屈を抱えているような態度はどこを由来としているものであるのか。テリウスが、サフィーネが、モニカが口を濁した彼の過去。それはそんなにも彼の性格を一度に塗り替えてしまうようなものであったのか。マサキはそれを知りたいと思う半面、このまま知らぬままでもいいと思う。

その方が、シウウも自分も幸せでいられるのではないか。

マサキはシウウシラカワというブラックボックスを開けることで出てくるものが怖いのだ。自分の双肩にかかっているラ・ギアスの未来。それはマサキに数多の人民の命を背負わせていた。そこに果たしてあの男を加えることが出来るのか。それは無理だとマサキは首を振った。

あれだけの力を有している彼が、解決出来ずにいる過去の因縁。それを背負う為には、何かを引き換えにしなければならない。

「未来の僕はあまり穏やかな表情はしていなかったようですね。眉間に皺が出来てい

るのを見るとつくづくそう思いますよ」

縦に寄った皺を確認するように眉間に指を這わせたシユウに、そりゃあ、わかるよな。マサキはありありと刻まれている彼の眉間の皺に目をやった。

「いや、まあ。笑うは笑うんだがな……何ていうか、その、目が笑ってないってうかな」

「ああ。わかりますよ、マサキ」シユウはそこで何を思ったか、そうつと目を伏せた。
「僕の父がするような笑顔ですね」

どうやら現在のシユウが見せる陰気にも映る表情の数々は、彼の父親から譲り受けたものであるらしい。成程、そう云われると、アルザールの豪放磊落な表情とは確かに系統が違っている。血筋とは表情にも出るものなのか。マサキは今になって解けた謎のひとつに素直に感心したが、王室に思い含むところがあるシユウ自身はそれを快く感じていないらしい。

「何が食いたい？　って云つても、俺に作れるものには限りがあるがな」
マサキは話を逸らした。

そうでなくとも強い衝撃を受けたばかりだ。これ以上の衝撃は避けなければならぬ。
い。

ひとつひとは小さな雨だれであっても、寄り集まれば洪水となる。その結果、ダムが決壊するようなことになつては取り返しがつかなくなる。9歳のシユウは神経質で繊細な性質であるのだ。傷を広げるような真似はしない方が賢明だ。

「昨日が肉料理でしたから、今日は魚が食べたくもあります。朝もベーコンでしたしね」

「魚料理ねえ。煮るか、焼くか、蒸すか……」

そう望まれたからといって魚を焼いてはい終わり、という訳にもいかない。慎重しやかな性格である9歳のシユウはメニューが簡素であろうが文句を云わないだろうが、マサキはまだまだ育ちざかりである。その程度で腹がくちるとは思えなかった。

食材はたっぷりある。マサキの料理の腕はたかが知れる程度であつたが、レシピを見ずとも作れるレパートリーからであれば作れないものはなさそうだ。

——傷みやすい葉物はサラダにして早めに消化するとして、後はスープに使うか……

頭の中でメニューを組み立てたマサキは、早速と食材を収めたばかりの冷蔵庫を開いた。

鮭にバター、ウィンナー。玉葱に人参、じゃがいも。そしてレタスと胡瓜。冷蔵庫から必要な食材を取り出したマサキは、それらを並べたキッチンカウンターの前に立った。どの工程をシユウに手伝わせよう。レシピを頭の中で確認したマサキはシユウに食材を手渡した。

「手伝ってくれるんだよな？」

「勿論です」

弾む声。自立に必要な技能を身に付くのが、楽しくて仕方がないようだ。意気揚々とマサキの隣に立ったシユウに、呆れ半分。苦笑を浮かべたマサキは、こういった時間間も悪くないもんだな。そう言葉にして、自身もまた食材を手を取った——……。

けれども、シユウの口から思いがけず飛び出した父親の存在を匂わせる台詞は、マサキに彼にも家族がいるのだという当たり前の事実を強く意識させた。現在の彼との会話で話題に上ることのなかったシユウの家族。彼らは現在、何処でどうしているの

だろう。

艱難辛苦の道を往く、彼をひとり放置しておくような両親でもあるまい。

もしかすると、とうにこの世を去っている可能性もある。

9歳のシユウに幾つかの料理の下準備を任せたマサキは、シユウについて様々に思いを巡らせながら食事の支度を進めていった。

謎多きシユウシラカワという男。彼の事情を知れば、少しは彼の内面を理解出来るようになるだろうか？ マサキはこれまで寄せたこともなかった類の関心をシユウに寄せていることに、この時点ではまだ気付いていなかった。

※ ※ ※

朝食から夕食の時間まで、延々行動をとみにしたからだろう。購入した本の数々をテーブルに積んだシユウは、この後の時間を読書に費やすつもりらしく、マサキに部屋からの退出を求めてきた。

この閉じた世界の方が、外界よりも安全なのはわかつている。自分に与えられた部屋へと戻ったマサキは、自身のトレードマークであるジャケットを脱いで壁に掛けた。シウのボディガードという役割を忘れた訳ではなかったが、朝から動き回ったこともあって疲れていた。与えられた自由時間を身体を休める為に使おうと早速バスルームに向かう。

しんと静まり返った部屋は、マサキがひとりだという現実をまざまざと突き付けてくる。

いざとなれば頼れる仲間も多い場所にいる自身の二匹の使い魔はさておき、意識を失ったままだというチカが心配だ。口喧しい使い魔はかなりお調子者ではあったが、あれで中々良心的でもある。一度くらいは様子を見ておきたくもあったが、その為にシウに案内を頼むのも躊躇われる。

彼にも、そしてマサキにも、ひとりになれる時間が必要だった。

今日はもう部屋を出ることはないだろう。脱衣所に入ったマサキは、乱雑に脱ぎ捨てた服を纏めて洗濯機に放り込んだ。

スイッチひとつで自動的にコースを選択し、乾燥まで済ませてくれるタイプの洗濯機。後から運び込んだ電化製品であるのだろう。回り始めた洗濯機に、今日が終わったような気分になる。浴室へと足を踏み入れたマサキはシャワーのコックを捻った。どこかで水温管理をしているのか。すぐさまシャワーヘッドから、丁度いい温度の湯が噴き出してくる。

むつとするような熱気と蒸気の中、シャワーを頭から浴びにかかったマサキは、全身に漲っていた緊張感が解けてゆくのを感じていた。

鮭のバター焼きとサラダ。そしてウインナーと野菜を使ったコンソメスープ。朝に引き続いてシユウに包丁を使わせてみたマサキは、やはり器用な性質であるらしい彼の手捌きに感心した。

勿論、例えシユウであっても、料理までは一朝一夕にはいかない。偶には危なっかしい場面もある。それでも綺麗に刻めた野菜に欲が出てきたようだ。明日は火を使いたいとマサキにねだってきたシユウに、マサキは鮭を焼くところを見せることにした。

バターを焦がさないように、そして鮭の切り身に満遍なく火が通るように、火の加減を調節しながら焼いてゆく。生真面目な性質であるからか。マサキの隣に立った彼は、食い入るようにフライパンの中に目を向けていた。

明日はベーコンを焼いてもらうからな。そう彼に告げると、任されるのが嬉しくて堪らなかつたようだ。はい。と弾む声で返事をしてきた彼は、足取りも軽やかに食卓に着いた。姿が姿なだけにマサキとしては調子が狂うが、ここまで無邪気に懷かれれば悪い気もしない。

料理に剣技、どちらも一通りこなせるようにしてやらないとな。マサキは頭と身体を洗いながら、ぼんやりと考えた。

食事の最中の会話は今日行つた街での出来事についてが殆どだった。

マサキにとつてはありきたりな街の光景も、彼にとつては物珍しいものであつたのだろう。何処の店の前でこういった人がこんなことをしていた……大通りにいた人々の様子を実に事細かに記憶していたシユウは、それらの光景をどれだけ話しても、話しても、話し足りない様子だった。

もしまた街に行くことがあつたら、今度は時計塔を見に行きませんか。シュウの誘いにマサキは勿論だと深く頷いた。

彼が大道芸を見たことがあるのかマサキは知らなかったが、わざわざ誘ってくるぐらいである。彼が大道芸に興味を持っているのは明らかだった。

買い物ついでに街を歩いただけでも、様々な発見に喜びを露わにしてくれる彼のことだ。もし見たことがなかったとしたら！ マサキは込み上げてくる可笑しさに口元を緩ませた。今から彼が興奮するさまが瞼の裏に浮かぶ。

それはきつと彼にとつて忘れられない思い出となるだろう。

王室という世界から外の世界に押し出された9歳の少年は、そういった意味では現在の生活を存分に楽しんでいようでもある。

未知なる世界を識ることに貪欲な9歳のシュウ。王宮という窮屈な世界で生きた記憶しか持たない彼にとつて、外の世界とは夢が形をとつて現れた場所でもある。何を見るも、何処に行くも、自分の自由。ならば、現在のシュウはどうだ？

世界を冷めた目で眺めている男からは、9歳のシュウのような瑞々しさは感じられ

ない。もしかするとそれは外の世界に馴染んだ時間の違いであるかも知れなかった。傍目には自由を手に入れたかのように見えても、内面などわからぬものだ。教団と戦う決意をした彼は、そういった意味では大きな使命に縛られているともいえる。

——お前にとって自由とは何だ？

シユウが記憶を取り戻したら訊いてみたくもあるが、何故だろう。彼はきつと酷く気分を害するだろう。そんな気がした。

埃に汗。身体に溜まった汚れを洗い流したマサキは浴室から出た。湯船に湯を張って思いきり浸かりたい気分もあったが、遠出で神経を使ったからか。面倒が勝った。まだ回っている洗濯機を横目に軽く身体を拭いたマサキは、バスローブを纏って脱衣所を後にする。

下着は履かなかった。

普段、下着一枚で寝ているマサキにとっては、むしろバスローブの方が重苦しく感じられるぐらいだ。マサキは素肌にバスローブ一枚の姿でソファに収まった。いつそ裸でうろいても良かったが、いつシユウからの呼び出しがないとも限らない。最小

限、見られる格好でいなければ。

テレビを点けると、ゴールデンタイムに相応しいファミリー向けのバラエティ番組が映し出された。何とはなしに手持無沙汰に感じる。「何か飲むかな」マサキはひとり呟いて、冷蔵庫に向かった。

二匹の使い魔がいるのが当たり前となったマサキの人生。彼らがいない生活を送るのは、まだシュテドニアスとの戦争の後処理に追われていた頃——記憶を失った時以来だ。

冷蔵庫の中から牛乳を取り出したマサキは、棚にあったインスタントコーヒーを使ってカフェオレを作った。お前らも飲むか。そう言葉をかける相手は今はいない。やけにひとりが堪える。そう感じた刹那、マサキはその事実に気付いてしまった。

あの時にはシュウがいた。

記憶を失くしたマサキを保護した彼が、マサキの様子を窺っていたのは間違いない。でなければ、どうしてああも素早くマサキを救助出来たものか。そう、彼はマサキとシュテドニアス残軍との戦いを見守っていた……

それは決して、彼がマサキに執着しているから——などといった感情的に矮小化された理由からではない。何故ならシュウはこう云ったではないか。マサキの自慰を目の当たりにしたあの時に、マサキの肌をその手で辿りながら。

——私はあなたを連れてゆく。私が見ているこの世界、その高みへと。あなたにしか成せないこと、それをあなたに成してもらう為に。

マサキは深く溜息を吐いた。

何気なく脳裏に蘇ってきた彼との日々、9歳のシュウと現在のシュウの差異が明確になる。

天真爛漫。9歳のシュウは、マサキからすれば眩いくらいの純真さに包まれていた。どこまでも素直で、どこまでも無垢。彼に現在のシュウのような皮肉を吐くのは難しいことだろう。

——彼となら、また違った関係を築ける気がする。

マサキはカップを手にソファに戻った。牛乳をふんだんに使ったマサキ特製のカフェオレは、市場に出回っているものよりも遥かに色が白いのが特徴だった。

たつぷりの牛乳にほんのひと差しのコーヒー。賑やかなテレビを眺めながらそれをひと口啜る。甘い。砂糖を使っていないにも感じる甘味は、牛乳の風味だ。コクのあまるまろやかな味わいは、冷蔵庫にあった牛乳がそれだけ質のいいものであるからに違いなかった。

——それではここで、ニュースをお送りします。ラングラン城下町では、来るべき精霊祭に向けて、年に一度の全州司祭連合議会が開催されています……

なべて世はこともなし。平和を告げるニュースの数々にマサキは宙を仰いだ。場所が場所だからか。気を抜くとシユウのことばかり考えている。

——それもこれもあの男が迂闊に記憶を失くしやがったからだ。

マサキはどうすればいいのかわからないのだ。

決着の付くことのなかった関係。中途半端に放り出されてしまったマサキはゆくも戻るも出来ぬ道の上にいる。

だからといって、それが恋愛感情になのかと尋ねられれば違うと答えるしかない。肉欲。そう、単純な欲にマサキは負けたのだ。それも二度も。マサキは空虚な内容

を映し出しているテレビを眺めながら、頭の中でシユウのことを考え続けた。あの男が与えてくれる温もりは、マサキが胸に抱えている空白を埋めてくれる。それだけではない。平穏な日常に馴れ合えないマサキの焦燥感を鎮めてくれる……。

冗談じゃねえ。マサキはひとりごちてカフエオレを煽った。

彼を憎む気持ちはとうになくなっていたけれども、彼に抱えている蟠りまで消えたりはしないのだ。何を考えているのか掴めない男。掴んだと思った先から零れていく砂のような記憶は、彼の言葉があまりにも哲学的であるからだ。

もっと明瞭りと物を云いやがれ。マサキは幾度彼にそう思ったことだろう。

彼の言葉に反射的に反発してしまうマサキは、もしかすると、彼に対する素直さを失ってしまったのかも知れなかった。彼が相手というだけで、何を云われても癪に障って仕方がない。だからマサキは、シユウが何を自分に求めているのかさえも知らないのだ。

「ホント、よくよく記憶を失ってくれやがる……」

憎々しくて仕方がないけれども、それはかつての憎しみとは質の異なる感情だ。そ

れは、気心知れた相手に対する諦観の念のような……それでいて、受け入れられるだけの余地があると感じているような……胸を締め付けられるような痛みを覚えたマサキは、ままならない自らの胸の内に舌打ちせずにはいらなかった。

——俺がこんなんじや、あいつは記憶を取り戻さない方がいいだろ。

ぽつと湧いて出た考えだった。動揺したマサキは、その思考を反射的に意識の外に押し出していった。

9歳のシユウ。幸福に包まれて生きてきた彼の素直さに、マサキは絆されてしまっている。きつと、彼はこのままでいた方が幸福であるに違いない。マサキが思ってしまったのは、だからだった。

行き詰った現在のシユウとの関係は、マサキにそれだけ閉塞感を感じさせていた。彼を求めて自慰に耽っておきながら、平然と彼の前に立ててしまう。自らの行いを振り返ったマサキは、醜いにも限度がある——自分自身に対しても舌打ちせずにはいなかった。

いつそ過ちをなかったことにしてしまえたら……そうすれば、まっさらな気持ちで

彼と向き合える。そう、マサキは遣り直したかったのだ。悲しい過去を乗り越えて、新たな人生を歩み始めたあの男と。けれどもそれは、現在のシユウが辿ってきた道を否定することだ。

「あいつの記憶が戻ったら、俺はどうするんだろうな」

誰にともなく呟いたマサキは、返ってくることはない言葉を待った。

身動きすることなく、ひとり。華々しい世界を映し出しているテレビ画面と向き合
い続けながら。

第三章 密やかに

街に出た疲れからだろう。その夜のマサキは何もせずに深い眠りに就いた。

目覚ましが鳴るよりも先に目が覚めた朝。マサキは身支度を済ませてシユウの部屋に向かったが、呼びかけてみても反応がない。夜更けまで読書に専念していたのだろうか？ 几帳面な彼の異変を訝しくも感じたが、彼の許可と操作がなければ部屋には入れない。

食材は全て彼の部屋の中にある冷蔵庫の中だ。

朝食の準備に手を付けることも出来ないマサキは、自分の部屋に戻るしかない。仕方なしにシユウの部屋の前から立ち去る。

「ああ、もう起きていたのですね。マサキ」

瞬間、かけられた声。振り返ると、居住区の手前側の通路からシユウが姿を現わしたところだった。

彼の話を聞くに、どうやら格納庫で剣の訓練をしていたらしい。「あなたとの稽古の前に振り慣れておこうと思ひまして」いつから——とはマサキは聞かなかったが、汗で額に髪が張り付いている辺り、かなりの時間を訓練に割いたようだ。

「どうだった、ショートソードは」

「使い慣れた長さだからか、手に馴染む感じがします。後はこの身体に慣れるだけです」

長さが変わったことで、これまでの体感で剣を振れるようになったようだ。その安心感が彼に自信を取り戻させたようだ。「今日は一昨日のように無様な姿は見せません」そう云い切ったシュウに、マサキはただ微笑み返した。

不慣れた長さの剣を扱っているというハンディキャップは解消されたが、手足の長さというハンディキャップは解消されていない。朝の訓練で彼がどれだけの手応えを得たのかはさておき、思うように剣技を扱えるようになるにはまだ時間がかかることだろう。

「今日は火を使わせてくれるんですね？」

「ああ。そこまで準備はしておくから、気兼ねなく浴びて来い」

シャワーを浴びたいと浴室に入ったシユウを尻目に、マサキは朝食の準備を始めた。火を使わせると云った以上、焼き物は必要不可欠だ。どういったメニューにするか悩んだが、マサキの朝食のレパートリーなどたかが知れている。シユウにはソーセージと卵を焼かせることにして、マサキはサラダとスープを作ることにした。

キャベツとベーコンのコンソメスープ。ホールコーンを散らしたサラダ。出来上がった料理をテーブルに置いてまな板と包丁を洗っていると、シャワーを終えたシユウが濡れた髪のままキッチンに入ってきた。

「髪ぐらい乾かせ。風邪引くぞ」

「暑くて敵わないんです。汗が引いたら乾かします」

口では何だと云っているが、火を使うのを楽しみにしているのは間違いない。仕方なしにマサキは卵とボウルをシユウに手渡した。

いきなり目玉焼きではハードルが高いだろうと、スクランブルエッグに挑戦させる。卵を割るのには慣れていないようだ。ひとつ目の卵を潰してしまったシユウに、「最

初は誰でもそうだ」マサキは声をかけてやりながら、続けてふたつの卵をシュウに割らせた。

やはり器用な性質であるらしい。ひとつ目の失敗で力の加減を覚えたシュウが、今度は綺麗に卵を割ってみせる。

マサキは彼が割った卵が入っているボウルの中を覗き込んだ。小さい殻が入ってしまったり、黄身が潰れてしまったりと細かいミスはあるが、ふたつともきちんと使える状態に割れている。

「上手いもんだな。俺はこう割れるようになるまで三日はかかったぞ」

「本当ですか？」シュウもまたボウルを覗き込んでくる。「上手く出来ているようなら良かった。料理をする人の苦勞を知るのは大事ですね。食事の有難みが増します」
徐々に出てくるようになっていくのが面白いのだろう。料理をするのが楽しくて仕方がない様子のシュウに、今日の目標でもあるコンロへの点火を任せる。その間に卵を掻き混ぜたマサキは、火を点けたはいいものの、火加減をどうすればいいかわからずにいるシュウにフライパンを持たせた。

火の調節はマサキがした。

そこからシユウの傍について、手取り足取り教えてやりながらスクランブルエッグを焼かせる。少し火が通り過ぎてしまった感はあるが、初めてなら上出来だ。ところどころ狐色に焼けているスクランブルエッグ。器に盛らせるところまでシユウにやらせたマサキは、続けてウインナーを焼かせた。

流石にスクランブルエッグの後とあつては手慣れたもの。上手い具合に焼き目の付いたソーセージを同じく皿に盛らせたマサキは、いい加減髪を乾かさなければと彼を脱衣所に追いやった。

火を覚えて満足したのだろう。今度のシユウは御託を並べることもなく、素直に髪を乾かしにゆく。

手持無沙汰な時間。残されたマサキは何をするか悩んだが、どうせさしたる時間でもないと先にテーブルに着いて彼の戻りを待つ。

あつという間に三日目を迎えてしまった。

記憶が戻る気配のないシユウに、この生活を続けることに意味があるのだろうか――

と、思ひかけるも、彼にひとりで生きていけるだけの技術を授けてやるのも自分の務め。マサキはそう思い直した。

料理を教えるぐらいであればサファイネたちでも事足りるが、彼を付け狙う輩を向こうに回せるだけの剣技を教え込むとなると、流石にマサキぐらいの腕がないことは話にならない。この機会だ。使えるぐらいには仕込んでやろう。マサキは決意を新たにした。

「すみません、遅くなつて。身支度を自分ひとりで整えるのにはまだ慣れなくて」

癖のある髪を見られるように整えるのに時間がかかったようだ。二十分ほど経つてから戻ってきたシュウが席に着く。

「今日は何をするつもりなんだ」

「本も大分読み進めましたし、剣の稽古ですね」

朝食を取りながら話をしたところ、彼は今日一日をマサキとの剣技の稽古に費やすつもりであるらしかった。あなたと居れる時間には限りがありますからね。そう云つて、自分で作ったスクランブルエッグを口に含んだシュウは、味はまあまあですね。

そう云って嬉しそうに笑った。

「そうは云つても体力的な問題もあるぞ。今日は程々にしておいた方がいいんじゃないか」

「トレーニングは毎日欠かさずしています」9歳だけあって、体力面には自信があるのだろう。シユウはマサキの言葉に退く気配も見せず、「グランゾンにも乗れるようにならないとなりません。その為には実践的な稽古をするべきでしょう」

確かに剣の長さが使い慣れたものに変わったという現実、シユウにそれまでの自信を蘇らせたかもしれないが、彼はまだ成長きつた自分の身体に慣れてはいない。身支度にさえ時間がかかるという現実。そう考えると、マサキが直接的に彼の稽古の相手をするのは、彼が距離感を掴んでからにした方がいいだろう。

「まあ、反射神経を養うには実践が一番ではあるがな……」

言葉を濁したマサキに、その思惑を読み取ったようだ。シユウが真つ直ぐな眼差しを注いでくる。

「僕はゆつくりしている暇はないのですよ、マサキ。あの忌々しい邪神教団を殲滅さ

せなければなりません、その為には身に付けなければならない技術が幾つもあります。剣術、魔術、操縦術、学術……僕は先ず、未来の僕に追い付かなければ」

シユウの言葉にマサキは頷くしかなかった。

付かず離れずの距離を保ってきたふたりの進む道は稀に交わることはあれど、基本的には離れた二本の道だ。魔装機神操者。その立場は、いずれまた、マサキを戦場へと狩り出してゆくことだろう。そうである以上、マサキがシユウを守ってやれる時間には限りがある。

「荒療治しか、ないか」

せめて剣術だけでも形にしてやりたいと思ったが、そうした生温い考えは捨てた方が良さそうだ。マサキは覚悟を決める時間を稼ぐようにゆっくりと朝食を片付けた。最終的な目標はグランゾンに乗れるようになること。シユウの願いを叶えてやるには、ありきたりな訓練では意味がない。マサキは脳内で彼にどう稽古を付けるか、そのプログラムを組み立てていった。

※ ※ ※

「美味しかったです。やはり、自分で作った料理は違いますね。満足感が桁違いです」
ゆつくりと食事を片付けてゆくシウと同じくらいのスピードで朝食を食べ終えた
マサキは、彼とともに後片付けを済ませ、胃を休める為に一時間ほどの自由時間を取
ることにした。

シウは直ぐにでも稽古に入りたい様子だったが、幾ら荒療治を施すとはいえ、守
らなければならぬことはきちんと守らせなければ。

稽古の効率を上げるも下げるもコンディション次第。

食べたものを吐き出させるなど論外だ。マサキがそう説いて聞かせると、それ自体
は納得がいつているようだ。

「わかつているのですが、気が逸ってしまつて」

落ち着かない様子の彼にそれならば——と、マサキはシウに施設の案内をさせる
ことにした。

詳細不明の巨大地下施設。現在のシユウたちの戦力レベルを知る意味でも、その設備のほどを知っておくのは重要だ。

「いざという時の脱出経路も知っておかなきゃな。お前を護る為には、この施設の構造を知っておく必要があるだろ」

「そういった大事が起こらないのが一番ではありますけれど」

「昨日は衛兵で済んだが、邪神教団の連中が相手じゃな。いつここまで攻め込まれるかわかったもんじゃない」

余計なことを口にしくとも、彼はマサキの本心を見抜いていそうではあったが、だからといって明け透けに目的を口にするほどマサキも向こう見ずではない。

余計な静いの種を蒔くほどマサキは愚かではないのだ。

「ところで、何処を見ますか？ 一時間ぐらいとなると行ける場所は限られますが」「チカは何処にいるんだ？ あいつの様子も見ておきたいんだが」

「それなら研究プラントに行きましょう。ここからそう遠くない区画にあります」「研究プラントに？」マサキは歩き出したシユウを追った。

「魔法生物ですからそう簡単に衰弱することはないとは思いますが、万が一ということもありますので」

居住区の奥にある扉から、まだ歩いたことのない通路に出る。この施設には至る所にセンサーが設置されているようだ。自動で点いた明かりが、緩くカーブを描いている通路を点々と照らし出している。

「この通路は研究プラントの外周に沿っています。十分ほど歩けば入口に着きますよ」壁面に埋め込まれた発光ダイオード。様々な色を放つ光点が、格納庫からの道のりにあったのと同じ模様を浮かび上がらせている。それはある種の結界のようにもマサキの目には映った。

科学時代に作られた地下建造物にしては、前時代的。それはラ・ギアスの歴史が魔術時代を経ていることと無関係ではないのだろう。

「特徴的な模様だ。これに意味はあるのか？」

「魔術的な意味で云うのであれば、多少は。簡易的な結界用の呪文です」

成程。マサキは頷いて更に先を行った。通路は思ったより長く続いている。

「随分大きな研究プラントだな。これだけ歩いて、まだ入口が見えてこない」

「元は訓練場ですしね。師団が訓練を行えるぐらいの広さはあると思います」

人が四人は擦れ違えそうな広々とした通路ではあったが、外の景色が映し出されることがないからか。四方八方から壁が迫ってくるような閉塞感がある。そこに響き渡るシウウの靴音。どうやら彼は、それなりにこの施設の探索を済ませているようだ。

「この訓練場を挟んだ向こう側に、かなり手狭な部屋を擁する別の居住区があります。大半は土砂に吞まれてしまっています」

「土砂か。それも破壊された跡か？」

「僕は非常用の脱出口を潰した跡ではないかと思っていますが」

「確かな。非常口を潰して出入り出来る場所を限れば、後はそこで迎え撃つだけで済む」

カタパルトが無傷で残されているのは、非常用の出口を限ることで、ここにいる兵士たちに出撃を余儀なくさせるという意図もあったのだろう。出てきたところを、待ち構えていた部隊で殲滅する。この要塞のような地下施設を潰すのに、先人は最小手

順での攻略を目論んだのだ。

地獄への片道切符だな。マサキは呟いた。

「趣味のいい遣り方ではありませんね。とはいえ僕が彼らの立場になったら、同じような手を使うに違いないでしょうが」

「そりやそうだろう。最小手で最大の効果を得るのは戦術の基本だ」

ややあつて左手側に見るからに頑丈そうな扉が現れた。比較的素材が新しく映るのは、現在のシユウが扉そのものを換装したからだ。何せシユウⅡシラカワという稀代の科学者が使用する研究プラントだ。情報流出を防ぐ為にも、扉のセキュリティは高い方がいい。

電子ロックをシユウが解く。瞬間、眩い光がマサキの視界を覆い尽くした。左右にスライドしたドアに反応したセンサーが、研究プラント内を照らし出したのだ。

ゆうに二十メートルは超えるだろう天井に、サイバスターを横に並べても余るぐらいに広大な敷地。流石は元訓練場だけはある。様々な機器や装置が並んでいる空間を往きながら、流石にマサキは感嘆の息を洩らした。

「何が何だかわからないぐらいに凄いな。これをあいつが作ったのか」

床に走る大量のコードに、配管。それらを抜けるようにして、マサキはシュウの後に続いた。

ここでシュウがどういった研究をしているのかについては、機器や装置に明るくないマサキには想像が付かなかったが、それでも彼がとんでもないことに手を染めているらしいことについては理解が及ぶ。

何をしてやがるんだ、あいつは。想像以上だった研究プラントの全容を知ったマサキは思わずそう呟いていた。

「これだけの設備があれば、一から戦闘用魔装機を作れそうでもありますね」

「とんでもないプラントだな」

「そのぐらいの設備を備えなければ、教団を殲滅させるのは難しいのでしょうか」

マサキはシュウに続いて歩き続けた。

ややあって、巨大な装置の影から、四方を銀色に輝く壁で囲われた小部屋が顔を覗かせた。プレハブ小屋を豪華にしたような造り。ぱっと見た感じでは倉庫のようでも

ある。

入り口はひとつ。周囲にボルトが打ち込まれた頑丈そうな扉には、丸いガラス窓が嵌め込まれている。

「ここは無菌室です。この中にチカがいます」

マサキはガラス窓を覗き込んだ。

中央に立てられたカプセルの中に、見慣れた青い鳥が浮かんでいる。けれども、閉じられた瞼。賑やかな彼の言葉がそこから響いてくることはない。

液体で満たされたカプセルには、酸素が送り込まれている状態なようだ。下方から上方へと循環する気泡に、果たして魔法生物に効果があるのだろうかとマサキは思ったものだが、そこは魔術のスペシャリスト。シユウがそうしたからには意味がある。

「念の為に魔力で満たした水に浸けています。ライフリングモニターはここにありますが、生命活動は行われているようですね」

マサキは扉の脇にセッティングされているモニター類を覗き込んだ。サーモグラフィもあるらしく、チカの身体がオレンジ色に映し出されている。確かに生きてはいるよ

うだ。マサキはもう一度、ガラス窓を覗き込んだ。今にも瞼を開いてけたたましく喚き出しそうなチカだったが、ぴくりとも動く気配はない。

「多少でしたら、ここの設備の説明は出来ますが、聞きますか？ それとも他の場所を見てみますか」

「そうだな……」マサキはどうするか悩んだ。

戦力レベルの把握はしたいが、マサキに理解出来る説明には限度がある。戦闘ロボットを一から作れるだけの巨大研究プラント……それだけの規模の設備を持っているという事実だけでも評価としては充分だ。サイバスターの補修や改修をウエンディに任せきりにしているマサキでは、どの道、詳細までは把握出来ないのだ。だったらその事実だけで納得するしかない。

「いや、聞いても理解出来る気がしねえ。他を見せて貰えるならそつちを見たい」

「いいですよ。と、云つても後は資料室やデータ分析用のコンピュータールームぐらいですが……」

マサキはシユウに続いて研究プラントを後にした。かなりの規模を誇るだけあつて、

ただ見て回っただけでも三十分以上が経過している。腹も大分こなれた感じになった。これなら直ぐにでも稽古に入れそうだ。

そこから然程離れていない距離にあった資料室とコンピュータールームを覗いたマサキは、その規模に驚きを感じつつも、あまり長居をするのも——と、シユウとともに居住エリアに戻った。

それぞれ稽古の準備を済ませ、格納庫へと向かう。

余程、待ち望んでいたのだろう。道中のシユウの足取りは軽かった。その身体からは、自身の動きを窮屈なものとしていた長剣から解放された喜びが伝わってくる。朝の自主訓練での手応えも相当だったに違いない。格納庫に入ったシユウは、広々とした空間の中央で足を止めるとマサキを振り返った。

「場所はこの辺りでいいですか」

「ああ。充分だ」マサキは周囲を見渡した。

ウィーゾルにノルス、ガディフォールと三機のユニットが出払った格納庫は、わざわざ中央に陣取らなくとも充分過ぎるぐらいの広さがある。各所に整備用の足場が組

まれてはいるが、サイズがサイズだけに、鉄骨の隙間はかなりのものだ。その幅、十人ほどの人間が固まつて通り抜けられるほど。

これだけの余裕があれば、剣を打ち合いながら駆け抜けるのも訳はない。マサキは少し離れた位置に立っているシユウに目を遣った。前回、長い手足を持て余して喘ぐように動き回っていた彼は、今回はどういった動きを見せてくれるのだろうか。先ずはその力量を測る必要がある。

荒療治はその後だ。マサキは荷物を収めていた紙袋を、鉄骨の根元に置いた。

「早速、始めるか？」

「そうですね。ですが、その前にひとつお願いがあるのですが」

「お願い、か？ 聞けることなら聞いてやるが」

「大したことではありません」シユウはそこで何かを思い出した様子で、ふふと笑った。「僕があなたを一度でも地面に這わせることが出来たら、答えて欲しいことがあるんです」

無邪気な笑い顔に変わりはなかったが、その瞳にはそこはかかない底知れなさが潜

んでいた。探るようにマサキの顔を見詰めているシュウの目は、まるで現在のシュウのようだ。笑っていない——とはいえ、これまで充分過ぎる時間をシュウの疑問に答えることに割いてきたマサキである。今更、彼が改めて何を訊ねるつもりでいるのかなど全く予想が付かない。

「俺を地に這わせられたらか。大きく出るじゃねえか」

「そのぐらいに高い条件にしておかないと」シュウは悩まし気に目を瞬かせた。「フエアではないと、あなたが思いそうなので」

「ふうん……？ まあ、いい。何を聞きたいかは知らねえが、そういうことなら手加減はしねえぜ」

マサキは半身を開いてシュウに向かって立つと、腰に下げた剣に手をかけた。

瞬間、すう——と、シュウの顔から表情が抜け落ちる。勿論ですよ、マサキ。剣を抜いた彼はそれを天に掲げながら言葉を継いだ。「あなたには本気になつてもらわなければ困ります」

「剣が変わった程度で俺に勝とうなんぞ、百年早いつてな」

マサキもまた剣を抜いた。

刀身に冴え冴えとした光が走る。買ったばかりの剣だけあって、切れ味は相当に鋭そう。マサキはまだ重みのある剣を片手に握り締めた。

剣は使い込めば使い込んだだけ、重みを減らしてゆく武器である。人を切れば脂で直ぐに刃が駄目になってしまったし、鎧を打てば圧力で刃こぼれが起きてしまう。こまめな手入れ《メンテナンス》が欠かせない武器。打ち直して、磨き直す。その結果、刀身が痩せてしまうのは良くある話だった。

この重みを味わえるのは最初の内だけ。

いずれ手に馴染む重さになる剣の刃先をシュウに向けるようにして、マサキは正面に構えた。「腕を失う覚悟で来い。お前の気が済むまで相手をしてやる」

「優しいですね。ハンデをくれるなんて」

「余計な口を利いてる余裕があるなら、俺から行くぞ」

マサキは片手のまま剣を振り被った。どうぞ。と、片手を柄に、片手を刃先に沿えたシュウが、目の高さで剣を平行に構える。

「大した自信だな」マサキは即座に剣を振り下した。

手首に捻りを加えた一振りは、裂いた空気を巻き込んで気流を発生させた。渦を巻いた空気が、床に積もる埃を巻き込みながら、真つ直ぐにシユウに向かってゆく。

平行に剣を構えてみせた彼は、マサキの攻撃を正面から受け止めるかと思われたが、どうやら彼には彼なりの策があるようだ。横に払われた剣。様子見の一撃でもあつた気流を裂いてみせた彼は、二手に別れた気流の隙間を縫うようにして跳躍した。そしてマサキの目の前に瞬時に姿を現わすと、剣を上段から振り下ろしてくる。

その剣を頭上で受け止めたマサキは、力任せに剣を斜め上方へと払った。くつ。と声を上げたシユウの身体が、後方へと跳ね飛ばされる。けれども剣を落とさせるまでには至らない。空中で身体を振じった彼は、片膝を付く形になりながらも着地に成功してみせると、そのまま地を蹴って再びマサキの懐へと身体を飛び込ませてきた。

正面に捉えていた身体は、けれどもマサキを目前として姿を消す。マサキは身体を返しながら前方へと跳躍した。それまでマサキが立っていた位置に背後から滑り込んでくるシユウが、構えた剣を振り切れぬまま。またもマサキ目がけて突進してくる。

「その程度か、お前の剣は！」

マサキは振り下ろされた剣をすいと身体を横にずらして躲すと、空いた手でシウウの手首を打った。剣を離すまいと腕に力を込めているからだろう。シウウの上半身が腰から折れる。がら空きになった背中に、マサキは容赦なく肘を打ち込んだ。

背中線に一撃を食らって即座に対応出来るほど、彼の身体は頑丈には出来ていない。ぐ、と呻いたシウウが膝を地に着けて激しく咽せ始める。

「動きはマシにはなったが、まだまだだな。剣圧で敵を吹き飛ばせるぐらいにならないと、俺とはまともに打ち合えないぞ。小柄だった当時のお前の身体ならまだしも、育ちきったその身体でラツシユを仕掛けるのは無理がある。魔法は使えるんだろ」

はい。と、咽せながらも領いたシウウに、なら使え。マサキは忌憚なく云い放った。何せ、十年以上の年齢の開きがある。現在のシウウと、9歳の彼の技量の違いは明らかだ。同年代の少年少女と比べれば技術力はある方だが、彼が相手にしなければならぬのは卑劣な手を使うことも厭わない連中なのだ。型に嵌まった剣技だけでは、早晩行き詰るのが目に見えている。

「ですが、それだと魔力のないあなたに怪我を負わせ」

「俺を誰だと思ってるんだ、お前は」

マサキは身体を折ったままのシユウに手を差し伸べた。腕を引いて立ち上がらせ、背中を軽く摩つてやる。肩甲骨の下、中枢にまともに肘が入ったのだ。むしろこの程度で済んでいる辺り、日頃鍛えた身体が物を云ったと云うべきだろう。

「ラッシュー辺倒の戦い方じゃ、直ぐに手の内を読まれるぞ。それを防ぐ為には、攻撃パターンを増やすしかない。とはいえ、剣での戦い方を変えたとするとそれなりに時間がかかる。だが、既に習得している技術を混ぜるだけなら直ぐだ。先ずは実戦に耐え得る戦い方を身に付けろ。俺なら大丈夫だ。お前とは踏んだ場数が違う」

僅かに沈黙が生じた。マサキに魔力がないことが、彼に引つ掛かりを覚えさせているのは容易に想像が付いた。それでも、ややあつて、わかりました。顔を上げたシユウが覚悟を決めたようだ。力強く頷く。

「手数を増やすことで、彼らに対抗出来るようになるというのであれば、僕としては躊躇う理由はありませんね。もう一度、手合わせをお願いします」

そう云つたシュウがマサキとの距離を取るべく歩き始めた。マサキはその背中を間近に思考を働かせた。彼と現在のシュウとの技量の差は、そのまま彼の伸びしろでもある。それは彼の限界が遙か先にあるということの意味していた。

彼の現在の實力を測るには今の一戦で充分。僅かに距離が開いたところでマサキは剣を振り上げた。そろそろ荒療治の始め時だ。何を――と、声を上げたシュウが振り返りざまに後ろに飛び退く。

同時にマサキは剣を振り下ろした。

先程までシュウが立っていた場所に振り下ろされた剣が、床と弾き合つて火花を散らす。剣先から生み出された風が疾風はやてとなつてシュウに襲いかかった。僅かに呼吸を放った口元が、続けざまに人語とは解せぬ言葉を吐き出した。高速詠唱スピードスベルだ。咄嗟に自らの目の前に光り輝く壁を作り出した彼が、間一髪で吹きかかる風を弾いたのを見届けたマサキは再度、剣を振り被つた。

「今の一瞬で三回は死んでるぞ！ 油断はするな！ 敵はひとりとは限らないからな！」
「はい！」マサキの目的を悟つたようだ。声を上げたシュウもまた剣を振り被る。

そのモーシヨンの間に距離を詰め、シユウ目がけて剣を振り下ろす。トン、とシユウの爪先が地を蹴った。即時に目の前から消える彼の姿に、けれどもマサキは騙されない。視覚情報に惑わされるのは三流の戦士のすることだ。^{ブライナ}気の流れを探ったマサキは、振った剣の軌道を変えながら、彼が身体を引いた左後方へと跳躍した。

「^炎よ^撃て^て」
「ОГОРЬ ОГОРЬ」

シユウの背後に燃え盛る炎の柱が生み出される。それは火炎を撒き散らしながらマサキへと一直線に迫ってきた。

マサキは剣を振り下ろした。剣圧が生み出した風を床に当て、更に高く空へと跳躍する。足先を掠めて走り抜けてゆく炎の柱が、次の瞬間首を上げた。まるで見えない壁に突き当たったかのように鋭角を描いて曲がる炎の柱。それはマサキを追って宙へと舞い上がってくる。

「行きますよ！」

シユウがマサキに向けて剣を構える。背後からは迫り来る炎の柱。床に足を着いたマサキは、身体の向きをシユウに対して90度を開いた。そして身体がから空きになる

のを承知で、右手にした剣で炎を薙いだ。

「ごう、と音を立てて風が炎を打つ。炎柱の頭部分が一気に弾け飛んだ。

「もらった！」

姿勢を低くしたシュウが、床に滑らせた剣先を一気に払い上げた。風圧がマサキの鼻先を掠め、刃先が前髪を散らす。だが、マサキは怯まない。返す刃でもう一度炎を薙いだマサキは、そのまま地面を蹴って後方へと身体を逃がした。

「行くぞ、覚悟しろ！ 纏めて吹き飛ばせ！」

床に足を着けるより先、両手で掴んだ剣に^{ブラスナ}気に乗せたマサキは、炎と並んで迫ってくるシュウに向けてその剣を打ち下ろした。剣圧に叩かれた床が溶けた鉄のようになぐにやりと凹む。その衝撃波は幾重もの波となってシュウと炎に襲いかかった。

「Крути ветер^風 под ногами^下!»

千々に散りゆく炎が、散華と化して宙を舞う。まるでダイヤモンドダストのように、ひらひらと空に溶けてゆく炎の欠片。その脇で咄嗟に放った魔法で風の鎧を作り、我が身を守ったシュウは、強大な力を惜しげもなく曝け出してみせたマサキ相手に次

の手をどうすべきか考えあぐねている様子でいた。

口惜しさに口唇を噛み、焼け付く付くような眼差しでマサキを睨み据えている。

技量の差は歴然としている。その中で、たった一度。マサキの剣を落とす。宣言した誓いをどうすれば実現出来るのか。これまで潜り抜けてきた修羅場の記憶がない彼では、攻撃のパターンは想像力に頼るしかない。けれども効果的な戦術というものは、頭の中で考えるだけでは生み出せないものでもある。

「どうした。もう終わりか」

「御冗談を。まだやれますよ！」

風の鎧を身に纏いながら突進してきたシユウを跳んで躲して回る。右に左にと身体を振られた彼は、魔力の消費も相俟ってか。それともし慣れない戦い方を強いられているからか。消耗がその度合いを深めているようだ。

「その程度か！ お前の実力は！」

「まだやれます！」

見境がなくなると、結局戦い慣れた方策に頼るようになるようだ。泥臭く剣を打ち

込んではマサキに躲されるのを繰り返すシユウに、そろそろ一度区切りをつけてやるべきか——と、マサキはその剣を自身の剣で叩き落した。

呆気なく手から剥がれ落ちた剣に、呆然とした様子でシユウが立ち尽くす。赤子の手を捻るように自身の剣技をいなしてみせたマサキに、力量の差を思い知ったのだらう。流石は剣聖ランドールの名を継ぐ者……そう呟いて、深く息を吐いた彼は天を仰いで、どうすれば……と言葉を吐いた。

「どうすれば僕はあなたに一撃を食らわせることが出来ますか」

「魔法を使いながら剣を振るえるなら、答えは簡単だ。同じことをブラーナ気を使ってやれば

いい」
ブラーナ

「気を？ でも、それは体力を倍以上のスピードで消耗しながら戦えということですよ」

「毎回使えとは云つてない」マサキは床に転がっているシユウの剣を拾い上げた。「ここぞという時に使うんだ。使い時をどこにするかは経験で覚えてゆくしかない。ファーストアタック初撃でインパクトを与えるのに使うのか。相手をかく乱する為のフェイントに使うのか。」

確実に相手に一撃を当てる為に使うのか。それともどめの一撃に使うか。遣り方は幾らでもある。けれども使ったからには、次は見切られて当然。その覚悟を持つて使え」

剣をシユウに渡してやったマサキは、先程、足場の足元に置いた紙袋を拾い上げた。「次の稽古だ」云いながら、その中からロープを取り出す。部屋の中にあつた荷物用の細いロープは、稽古で使用する分には充分に用途に足る剛性があつた。

「そのロープは何に使うんです」

「これでお前の左腕の動きを封じる」眉を顰めたシユウにマサキは続けた。「制限のかかった状態での動きに慣れれば、制限を解かれた時の動き方が変わる。お前は攻め込むのは得意だが、守りに入るのは苦手だ。煽られれば直ぐに手を出すしな。そこを直す」

「これで直せるのですか？」

シユウに左腕を出させたマサキは、腕を吊る要領で、彼の左腕を動かめようにロープで固定した。さあな。その最中にシユウに問い掛けられたマサキは笑つて答えた。

「それはお前の心掛け次第だ」

そこから一時間をかけて^{フラーナ}氣を劍に乗せる稽古をつけた。

シウ曰く、魔力を巡らせるのと要領は同じであるらしい。然程時間も経たず^{フラーナ}に氣を劍に乗せて振れるようになったシウに、マサキはひたすらその状態で素振りをさせることとした。消耗具合は激しかったが、負けん気の強さが地に伏せるということさせないようだ。腕をふらつかせながらも百回劍を振り切ってみせたシウに、十分ほど休みを与えたマサキは、続けて左手が不自由な状態のまま、マサキを相手とした劍の打ち合いを命じた。

但し、今回は^{フラーナ}氣は使わせない。魔法を放つのもなしだ。

距離を決めて、そこから動かずに劍を黙々と打ち合う。素振りに標的が出来ただけの状態ではあるが、長い手足を持て余しているシウにとって、劍が届く範囲を覚え込ませるこの訓練は必要なものだ。

勿論、何も考えずただ劍を打ち合うだけではない。そこには力の強弱や、劍を打ち下ろすタイミングといった駆け引きが生まれる。力技で押し切るようにして攻め込む

劍技から、駆け引きを用いた高等戦術を駆使する劍技へと。マサキの目論見は彼にそういった一段上の技術を身に付けさせることにあった。

既にハードな素振りをこなしていたシウウは、度々劍を飛ばした。彼の右手の疲労が相当なものに及んでいることをマサキは気付いていたが、実戦に耐え得る技術を身に付けさせるのが目的だ。マサキは手加減をすることなく、シウウの劍を払い、また彼の劍を目掛けて自らの劍を打ち込んだ。

それでもシウウが音を上げることがなかったのは、負けん気の強さは勿論のこと、マサキに稽古を付けてもらえる機会がそうそうないことを本人が悟っているからでもあるのだろう。

「少し、わかつてきたような気がします。力の加減は勿論ですが、手首の動きも大事なのですね」

「手首だけじゃない。腿の動き、腰の動き、肩の動き。全部が連動することで、劍はその動きを自在に変える。わかったなら関節の動きを意識してみるんだな」

そこから更に、繰り返し、繰り返し、劍を打ち合うこと一時間ほど。ついにマサキ

の剣が飛んだ。

要領を掴めば上達が早いのは料理に限らないようだ。関節を連動させて剣の動きを変えろ。変化が生まれた彼の剣筋は読み難さを増していた。そうした最中であつての不意を突かれた一撃に、マサキの手は耐え切れなかった。

カーブを描いて宙を舞い、床に転がった剣を暫く眺める。これなら明日以降の稽古にも期待が持てるだろう。

「良くやった」最早、息も絶え絶えなまでに疲労困憊しているシュウにマサキはそう声をかけた。

直後、大きく息を吐いた彼の身体が、膝から崩れ落ちる。気力だけで保たせていたに違いない。床に倒れ伏した彼は、既に瞼を閉じて意識をすっかり失っている状態だ。慣れないことばかりの稽古の中で、良くぞここまで踏ん張ったと云うべきだろう。彼の左腕を拘束しているロープを解いてやったマサキは、そのまま自分よりも頭半分は高いその長躯を担いで居住スペースに戻ることとした。

※※※

管理室で行くべき道を間違えて迷いかけたものの、その先の通路が土砂崩れで塞がれていたこともあって、深刻なダメージとはならなかった。行きつ戻りつ、どうにか居住スペースに辿り着いたマサキは、シユウを自分の部屋へと運び込むとベッドに寝かせて様子を見ることにした。

遅めの昼食の支度をしたかったが、彼の部屋に入れない以上はそうもいかない。シユウの部屋のセキュリティを解除出来るのは本人だけだ。マサキは戸棚からコーヒーを取り出した。冷蔵庫の中の牛乳はまだ賞味期限内だ。時間をかけて温かいカフェオレを入れたマサキは、カップを片手にソファに腰を落とすと、シユウが目を覚ますのをテレビを見ながら待つことにした。

魔力も^{フライング}気もそれなりに消耗している彼が目を覚ますのには、それなりに時間がかかるかと思ったが、幸いというべきか。それともテレビの音が障ったのだろうか。一時間もしない内に目を覚ますと、すみません。と、自分が居る場所を即座に把握したよ

うだ。反射的に身体を起こした彼は、ソファに座っているマサキに気まずさを露わにした。

「気にするな。気を扱うのが初めてにしては良くやった。剣に気^{ブライナ}を乗せるのは難しい。慣れない内はコントロールが上手くいかないのが当たり前だ。そんな中で、あれだけ稽古に付いてこれたのは流石だな」

「それならいいのですが」

「自信を持て。俺の剣を落としたんだぞ。有言実行じゃないか」マサキはシユウの肩を叩いた。「何か飲むか。それとも食事にするか。もう昼も大分過ぎたが」

「それでしたら、僕の部屋に行きましょう」

ベッドから這い出たシユウは、けれどもまだ本調子とはいかないらしかった。気^{ブライナ}の消耗が響いているのだ。ふらつく足で二、三步歩くと、支えを求めて壁に手を付いた。ぜいぜいと息を吐いている彼にマサキは肩を貸し、部屋を出た。

間に一部屋挟んだだけの距離とはいえ、歩くことさえままならないシユウを連れてとなるとかなりの距離だ。マサキに寄りかかりながらゆっくりと前に進んでゆくシユ

ウを、腕一本で支えてやりながら、ようやく辿り着いた彼の部屋の前。マサキは彼の部屋のドアの前に立たせた。

彼の部屋のセキュリティシステムは指紋認証とパスワードで出来ている。仲間であろうと気安く部屋に入って欲しくはないのだろう。手を上げるのもしんどそうな様子でセキュリティを解除したシュウを、マサキは引き摺るようにしてベッドに運び込んだ。

「夕食の時間までそんなに間も空いていないし、軽めに済ませるか」

「僕も手伝います」

「無理はするな。気を消耗してるんだ。今日は大人しく寝ておくんだな」
ブラーナ

気が弱っている今のシュウにとっては、咀嚼がし易いものの方が食が進むに違いない。そう考えたマサキは、玉葱を使ってグラタンスープを作ることにした。

風邪の引き始めにプレシアが良く作ってくれる栄養価の高いスープ。手軽に作れる割には満足度も高い。さつくりとスープを完成させたマサキは、ベッドで身体を起こして読書をしていたシュウに、トレーに乗せたグラタンスープを手渡した。

玉葱の自然な甘味が食を進ませるグラタンスープをシュウは気に入ったようだ。ひと口含んで、美味しいと声を上げた彼は、後でレシピを教えてくださいとマサキに頼み込みながら、彼にしては驚異的なスピードでスープを完食した。

「読書もいいが、きちんと身体を休めろよ。普段の身体と比べれば病人のようなものだ。無理をすればただだけ回復は遅くなるぞ」

「わかつてはいるのですが」シュウはベッドの柵に深く背中を預けた。「ねえ、マサキ。僕は云いましたよね。あなたを地面に這わせることが出来たら、答えて欲しいことがあると。あなたの剣を落としたことはそれに値しませんか」

「そんなに訊きたいことなのか。もう充分、お前の疑問には答えた気がするがな」
「まだ大事なことを僕は聞いていないのですよ」

喘鳴にも似た呼気が彼の口元から洩れる。今の彼にとっては、息をするのでさえも難儀なことなのだ。当然だ。マサキは人事不省に陥る自身の^{ブラザー}気不足を思った。意識を失うのは当たり前。身動きすることさえもままならなくなるあの状態に比べれば、シュウが陥っている状態はまだ軽いとも云える。

「そう焦らずとも、お前のことだ。このまま稽古を続ければ、そう遠くない内に俺と対等に戦えるようになるだろう」

「もう三日目、ですよ。もう数日もすれば、彼らが戻つて来てしまう」

「弱気だな。そんなに自分の能力に自信がなくなったか」

「あなたの力は強大ですからね。常人がそう簡単に辿り着ける境地ではないと、流石に今日で思い知りました」

シウはそう云つて、腿の上に広げている古めかしい本に目を落とした。憂いを帯びた眼差しが、凝つとその表面に記されている文字を見詰めている。

「簡単なことですよ、マサキ。僕が訊きたいのはたつたひとつ。あなたは未来の僕とどんな関係だったのですか」

わざわざ条件を付けてまで訊きたいと望んだ内容であるのだ。敵だ味方だといった通り一遍な答えを期待してはいないのは明らかだった。

けれどもマサキは彼のその問いに、正しい答えを返せる気がしなかった。

知人ではあるが、友人ではない。敵ではないが、味方でもない。過ちを犯してしまつ

たことはあれど、だからといって恋人と呼べるような関係でもない。徐々に距離を近くしているとは思うものの、だからといって彼がマサキの世界に必要な人間であるかと問われれば、いなくともきつと世界は変わらない——としか答えられない。

彼はマサキにとつて不可知な内面世界を持つ存在であるのだ。

シウウシラカワ。或いはクリストフマクソード。例えば彼がふたつの名前を持っている理由さえも、マサキは良くは知らないままだ。謎めいた彼の私生活プライベートに興味がないと云えば嘘になったが、だからといって殊更にそれを知りたいとも思えない。極力、干渉を避けたい相手。今のマサキにとつて、シウウシラカワと云う人間はそういった立ち位置にある。

「どんな、つて云われてもな。敵でもなければ味方でもない奴だとしか」

マサキの返事を訊いたシウウは悲哀も露わに、顔を上げた。真つ直ぐに正面の壁を見据えているシウウの瞳には、最早マサキの姿は映っていないのだろう。

まるで目を合わせるのを避けているようなシウウの態度に、マサキは黙り込むしかなかった。彼の記憶を戻すのに、果たしてこの話は貢献するのだろうか。巖のように

硬くなった自身の心に、マサキは思った以上に自分がこの話にナイーブになっていると気付かされた。

云つていいことと云つてはならないことを明確に区別しているマサキからすれば、シユウとの拗れた関係は誰であろうと覺られてはならない秘密なのだ。

云わずに済ませられるのであれば云わずに済ませたい。そう、例えばそれがシユウ自身であろうとも……ましてや彼はまだ9つだ。明晰な頭脳を有しているとはいえ、精神的な幼さが抜けきつた訳ではない。その彼が、どうしてマサキの本能的な欲望を理解出来たものか。

「自分が記憶を失っていると知った僕は、先ず記憶の手掛かりとなるものを探しました。最初に見付かったのは上着のポケットに入っていた手帳。けれどもこれにはスケジュールのなものや、思い付いた理論が書き連ねられているだけでした」

ぽつりぽつりと自らのことを語り始めたシユウは、まるでマサキの答えを訊かなかつたことにしてしまったようにも感じられた。だからといってマサキに何が返してやれる筈もない。マサキはただ黙って彼の言葉に耳を傾けた。

「僕は考えました。子どもの頃の習慣は大人になつたら失われてしまうものなのか」
一瞬、シユウがちらとマサキを窺った。「僕には日々の日課がありました。一日の終わりに今日の出来事を書き留めておく」

まさか。マサキは全身が総毛立つような怖気に襲われた。続けて背中を伝い落ちる汗に、動揺が明らかになつてゐることを知る。

ちりちりとこめかみを焼く嫌な予感。それは、その言葉は――。マサキは今にも叫び出したくなる衝動を必死の思いで堪えながら、続くシユウの言葉に耳を傾けた。

「どこかに未来の僕の日記帳があるに違いない。僕はこの部屋を探しました。ああいつた人たちに囲まれて生きてゐる彼のことです。簡単に見付けられるような場所に置いておくとは考え難い。僕は僕の習慣に則つてこの部屋を探しました。そして見付けたのです、彼の日記を」

喉が驚くほどに乾いている。マサキは口の中に溜まつた唾液を飲み込んだ。まさか。そんなことがある筈がない。どうかすると震え出す手を強く握り締める。

「大抵は日々の何気ないことばかりが綴られていました。何処に行き、誰と会い、何

をしたか……未来の僕は今の僕とは異なり、何も書かずに済ませることも多かったよ
うで、一冊の日記が終わるのに三年以上の月日がかかっていました。けれども、それ
を読み進めてゆく内に僕は興味深い記述を見付けたのです」

そして言葉を区切った彼は、今度こそ真つ直ぐにマサキを凝視^{みつ}めてきた。

「あなたのことですよ、マサキ・アンドー」

何が書かれているのか、などマサキにはわかりようもなかった。まさか明け透けに
情事の内容を事細かに書くこともしまいと思うも、9歳のシユウが異変を感じるぐら
いであるのだ。それなりに踏み込んだことが彼の日記には書かれていたのであろう。

沈黙が重い。

何か云わなければと思うも、思うように口が開かない。乾ききった口唇が張り付い
てしまっている。

このままでは現在のシユウとの関係について、通常の間人間関係ではなかったことを
認めることになる。マサキは焦った。何でもいい。何か云わなければ——けれどもど
うにか口唇を開いたところで、一語たりとも言葉が出てこない。

言葉がないことに焦れた訳ではなかっただろう。マサキを凝視^{みつ}めるシュウの眼差しは温かだった。全てを悟り、受け入れたような達観^{だっかん}しきった表情。それは9歳のシュウの、この問題に対する覚悟のほどを窺^{うかが}わせた。

「読みますか？ 未来の僕の日記を」

ややあつて広げつ放^{はな}していた本を取り上げた彼は、それをマサキに差し出してきた。良くなめされた皮が張られた表紙に、色ムラの多い羊皮紙。びつしりと書き込まれている文字は、成程、確かに几帳面^{じょうめん}が過ぎる彼の手で記されたものであるようだ。得てして人の手で書かれた文字というものは、右か左に傾きがちなものであつたが、彼が書いたと思しきそれは極めて平均的なバランスを保っている。

メモ書きなどを目にしたことはあつたが、纏^{まと}まつた文章になつていて彼の文字を目にするのが初めてなマサキは、一見^{いちけん}しただけでは出版物^{しゅつぱんぶつ}としか判別^{はんべつ}出来ない彼の精緻な筆遣いに、そりや勘違^{かんちがひ}いもする——と、古書^{こしょ}と思ひ込まされたマサキは感心^{かんしん}せざるを得^えなかつた。

とはいえ——。直後に正気に返つたマサキは、勢いで受け取つてしまつたシュウの

日記帳を果たして自分が読んでいいものかと懊悩した。彼のように物事を計画立てて進めることのないマサキは、決して日記を付けたことがなかったとは云わなかったが、彼のように継続的に書き続けられることもなく、三日坊主で終えてしまっている。それでも、そこに記されている内容がナイーブなものであるのは理解が及ぶ。

どうってことのない一日の出来事を記しただけでも、そこに自身の感想が挟まった時点で、それは私的な文書と化するのだ。

大したことを日記に書かなかったマサキですら、自分の日記帳を誰かに見せたいとは思わなかった。ましてや神経質な性質であるシュウのことだ。彼がわざわざ自らの仲間の目に触れない場所に日記帳を隠したことで、その答えは知れようというものだ。

幾らそこに自分のことが書かれているにせよ、興味本位で目にしているのではない。マサキは好奇心を抑えて、シュウの日記帳を閉じた。

知りたいことは沢山あった。

彼の過去にしてもそうだったし、謎多き私生活にしてもそうだった。マサキに対す

る態度の理由にしてもそうだったし、何を考えて不埒な行為に及んだのかという原因にしてもそうだった。けれどもマサキはそれを知りたいと望みつつも、同時に知りたくないとも思ってしまったている。

マサキは彼に責任を負いたくないのだ。

シュウⅡシラカワという人間の人生の責任を負うのは彼だけでいい。そこにマサキは関わりを持ちたくなかった。人がひとりで持てる荷物の量には限界がある。マサキの両手は魔装機神操者という立場とそれに付随する責任だけでいっぱいだった。彼の個人的な事情や感情をも背負い切れるほど、今のマサキⅡアンドーという人間には余裕がない。それをマサキは自身のことだからこそ、誰よりも的確に把握していた。

「俺が見ていいものじゃない」

「見てもらった方が話が早いと思ったのですが、残念です」

シュウはマサキから日記帳を受け取ると、それを枕元に置いた。残念だと口にした割には、そこまで気落ちはしていないようだ。大切なものを愛でるような眼差しを日記帳に向けながら、その皮の表紙を幾度か撫でた彼は「僕はこういった人間ですから」

と、マサキを通り越した誰かに語りかけているような調子で言葉を紡ぎ始めた。

「様々な人間の様々な思惑の中で生きること余儀なくされました。王宮内の人間関係はシンプルなように見えて複雑で、自らに傳く人間が必ずしも自分の味方とは限りません。彼らの争いは僕らの目の届かない場所でひっそり行われるのが常で、気が付いた時には味方がいなくなっているなんてことも日常茶飯事でした。だから僕は血縁である叔父や従兄であるフェイルロードにも心を許せずにいたのです。彼らが僕に肉親として接してくれているのはわかっていましたが、だからといってそれに甘えてしまつては、僕を主流に置きたくない人たちの反発を招いてしまいます。それは微妙なバランスで成り立っている王室の平和を乱すことになり兼ねません。だからこそ僕は、彼らと末永く付き合つてゆく為にも、彼らと一定の距離感を保つて付き合つていかねばなりませんでした」

そうして日記帳から視線を外したシユウは、ブランケットの掛かった自らの膝を眺めるように視線を落とした。

「僕が心を許せるのは母しかいなかったのです」

マサキはここで急に言葉を発していいものか悩んだ。現在のシュウの笑い方を父に似た笑い顔と評した彼は、どうも自分の父親にいい印象を抱いてはいないようだ。けれどもそれを、果たして彼の問いに返事らしい返事をしなかった自分が訊ねていいのか。

シュウは口を閉ざしている。

彼なりに自分の育った環境を振り返ることには抵抗があるのだろう。冷静に状況を分析しているように見えてもまだ9歳だ。心を許せる味方に限りがある環境が辛い筈がない。マサキが同じ環境に同じ年齢で置かれることとなったら、彼のように冷静に立ち回れたものか。きつと激しく混乱して癇癪を起しているに違いなかった。

シュウは変わらずに口を閉ざしている。

何を思い、何を考えているのか。黙って顔を伏せたままにいる彼に、マサキはついに折れた。

「……父親はどうした」

「父はあれで結構な野心家ですから」

「そうか」マサキはそれ以上、シユウに父親のことを訊ねることを避けた。

短く、端的に、その特徴だけを口にする言葉に、彼の全ての感情が詰め込まれているようだった。怒り、悲しみ、憎しみ……恐らく、彼はマサキが考えている以上に、自らの父親に対して思っていることがあるのだろう。けれどもその全てを訊き出したとして、彼の父親に何が出来たものか。マサキが王宮に上がるようになった頃には、既に存在のなかった人間だ。そもそも生きているのかさえも怪しい。

全てを引き受けられない以上、そこから先は訊いてはならないことであるのだ。それをシユウも理解しているのだろう。だからこそ彼はマサキにそれ以上の理解を求めることをせず、更に先に話をすすめるが如く言葉を紡いでいった。

「でも、マサキ。だからこそ僕は未来の僕が日記に記したあなたのことを読んで、あなたに興味を持ったのですよ。彼らがあなたに頼ることを決めたことを、内心一番喜んだのは他でもない僕ですからね。だってそうでしょう。過去から現在に至るまでの僕の身に何が起こったのか、僕は想像することしか出来ませんが、それはきつと今以上に僕の心を頑ななものとしてしまったのでしょうか。その僕が誰かにこんなにも執着

し、心酔し、そして心を許している。あなたは僕の予想に違わない素晴らしい人間です。あなたの在り方をこの目で確かめた僕は、未来の僕の見る目の確かさに感心しました。そして喜びました」

「喜んだ？」

「当たり前ですよ、マサキ。僕は自分が外の世界にそういった存在を得られたことが、とても——そう、とても嬉しかったのです」

けれどもマサキは、9歳のシュウの言葉を素直には受け止められずにいた。

剣聖ランドールの名を受け継ぐ魔装機神サイバスターの操者という肩書は、マサキの地底世界での評価に一定の格を与えてくれた。無論、マサキとてその肩書に相応しくあろうと努力を続けてはいたが、理想とする自身の姿にはまだまだ遠く及ばないというのが現状だ。

マサキⅡアンドーという人間は、他者が評価するほど立派な人間ではないのだ。

自身に対する評価と実情の差異。^{ギャップ}ふとした瞬間に耳に入ってくる神格化された己の

評価に物思ふことのないような人間はそうもまい。彼らは戦場におけるマサキの戦

いぶりを人間性に落とし込み、自らの理想でコーティングしてみせた。彼らが築き上げたマサキⅡアンドーという偶像が、まるで人間らしさを感じさせない存在と化しているのはだからでもある。

打たれば挫け、弾かれては折れる。けれども己の誇りと矜持を守る為にはしがみ付くしかない。マサキは泥臭くも青臭い戦場の現実を直視してきた。死と隣り合わせの日常生活。失われた命に限りはなかったし、その中には醜さを曝け出していったものも数多い。果たしてマサキがそうならない保証がどこにあっただろう？ マサキⅡアンドーという戦士は、人並みに脆い精神性を抱えたただの人間でもあるのに。

理想を掲げる戦いとは、彼らが思っているほど清く美しいものではないのだ。

感情的に鈍感な性質であるマサキは彼らの評価に深刻に悩むことはなかったが、過大評価だと苦笑する程度には自らに存在している人間くささを認めている。そう、自らに内在する普遍的な欲の数々と戦い続けているからこそ、マサキは自身の評価に奢ることをしなくなった。それに深く関わっているのが、シウウⅡシラカワという人間であるのに。

彼はいつだって高く伸びたマサキの鼻をへし折つてみせた。自らの力を過信していたマサキの前に立ちはだかつた最強にして最後の敵。彼はその立場から降りて尚、マサキの脆さを暴き続けようとする。そう、自らの欲をささやかに解消するだけだったマサキに、彼は他者によつて与えられる快樂を教え込んだ。そうして、それから……「読みませんか」

シウが再びマサキに訊ねてきた。はつと顔を上げたマサキは、彼が手を置いている枕元の日記帳を見た。

彼はそこに自分のことをどう記したのだろう。それを見たい。猛烈に湧き上がった欲求に、マサキは強く首を振つた。背負えないものに深入りをしてはならない。何の代償も得ず、自らの欲だけを果たすなどあつてはならないことだ。

「僕はあなたがこれを見る資格があると思つています。他人のことはあつたことしか記さなかつた未来の僕が、あなたに關してだけは深く観察を続けていることがわかる記述を繰り返している。そこには恐らく、想像や思い込みも多かつたことでしょう。でも、そうして自身の考えを補わなければ、僕は僕のままならない感情を制御出来な

かったのだと思います」

「そうは云われてもだな。他人の日記を勝手に読む、なんてことは」

「僕の記憶が戻らなければ、未来の僕のこの感情は何処に行ってしまうのでしょうか。もう、二週間が経過してるのですよ、マサキ。僕の記憶が失われてから。僕にはとても自分の記憶が戻るとは思えません。だったら、せめてあなたにはかつての僕があなたをどう思っていたのかを知って欲しいと」

再びシユウに日記を差し出されたマサキは、躊躇いがちにそれを受け取った。中身を見ることに對する抵抗感が拭えた訳ではなかったが、シユウの言葉にも一理ある。二週間。一時的な記憶喪失にしては、時間が経ち過ぎてしまっている。

簡単に諦めてしまうのはマサキの性分ではなかったが、どこかで区切りを付ける必要はある。

マサキは表紙に手をかけた。息を深く吸う。これを読むことは、シユウの記憶が戻らない現実を受け入れることでもある。それでもいいのか。マサキは最後に自分自身に念を押した。そして、覚悟を決めて表紙を開いた。

その瞬間だった。

不意に伸びてきたシュウの手が、マサキの手から日記を取り上げた。シュウ。マサキは彼の名を呼んでその顔を窺った。苦悶に満ちた表情を浮かべている彼は、どこか人が変わってしまったようにも映る。

「……自分のすることだと思つて大目に見ていれば……」

マサキは目を見開いた。

どこか自分の感情を抑えたような声。その話しぶりは、紛れもなくマサキが良く知る人物のものであった。シュウ。マサキは重ねてシュウの名を口にした。けれどもそれを聞いているのか、いないのか。彼はマサキから取り上げた日記を反対側の床に投げ捨てると、続けてマサキの手首を掴んできた。

「お前、記憶が——！」

そこには頼りなさを感じさせていた少年の姿はもうない。昏い光を孕んだ紫水晶の瞳。獰猛で凶悪な眼差しがマサキをしつかと捉えている。「お前、何を……！」
アメジスト
ブラーナ 氣を失っているとは思えない力強さで、マサキをベッドへと引き上げようとするシュウに

マサキは藻掻いた。

「巫山戯ろよ……！ このつ……」

空いた手で彼と格闘を繰り広げながらも、その手を払い切るには至らない。長時間の稽古は、マサキからもそれなりの氣と体力を奪っている。「くつそ……っ！」無言でマサキを組み敷こうとするシユウに、マサキは彼の怒りの真髄を見たような気がした。

当然だ。

他人に自身の感情を開陳することのない彼にとって、私的な出来事やそれに付随する考えが記された日記は、決して人の目に触れさせたくないものの最たるものの筈だ。わかっていたじゃないか。マサキはシユウと揉み合いを続けながら、彼の荒れ狂う胸中を思った。他人がしでかしたことであれば、彼は恐らくもう少し穏やかに対応してみせたことだろう。

9歳の自分。過去の己。その存在は、その後には過酷な人生を歩まざるを得なくなつた彼の目にどう映つたのだろう。もしかすると彼は、輝かしい人生を送っていた過去

の自分を懐かしくも眩しいものとして見ていたのかも知れない。そうでなければ、どうして9歳の自分がしていたことを現在進行形で見ていたような口を利いたものか。やがて、シユウとの取っ組み合いに疲れ果てたマサキは、ベッドの上で彼に両手を抑え込まれたまま。静かに身体のを抜いた。

「そんなに見たかったですか。私の日記が」

怒りを滲ませた声。マサキを見下ろす表情は、彼にしては珍しくも高ぶった感情を露わにしたものだった。

「見たくなかったって云ったら嘘になるな」

「見て、どうするつもりだったのです」

マサキが素直に答えるとは思っていなかったようだ。瞬間、虚を突かれた様子を見せたシユウは、けれどもすぐさまマサキ相手に油断はならないと思い直したのだろう。直後には捉えているマサキの手首を強く握り付けてくる。

きつと跡が残るに違いない。マサキは痛みに眉を顰めながらも、ぼんやりと脳の奥で呑気にもそう考えていた。

そしてシュウの問いにどう答えるかを考えた。

けれども、幾ら考えたところで、そこに彼が納得しそうな理由は見出せなかった。マサキはただ知りたかったただだったのだ。自分に不埒な行いを働いた男が、何を思つて、そしてどういつた考えでそうするに至つたのかを。どうせ戻らぬ記憶であるのなら、せめて最後にそれを知つて、そして消えてしまったシュウⅡシラカワという人格への弔いとしたかった。

「お前が何を考えていたのかを、知りたかった」

マサキは静かに言葉を吐いた。

今となつてはその行動に意味はない。マサキは彼の日記帳への関心がずつかり自分の中から消え失せてしまつてゐるのを感じ取つた。そう、彼が存在しているならば、それは無用な行動なのだ。何故ならマサキはシュウを彼が抱えているものと背負い切るなどということは出来なかつたし、するつもりもないままだったのだから。

だから、この問答には最早意味はない。マサキはわかつていた。シュウの記憶が取り戻された今、マサキに残されている使命は、無事にここから出てプレシアの待つ家

へと帰ることだけだ。だのにシユウは、自らの汚された自尊心プライドをそのままにしておくつもりはないようだ。いつそう眼差しを険しくすると、冴え冴えと響く声でこう言葉を吐いた。

「なら、その答えをあなたはもう知ったでしょう」

「知っただって？」

マサキの言葉に、そう。と、頷いたシユウが、厳粛とも思える厳かさで言葉を継いだ。

「私はあなたに執着している」

力任せにベッドに押え付けられた手首が、ぎしぎしと悲鳴を上げている。

「そしてあなたに心酔している」

その言葉は先程、9歳のシユウがマサキに語って聞かせてきた言葉だった。

「あなたに心を許していなければ、どうして私は、あなたにこうして触れられたものか！」

苛烈に言葉を吐く彼の表情の向こう側に、マサキは9歳のシユウの面影を見たような気がした。

嗚呼、彼は今尚苦しんでいるのだ。自らが辿った人生を知った9歳のシユウが途惑い、怒り、悲しんだように。

それは恐らく遣り場のない感情に対する苦しみであっただろう。シユウ。マサキはただ彼の名前を口唇に乗せた。9歳のシユウを宥めた時のことを思い起こしながら、そうして彼に今かけるべき言葉を探した。けれどもそうしたある種の公平性^{フラット}に満ちた^な感覚は、長くは続かなかった。

「お前、やめ……っ！」

頭を垂れたシウの口唇がマサキに口元に迫ってくる。

マサキは咄嗟に顔を背けた。夜毎望み、自慰に耽った日々は振り返れば直ぐそこに当たり前の過去として存在していたけれども、だからといって素直に彼に身体を預けられるような状況でもない。

マサキには立場がある。魔装機神操者という絶対唯一の立場が。

そうである以上、裏切ってはならないものの為に、マサキは意地を張らねばならなかった。

足をばたつかせ、時には彼の腹を蹴り上げ、必死に抵抗を続ける。そう遠くない内に体力が尽きるのはわかりきっていたが、わかっているからといって抵抗を止めていい理由にはならない。マサキは藻掻き続けた。まるで手負いの獣だ。尽きかけている筈の気が、まるで最後の輝きを放つかのようにシウに力を与えている。

マサキの頬を挟み込んだ彼の手が、言葉を吐くのも難儀なまでに顎を圧迫してくる。限界か——マサキは息荒く、ベッドに沈み込んだ。直後に塞がれた口唇に、激しい眩暈が襲いかかってくる。もう身体を起こすこともままならない。残された^{ブラザー}気を食い尽

くすかのような勢いで口唇を貪つてくるシユウに、マサキは身体を預けた。口唇の端から洩れ出る吐息が熱い。絡め取られた舌が深く、彼の口腔内へと吸い込まれてゆく。こんな切羽詰まった状況であるというのに、マサキはシユウから与えられる口付けに恍惚を感じてしまっていた。ああ、ああ、ああ。これが欲しかった。マサキは緩く舌を動かした。意地を張り続けた自分が折れることを選んでしまったのは、この弱さが原因であるのだ。

フラッシュ
氣と体力を消耗してしまっていたから——などというのはおためごかしに過ぎない。けれども目の前のこの男に身体を許すには、それは充分な大義名分足り得た。現にマサキは消耗しきっていた。奪われた氣は視界を利かせ難くしていたし、腕や足に至っては1ミリたりとも動かせる氣がしない。

はつき
だのに欲望はマサキの思考を明瞭りと働かせた。記憶を失った自分が自分の全てを預けきった小さな世界。彼の腕の中で、マサキは自分でも驚くほどの安らぎを得ていた。これで楽になれる……飢えを抱え続けたマサキの身体と精神はどうに限界を迎えたただただ欲望の従僕と成り下がる道しか残されてはいなかった。

「や、め……ろ……」

それでも、声にならない声でマサキは最後の儚い抵抗を試みるのだ。彼の口唇が剥がれた後に、自らの耳へと下りてきたその瞬間に。

嫌ですか？ 冷えた声が、マサキに残酷な現実を突き付ける。進むか退くかの二者択一。それはマサキの心を大きく揺らがせた。進んでしまつては戻れない。知っている。マサキは霞んだ視界から自らを遮断するように瞼を閉じた。仲間たちの顔、サイバスターの雄々しき姿、そして名も知らぬ民と雄大なラ・ギアスの大地……様々なイメージが瞼の裏側に過ぎつては消えた。

だからマサキは奪われることしか出来ないのだ。

そうでなければ自分の意地が報われない。マサキはシユウを追い続けた日々を脳裏に蘇らせた。流された数多くの血を、喪われた人々の命を忘れてなるものか。そうすることで、マサキはともすれば欲望に溺れそうになる自らを奮い立たせようと試みた。

——人並みの幸せなんて、クソ食らえだ！

けれども気炎を吐くマサキの心とは裏腹に、身体はびくりとも動かなかった。

「そうでしょうとも」

シウウの口元に冷やかな笑みが浮かぶ。昏い光を孕んだままの彼の紫水晶の瞳が、白い肌の中、洞のようにぼつかりと穴を広げている。その、感情の一切を放棄してしまったのかのような表情が、却って彼が今抱いているだろう感情を強く表していた。

「あなたはそういう人ですよ、マサキ。他人にばかり答えを求めている」

執着と心酔と依存。そして肉欲。胸に様々な感情を抱きながらも、それでも彼もまたマサキと同様に、自らの欲を捨て切ることは出来ないのだ。

追って、追って、追い続けて。赦し、助け、肩を並べた。彼との記憶は、マサキにとっては決して他の仲間とは持ち得ないものばかりだ。絡み合った記憶と感情の糸。互いに関心を抱くこともなく、道を交わらせることもなく、ただ運命に流されるがままに。

それぞれ何処かで生きていられれば、今日という日の訪れは異なる様相を示していたことだろう。けれどもそうはならなかった。彼は幾度だって窮地を迎えては、奇跡

の復活を遂げてマサキの人生へと戻ってくる。

「本当に嫌であるのならば、腕でも足でも好きなだけでもいいでしょう。あなたにはそれだけの力があるのですから」

「馬鹿野郎……出来るか、そんなこと……」

「どうして？ いっそ心臓を貫かれても構わない。あなたに殺されるのでしたら本望ですよ、私は」

冷えた温もりを伝えてくるシュウの手がマサキの手を取った。そうっと取り上げられた手が、彼の口元に運ばれる。

薄く開いた口元が、マサキの指を咥え込んだ。

指を舐められたマサキは、びくりと腰を浮かせた。シュウに気を吸われた状態とあつては、ささいな愛撫ですら身体に障って仕方がない。なのに、身体の奥底から湧き上がってくる快感。それは歓喜の咆哮を上げて、マサキの心をひと思いに食らい尽くした。

指を舐っては手の甲へと舌を這わせ、手首に口付けてはまた指を舐めてゆく。取り

上げられた右手に与えられるシユウからの愛撫の数々は、マサキの理性を呆気なく溶かしてしまった。欲しくて欲しくて堪らなかったものが、すぐそこに口を開けて迫っている。

はあ……と、息が上がった。

薄らぼやけた視界の向こう側で蠢くシユウの姿は輪郭を僅かに残しているだけだったが、その温もりが何よりも雄弁に彼の動作を伝えてくる。それはマサキを捉えて離さなかった。

ややあって、マサキの手からシユウの口唇が離される。身を屈めてマサキを見下ろしてくる彼の顔立ちは、出来のいい彫刻のように硬質的だ。先程まで露わとなっていた激情はすっかり形を潜め、今となつては残滓が僅かに眦に感じられるのみとなっていた。恐ろしいまでに理性的。彼のそういった自身に対する統制力の強さが、マサキには憎らしくも、また齒痒くも感じられる。

「嫌ではなかったの？」

「動けると思うなよ。こんな状態なんだぞ、俺は」

シユウに与えられた愛撫の余韻冷めやらぬマサキの身体は、小刻みに震え続けている。そうですね。それを認めたのかはわからない。抑揚のない声で頷いた彼はやおらマサキの身体を抱き上げてきた。

整い過ぎたきらいのある顔がにわかにマサキの首筋へと下りてくる。今度のマサキは逃げなかった。シユウの口唇が肌を吸い上げていくのを、時に身体を小刻みに震わせながら、そして小さく声を上げながら素直に受け止めた。

憐れで愚かな男と自分。どちらも逃れ切れない欲に囚われてしまっている。耳に、頬に、首筋に。幾度もシユウの口付けを受けながら、マサキは声を上げ続けた。一枚、また一枚と脱がされてゆく衣服。躊躇いや途惑い、そして恐れはもう感じない。マサキは時に腕を上げ、膝を抜き、彼が自分の衣服を取り払ってゆくのを助けた。

抗い切れない欲に溺れ、堕ちてゆく。

全ての衣服を剥ぎ取られたマサキの身体が、ベッドに横たえられる。しがみ付くように背中中に回されているマサキの手を、シユウがやんわりと解く。そして鎖骨へと下がってゆく頭。鎖骨から肩口、肩口から二の腕、肘窩を経て腋窩。丁寧に肌を這って

ゆく彼の舌に、マサキはその都度、全身をわななかせた。

腋窩から脇腹、そして臍と、シユウの舌は更にマサキの身体を下ってゆく。その頃ともなると、マサキの男性器はすっかり天を仰いでいる有様だった。きつくて苦しくて堪らない。下着はとうに取り去られた後だというのに、しきりと窮屈さを訴えてくる男性器。漲り切ったその先端から雫が滴った。

だのに快感は絶え間なく。彼の舌が生じさせる感覚に呼応するように、マサキの身体を駆け巡るのだ。

臍から下腹、腿と伝って、足の付け根。会陰を舐め上げた彼の舌が、ふっと肌から離れたかと思うとマサキの男性器の先端を吸った。途端に激しく跳ねる腰。自分の身体が自分の意思で制御出来ない。マサキはぶるぶると全身を震わせながら、声にならない声を上げた。

「もう少しだけ、我慢なさい」

僅かに亀頭に触れただけのシユウの口唇の記憶が、まるで水底の藻のように全身に絡み付いている。

滲む世界。いつしか瞳に浮かんでいた涙が、一筋の跡を残して零れ落ちた。マサキは重い両腕を持ち上げて、自身の脛の上に置いた。どうしようもない欲に溺れている自分の浅ましさが、その涙に詰まっているような気がしてならなかった。

背負い切れる筈がないのに。

腿から膝頭、向こう脛、そして踝とシユウの舌が次第に足先へと迫ってくる。はあ、ああ、ああ……っ。顔を腕で覆い隠したまま喘ぐマサキを、彼がどういった思いで眺めているのか。マサキには想像も付かなかったが、彼もまた次第に欲望に溺れていつているのだということだけは理解出来た。

時折、肌を吸い上げながら、足の甲を経て爪先へと辿り着いたシユウが、マサキの足の指を口に含んだ。あ……っ！ マサキは短く声を上げて、頭を仰け反らせた。

幾度も脳裏に蘇らせては自慰に耽った。たつた一度限りの契りの記憶。その記憶が不意に胸の奥で弾け飛んだ。あの時のシユウもこうだった。マサキの全身を舐り尽くした彼は、あまりの快感と、けれども達しきれないもどかしさに懇願したマサキに逆らえないといった様子で、この後孔に自身の男性器を収めてきた。

まだ半分も終わっていない。その現実がマサキを安堵させ、また同時に追い詰めてもゆく。

達いきたい。達いきたくて堪らない。

足裏をじつとりと舐なつていたシユウが、おもむろにマサキの身体を返す。ようやく折り返しだ。マサキは枕に頬を埋めて、両手できつくシーツを掴んだ。たったこれだけの愛撫でも、情緒が壊れてしまいそうだ。

踵からふくらはぎ、膝窩しつか。腿の裏側を辿たどってきた舌が、双丘の谷間を割きつて口を窄せまめている蕾に捻ひねじ込まれる。あ、馬鹿。マサキは顔を上げた。咄嗟に腰を引こうとするも、氣フラインを奪さらわれた身体は簡単には動かせない。指で広ひろげること慣れた後孔が、シユウの舌をすなりと受け入れている。マサキは強くシーツを掴んだ。自身の指では決して得られない感触が、じわじわと染み出すように快感の波を生み出してゆく。

「まだ——ですよ、マサキ」

いつしかシーツに擦り付けるように、腰を振ふつていたようだ。後孔から舌を抜いたシユウがマサキの腰を抱え上げながら、臀部へと口付けを繰り返してくる。気が狂う。

僅かに与えられる解放の兆しが、目的を果たせぬままに離れてゆく。そのもどかしさはマサキの理性を徐々に、だが確実に消失させていった。はやく。マサキはシユウにねだった。恥も外聞も捨てて、早くと声を上げた。

背筋をゆつくりと伝い上がってきた舌が、うなじに触れる。欲しいの？ 訊ねられたマサキは、何度も頷いた。ここはまだなのに。腰から腹を伝って胸へと上がってきたシユウの手が、とうに膨れ上がっている乳首に触れた。

「お、前。この……っ」

ゆつくりと円を描くように動き回る指先に、マサキは口を大きく開いた。あ、ああつ。うなじから首筋と繰り返し辿っている口唇が、時折、きつく吸い上げてはマサキの肌に紅斑を残す。きつと全身、酷い有様に違いない。前回の性行為で残された紅斑が綺麗に消え去るまで一週間を要した。人目を憚りながらシャワーを済ませた日々。けれどもそれは、寂しさをマサキの胸に残すだけだった。

きつと自分はまた後悔をするに違いない。

果てのない飢えに怖れ慄き、それでも自身の性に逆らえず、この男を想って自慰を

繰り返す。わかっている。マサキは自ら彼に行為をせがめない自身の立場を思った。悔しくて辛くて仕方がない。それでもそれがマサキが命を懸けて歩むと決めた道だ。

「いい、加減に……しろ、って……」

しつこくも愛撫を止めないシユウに、またも涙が零れ落ちた。犬のように腰を落として、両腕を突つ張らせて。背後からマサキにしがみ付くようにして愛撫を与えてくる彼に鳴き喘ぐ自分。はやく、しろって、云ってるだろ。繰り返す言葉はこれを限りにするつもりでいるからこそ。

疼きを抱えた後孔が、彼を思つては収斂を繰り返す。

「そんなに挿れ^いられない？」

当たり前だ。マサキは呻くように言葉を吐いた。仕様のない。呆れているようにも、弾んでいるようにも取れる声が耳元で響き渡った。直後、彼の手がマサキの腰を軽く持ち上げてきたかと思うと、熱く昂る肉の塊がその蕾に押し当てられる。

ずるり——と、挿入^はり込んできた彼の男性器に、理性が完膚なきまでに叩き潰される。あつ、あつ、あつ。剥き出しとなつた本能がマサキを一気に飲み込んだ。彼の脈

打つ男性器が、届きたくても届かなかった位置に収まっている。はあ、はあ。マサキは小さく腰を揺らした。動けよ。そしてそう急かすように言葉を吐く。

まだですよ、と、マサキの腰を抱えたシユウが、繋がったままの身体を膝の上に乗せてくる。

膝裏に差し入れられた手が、マサキの足を抱え上げた。「こんなに奥まで飲み込んで」緩く蠢き出した彼の男性器が、マサキの後孔の底を叩き始める。あ、ああ。早くも限界を感じている男性器から、先走った汗が洩れ出た。

「何をしたらこうなるのでしょうかね。ねえ、マサキ」

暗に自慰に耽っていることを仄めかしているのだとマサキは気付いていたが、答えられるような余裕もなければ、反抗をするだけの余裕もない。それに、その言葉は今更でもあった。そもそもマサキがこういった状況に陥ってしまったのは、この男に自慰を目撃されたのが始まりだったのだから。

いいから、もっと動けよ。マサキは絞り出すように言葉を吐いた。じりじりと焼け付くようなもどかしさが肚の底に溜まっている。まるで暴龍を飼っているようだ。解

放の時を待ち望んでいるそれは、もうじき肚から飛び出すことだろう。

「なら、お望み通りに突いてあげますよ」

マサキの足をベッドに戻したシユウが、腕を後ろ手に引いてくる。彼の男性器と深く繋がりが合った後孔に、ずしりとした重みがかかった。抽送を始める男性器。緩く口を開いている蕾を擦り上げては、マサキの意思を攫う。

——ああ、ああ、ああつ。

高く上ずった声が自分のものとは思えぬ甘ったるさで喘ぎ声を紡いでいる。シユウ。シユウ。シユウ。肚の底を叩いては、また抜き取られる男性器。繰り返し、繰り返し。譫言のようにその名を呼びながら、マサキは逸る気持ちを抑えきれずに自らもまた腰を振った。

より深く、より奥へと。そうして彼の男性器を招き入れてゆく。

いずれ脳の奥が散発的な光を放つ瞬間がくる。そうしてマサキは絶頂を迎えるのだ。自慰では得られなかった高揚感の中にいるマサキは、本能が命じるまま、貪欲にシユウに更なる性行為を求めることだろう。

そこから先のことは、マサキにはわからない。シュウⅡシラカワという人間は、手に入れた獲物を容易くは手放さない人間であるのだ。ましてやこのただっ広い施設にふたりきり。科学文明時代の遺跡の奥とあつては、邪魔が入る可能性もない。いや、僅かにはあつたかも知れなかったが、だからといってこの指紋認証の扉を誰が突破出来たものか。

きつと彼はマサキを食らい尽くすのだろう。快樂という餌に引き寄せられた獲物^{マサキ}を。その掌中にマサキは堕ちてゆくのだ。今度こそ。

最終章 巡る

目を開いたマサキは視界いっぱい広がる天井に、ここがまだシユウの部屋であることを覚った。

どうやらシユウは既にベッドを後に行っているようだ。いや、もしかすると、マサキが手足を楽に伸ばして僅かに余る程度の大きさのベッドだ。場所を変えて眠っているのやも知れなかった。

マサキはのそりとベッドから身体を起こした。几帳面な性格は大人になっても変わらざであるらしい。サイドチェストの上にきちんと畳まれて置かれている衣服。だるさの残る身体を引き摺るようにしてベッドから抜け出したマサキは、のろのろと着替えを済ませるとベッドルームを出た。

「起きてきたのですね」

リビングのソファに身体を落ち着かせて読書に励んでいるシユウは、果たして眠り

に就いたのだろうか。マサキは壁に掛かった時計を見上げた。時計が昼を指しているということは、凡そ一日近くが経過したということである。

「懐かしいものを買ったようですね」

彼が手にしている本を眺めてみれば、9歳のシユウが街に出た際に買い求めた中の一冊であるようだ。

「今のお前の知識を理解するには、事前知識が足りないって云つてたからな」

そうですか。どこか懐かしさを感じているような口振りでシユウが頷く。彼は読み進めていた本を閉じると、それをテーブルの上にそうと置いてから、マサキにソファに座るよう促してきた。

「過去の私は今の自分が置かれている環境をどう感じているようでしたか」

「混乱していたんだろうな。でも、受け入れるしかないと腹を括つたんだろ。記憶が戻らなければ、お前の意思を継ぐつもりでいたようだった」

「でしょうね」シユウの瞳がマサキを通り越した遠くへと向けられる。「私のすることですから、何となく予想は付いていましたよ」

それは何処かを見ているようで、けれども何処をも見ていない眼差しだった。

他人の心の機微に疎いマサキは、こうした時に相手が何を考えているのか想像が付かないことが多かった。それでもマサキには、シユウが何を見ているかわかるような気がした。

きつと、マサキの知らない過去を見ているのだ。

だからマサキは、余計な言葉を差し挟むのを避けた。そして、黙って様々に思いを巡らせた。

どうやら彼は始まりから、9歳のシユウが事態に右往左往しているのを眺めていた訳ではなさそうだ。さしもの彼であつても自然の為すことには逆らえなかったのだらう。それならいい。マサキは気掛かりのひとつを清算した。

人の悪い彼は、そうやってマサキを陥れることさえ躊躇わない気がしていた。

そうでなかったことがわかっただけでも、マサキは心が慰めらるような気分になった。たった三日間。9歳のシユウと過ごした日々は、時間の短さに反比例するように密度の濃い記憶をマサキに遺してくれていた。だからこそ。

「何も聞かないのですね」

ふっとシユウの瞳がマサキを中央に焦点を合わせてきた。熱に浮かされたようにマサキの身体を求め尽くした後にしては、落ち着き払った態度。それこそがシユウシラカワという人間の常態であると理解はしていても、遣る瀬無い。

ともに堕ちることを選んだ男は、だからといってマサキとの心の距離を詰めることはしないのだ。

「聞いても仕方のないことだろ。それとも何だ。日記帳の中身を見せなかった割には、聞いて欲しいのか」

「まさか」シユウが乾いた笑いを浮かべる。

「なら、聞かせるなよ」マサキはシユウを真正面に見据えて云った。「俺にはお前は背負えない」

それにシユウは答えなかった。ソファから立ち上がった彼は、飲み物と食べ物どちらを口にしたいかマサキに尋ねてきた。水が飲みたい。マサキは答えた。最後にスーブを口にしてから丸一日が経過している。当然のことながら、喉はからからだ。マサ

キはシュウが用意したミネラルウォーターを殆どひと口で飲み干した。

「帰るぞ」そして最後に残った大事な用事を済ますべく口を開く。

「彼らが帰って来るまでいてくださってもいいですよ」

「冗談だろ。お前とこの後も顔付き合わせて生活しろって？ 俺の役目は終わったんだ。素直に帰らせろよ」

本当に？ 悪戯めいた表情。彼の口元に広がった性質の悪い笑みに、マサキは顔を顰めることしか出来なかった。

長い性行為の終わりがいつだったのか、マサキは覚えていない。

二度ほど達したのは覚えている。

一度目はシュウが動き始めて程なくだった。既に愛撫で充分過ぎるほどに高められていたからだろう。気付いた時にはあつさりと、陰囊に溜まった精液を吐き出してしまった。

二度目は体位を変えて、彼の腹の上。自分で腰を振るように命じられたマサキは、呆気なく射精に至った一度目の鬱憤を晴らすように、後孔に咥え込んだ彼の男性器を

貪り尽くすが如く思うがまま腰を振った。その終わり際だった。両手を掴まれて、嫌というほど突き上げられた。

深く収まった彼の男性器はマサキの肚の底を叩くように、小刻みに振動を繰り返した。

快感の波が引き切るより先に、尤も弱い部分を叩かれ続ける。それはマサキの置かれている状況を一変させた。下ることなく上り続ける快感の波。ああ、ああ。くる。そう思った次の瞬間、視界が真っ白に弾けた。

何が起こっているのかわからないぐらいの快感。上に向かっていているのか、それとも下に向かっていているのか。重力を無視した浮遊感に包まれながら、どろどろと溢れ出た精液を吐き出し切った。そうして、視界が暗転した。

それがマサキのシユウとの性行為の最後の記憶だ。

「……帰るったら帰る。プレシアにしてもそうだし、シロとクロにしてもそうだ。何も云わずに出てきちゃった」

探るような眼差しがマサキを窺っている。それはこれで終わりにしていいのかとい

う、彼からの最後の確認のようだった。とはいえ、マサキに欲がある彼は決してそうは思っていないに違いない。機会があれば次も——そう心の奥では望んでいることだろう。

要はマサキの受け止め方次第であるのだ。マサキは彼との関係を終わらせたかった。本能に抗えず、幾度だつて彼の掌中に堕ちてゆく自分を止めたい。そう、この関係に行き場がないことを知っているからこそ、

「そろそろサイバスターにも乗りたいしな」

マサキはシュウに笑いかけた。

正直、未練はある。マサキはこれからの長い月日を思った。身体が彼の温もりを欲しがって夜泣きをする。そんな夜を、後だけだけ過ごさねばならないのだろう。考えただけで気が遠くなる。

それは死ぬまで続く永劫の苦しみだ。

それでもマサキはこの立場からは降りられないのだ。魔装機神操者。マサキがこの立場を降りる時は、ラ・ギアスを後にして地上に戻る時だ——。

「なら、送って行きましょう。あなたひとりでは、いつ家に帰り着けたものかもわからないでしょう」

腹の探り合いはこれまでだ。マサキはほうつと息を吐いた。話を切り上げるように再び立ち上がったシュウに続いて腰を上げる。そして、彼を追うようにして部屋を出る。その扉が閉まり切る前に、マサキは9歳のシュウを思いながら室内を振り返った。沢山の会話を彼と交わした部屋。そこに彼はもういない。

——これで良かったんだ。

テリウスのこと。サファイネのこと。モニカのこと。管理室を抜けて格納庫に向かうまでの道のりを、今となつてはどうでもいい会話にマサキは費やした。彼らは元に戻ったシュウの存在を当たり前に感じるのだろうか？ それとも今回ばかりは悦びに舞い上がってみせるのだろうか？ 心の端にも引つ掛からないようなことを考えながら、マサキは格納庫に出た。

淡く光を放っている青銅の騎士は、主人の帰還に気付いたようだった。ニュートラルに保たれたシステムが、シュウを目の前にした瞬間に唸り声を上げた。待たせまし

たね。シユウもそれに気付いたのだろう。愛機にそう声をかけると、コントロールルームへと続くパーツを開いたグランゾンに乗り込もうとする。

そこで彼はふと思い出した様子で動きを止めた。

「そう云えば、レシピを教わっていませんでしたね」

9歳のシユウが気に入ったらしい玉葱のグラタンスープ。それを云っているのだと、直ぐに察しが付いた。

「誰がお前に教えるかよ」マサキは声を上げて笑った。「プレシアの大事なレシピだぞ」

そう口にした瞬間、泣き出してしまいそうな感情の波がマサキに襲いかかった。脳裏に過ぎる9歳のシユウの無邪気な笑顔。それをマサキが目にすることはもうない。

そう、もうないのだ。

肩を竦めてみせたシユウを目の前に、マサキは目を細めた。

涙は、出なかった。

記憶の底 ReBirth

発行日 2024 年 4 月 14 日

著者 @kyo
<https://www.pixiv.net/member.php?id=5201329>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
